エ1-E-13

帝國百科全書

第百十七編

日本儒學史

文學士 久保天隨著

明治三十七年十一月出版

東京博文館藏版

文學士久保天隨著

日本儒學史

東京

博文館藏版

121.3 Ku 745n

戰國時代朱學の泰斗

桂菴玄樹禪師示寂の後、正に四百載

南信兜城の處士久保天隨、その稀世の學德を追慕するの餘、謹で此書を撰し、聊か蘋藻の奠に代へ、こゝに誠信の微衷を表す。

明治三十七征露の年十月

121.3
Ku 745n

225507

久保天隨最近撰著

博文館刊行	
東洋通史	全十二卷
四書新釋	全六卷
文章軌範精義	全六卷
日本儒學史	全一卷
近世儒學史	近刊
日本詩文史	近刊

序

たとひ髮を被りて左衽するの甚しきに至らずとするも、若し儒學の傳來及び講習を微つせば、この島帝國、文化の發達、極めて遲々たりしや、蓋し疑ふべからず。然らば又何ぞ、六師海を航し、曼珠の舊地、醜虜膽を破るの大快事あるを得むや。今夫れ、日星を摩盪し坤軸を震撼する大海の觀をなし、而かも深山巖罅の水一滴、これが源を爲すに想及せざるもの、その愚や、實に及ぶべからず。日本儒學史の撰述、予、豈に徒爾ならむや。

凡そ儒學の源委を考究せしもの、河井靜齋の斯文源流・那波魯堂の學問源流・杉浦正臣の儒學源流の如き、古來その書に乏しからずと雖も、皆之を惺窩羅山以後、覇府時代に限り、絕えて、其上に及ぶものあらず。唯だ天保年中、薩藩伊地知季安の著に係る漢學紀源の一

書、王朝の事、時に缺然たるものあり、且つ往々にして選擇を誤ると雖も、五山の學術文章を叙する、頗る觀るべきものあり。然れども、惜いかな、未完の稿本に屬し、世殆んど之を傳へざるを奈かむ。予が此著は、主として、漢宋二學の輸入・講習・弘布の跡に就いて、微力及ぶ限りの確整を期せり。庶くは、從來學界の缺典を補ふに足らむか。

顧れば、予が此志を抱くや、固より久しきのみ。さきに北村香陽の大學に在るや、常に予に從つて遊び、又均しく此に意あるを以て、遂に相謀り、その分擔を定め、香陽は、主として五山時代に就いて研究し、ともに他日の大成を準擬せり。而して、二年前、香陽禹域に航し、譯書の任に山東に就くや、その夙約を履む能はざるを謝し、河梁秋を分つの日、予に贈るに書一篋を以てす。胠いて之を觀れば、明清名家の集數部を除いて、悉く抄錄手記の類、その心力を費して拾蒐せし

ものに係るを知る。予之を獲て、欣喜措かず、之を磨練し、之を拂拭し、以て今日に至り、略ぼ撰述の規畫を成すを得たり。偶ま今茲桂菴歿後四百年に當るに想及するや、急に筆を執り、その梗概を叙して、この一卷をなす。而かも、尚ほ聊か後年を期するの志あること、言を俟たず。

この書、しばらく筆を戰國の末に絶ち、續篇は別に題して近世儒學史といふ、その稿、亦た略ぼ成れるが故に、上木の日、決して遠からざるを公言するに憚らず。この兩書を併せて、二千年間、天朝儒學の盛衰起伏、一目瞭然、掌上に睹るの概あるを得むか。唯だ夫れ、主とするところは、儒家の行跡及び傳統に在るを以て、學說辭藻等の批判に至りては、概ね簡略を旨とし、語つて未だ詳かならざるものあり。目下準備中なる東洋倫理史要後篇日本の部及び又次いで本叢書

に收むべき日本詩文史の兩書は、實に這般の闕漏を補苴せむが爲にす。その併せて世に出づるの日、讀者之を參看すれば可なり。

海の內外を問はず、儒門の士、貴ぶところは、純明剛毅の氣風に在り、之を一概して、學問よりも、人物を以て重きを爲すもの、むしろ多しと爲す。こゝに於てか、古人を尙友するの念あるもの、儒學史の研鑽によりて、大に益するところあるや、必せり。予が本書に於ける、亦た微意なきに非ずと雖も、後生鹵莽の資、動もすれば、罪を前哲に得むことを懼るゝのみ。

明治三十七年十月

著者識

日本儒學史目次

叙論……一頁

第一篇　漢學講習時代

第一章　應神以前漢籍傳來の有無……七
第二章　漢學講習初期の概況……一八
第三章　隋唐の交通……三〇
第四章　大寶以後學制の一班……三四
第五章　奈良朝の儒家……四四
第六章　吉備眞備……五〇
第七章　王朝學風の盛衰……五四
第八章　菅氏……六四
第九章　江家……六八

第一〇章　滑原頼業……七六

第二篇　宋學輸入時代(上)……五山時代

第一章　五山時代の學風……八〇
第二章　朱子學の傳來……九八
(上)　山内
第三章　虎關……一一〇
第四章　中巖……一二三
第五章　玄慧……一二七
第六章　夢窓……一三〇
第七章　義堂……一三三
第八章　夢巖……一四八
第九章　岐陽……一四九
第一〇章　一慶……一五七

第一一章　惟肖……一五八
第一二章　景徐……一六〇
第一三章　蘭坡……一六一
第一四章　桂悟……一六二
(下)　山外
第一五章　朝廷儒者……一六七
第一六章　金澤文庫……一七四
第一七章　足利學校……一八〇

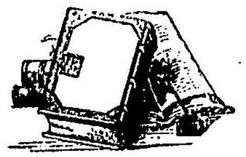
第三篇　宋學輸入時代(下)……戰國時代

第一章　戰國時代の學風……一八七
第二章　桂庵……一九五
第三章　桂門の英俊……二〇五
(上)　日薩儒學

第四章　舜田……二〇八
第五章　島津日新齋……二〇九
第六章　月渚……二一三
第七章　一翁……二一六
第八章　黃友賢……二一八
第九章　文之……二二一
第一〇章　如竹……二二五
第一一章　藤原惺窩の南航……二二七
（下）南學
第一二章　南村梅軒……二三四
第一三章　梅軒門下及び三叟……二四四
第一四章　谷時中……二五〇
第一五章　南學の流布及び革造……二五三
餘論……慶長の文藝復興と覇府學術の一斑……二五八

附錄……五山戰國儒學傳統略表……二八〇

目次終



日本儒學史

文學士　久保天隨著

叙論

こゝに謂ゆる儒學は、支那上古北方漢族の間に發生し、その後、萬古不易の國教として標章されし孔孟の教義を基礎とし、或は之に附隨し、或は此より發展した る漢唐宋明の學術を併稱するものにして、その日本に於ける影響感化、詳言すれば、その講習・研究もしくは革造の跡を、歴史的に叙述したるもの、即ち日本儒學史なりとす。予が撰述の目的、亦た實に此に外ならざるなり。

若し日本に於ける國民哲學の存在を論ずれば、之を最近三百年間に限らざるべからず。然り、覇府時代の學術は、直に支那宋明理學の後を嗣ぎ、東洋哲學史の最終部分を形成すると同時に、今後愈よ發達して、無限の進程を趁ふべき約束を有

す。勿論この間に發生したる抑思特見は、常に主として儒教の上に成立するが故に、純然たる思想發達の關係上、その準備の狀勢に就いて考察するところなかるべからず。さばれ、わが國民哲學は、儒教の外に、少くとも、なほ二種の要素を包含す、神道と佛教と、即ち是れなり。こゝに於てか、たとひ、その大部分は、相互に共通なりとするも、謂ゆる儒學史は、嚴格なる意義に於ける日本哲學史に比して、その研究の範圍、自ら異なるものあるを忘却すべからず。

日本儒學史と日本哲學史との差違

儒學の起伏

儒學の始めて傳はりしは、今を去る千六百年の前に在り。而して、その思辨研究の盛、過去三百年間に在りとすれば、その準備の時期、千三百年に過ぐ。何ぞ其れ久しきの甚しきや。その故、他なし。その初、講習せしものは、漢唐訓詁の學にして、絶えて、思索の動機に接觸せず。加ふるに、佛教大に行はれし結果、その勢に壓倒せられて、大開展なすの機會あらざりしに因る。

神儒佛三教の歷史的概觀

本邦歷史の濫觴たる神話は、實に民性の映照にして、磨滅すべからざる社會心象の表章なり。吾人の祖先は、他の古代民族に見ると同じく、身邊を圍繞する自然現象を人化し、祖先の靈を現實に顯彰し、或は兩者を拉雜混同し、その極、無數の神

靈を造成し、皆下土を支配する者と考へしと雖も、未だ萬有を一大主義に還元して、宇宙の本體を解釋するに及ばず、居然として、多神教の畛域内に跼蹐し、謂ゆる神道は、遂に自力を以て發達するを得ず、唯だ一種の祖國的精神として、長しへに存留したるに過ぎず。こゝに於てか、比較的完全なる體制を有する外國思想は、相次いで輸入され、就中佛教は儒教に比して、その理論、はるかに深邃高遠、且つ崇拜すべき明晰なる對象を有し、人心に慰安を與ふる點に於ては、殆んど比較外に在るを以て、直に盛行し、深く、その根蔕を國民精神の最奥底に托しぬ。見よ、佛教の始めて來るや、歷史上に特殊なる一大騷擾を惹起したるに拘らず、終に之に克つを得たりしを。奈良朝歷世、皆佛を信じ、之に聯關して、諸種藝術の進歩、頗る觀るべきものあり。次いで、空海傳教等、諸名僧の出づるあり、就中空海に至りては、之と本邦古來の崇拜とを調和し、その基礎をして、愈よ牢固ならしむるを得たり。更に降つて、法然親鸞日蓮等に至りては、愈よ之を日本化し、ひたすら、信念を鼓吹するに力めたり。かくの如くして、宋代理學の傳來及び弘布を見るまでは、佛教ひとり絶霸的威力を以て、國民の精神的生活を支配せり。

その終局の趨勢

宋代の理學は、印度思想を參酌して形成されしものなるが故に、その初は、佛教の輔助を得て我が邦に行はれしが、やがて次第に盛運に向ふや、究極の目的相異なるが故に、必然の勢、全く相分隔し、各自獨立の存在をなし、相並んで近代の學術界に流注し、その間、犖圃の甚しき、之を大にしては、互に他に對し、之を小にしては、各自の小分派に關し、急渦旋廻、しばらくも歇まず、その盛、正に前代に軼す。こゝに於て、神道も亦た之に促進せられて、多少の學理的體制を形成するを得、三者滙合して、遂に今日に至れるなり

儒學史上時期の區劃

されば、日本に於ける儒學の變遷は、明かに三大時期を劃す。漢學講習時代、宋學輸入時代、諸學競起時代、即ち是れなり。

漢學講習時代

(一)上世期—漢學講習時代……應神天皇の十六年、はじめて漢學を傳へてより、鎌倉幕府の創立に至るまで、殆んど千年。その間、常に隋唐と交通せしを以て、學制の如きも、すべて彼に摸倣し、大學國學を設置して、人材を養ひしが、講習するところ、すでに訓詁に在るを以て、その學の特質上、毫も進歩せず、加ふるに一般の俗、文華を重んぜしを以て、愈よ其勢を助長し、後に學校の衰ふるや、專門の家學となり、形式的に之を傳承し、且つ授受したるに過ぎず。

宋學輸入時代

(二)中世期—宋學輸入時代……鎌倉時代、武人皆禪を好み、僧侶の宋元に來往するもの多く、因つて、始めて宋學を輸入し、多少禪理と契合するを認知するや、漸く之が講習に向へり。そも宋代性理の學は、朱晦菴に至りて大成し、從來發生せし諸種の哲學思想を併せて、整然たる一大體系を形成せり。而して、朱學の書の我が邦に傳はりしは、その沒後、多く年所を經ざる時に屬す。但だその講習の甚だ遲々たるは、當時の朝臣、氣力なく、武人未だ文華に習はず、唯だ桑門に行はれしに因る。北條氏、すでに倒れて、足利氏の世となるや、士庶漸く禪に倦み、仍つて性理の學は、代つて其地を占むるの趨勢を示せり。尋いで、應仁亂後、京畿の戰塵、地を捲いて起り五山の法燄、魔風に飜るや、學僧四方に散じ、之を天下に弘布し、その極、僧裝せる醇儒を出すに至り、その化の布くところ、後年江戸覇府時代に隆昌なる學藝の素地を作りぬ。予は、便宜上、之を分つて、五山時代、戰國時代の二小期となさむ。前者は、之を輸入し、之を批判し、之を講習したる時代にして、後者は、主として之を弘布したる時代なり。

その終局の狀勢

宋代の理學は、印度思想を參酌して形成されしものなるが故に、その初は、佛教の輔助を得て我が邦に行はれしが、やがて次第に盛運に向ふや、究極の目的相異なるが故に、必然の勢、全く相分隔し、各自獨立の存在をなし、相並んで近代の學術界に流注し、その間、拏闘の甚しき、之を大にしては、互に他に對し、之を小にしては、各自の小分派に關し、急渦旋廻、しばらくも歇まず、その盛、正に前代に軼す。こゝに於て、神道も亦た之に促進せられて、多少の學理的體制を形成するを得、三者滙合して、遂に今日に至れるなり

儒學史上時期の區劃

されば、日本に於ける儒學の變遷は、明かに三大時期を劃す。漢學講習時代、宋學輸入時代、諸學競起時代、即ち是れなり。

漢學講習時代

(一)上世期—漢學講習時代……應神天皇の十六年、はじめて漢學を傳へてより、鎌倉幕府の創立に至るまで、殆んど千年。その間、常に隋唐と交通せしを以て、學制の如きも、すべて彼に摸倣し、大學國學を設置して、人材を養ひしが、講習するところ、すでに訓詁に在るを以て、その學の特質上、毫も進歩せず、加ふるに一般の俗、文華を重んぜしを以て、愈よ其勢を助長し、後に學校の衰ふるや、專門の家學となり、形式的に之を傳承し、且つ授受したるに過ぎず。

宋學輸入時代

(二)中世期—宋學輸入時代……鎌倉時代、武人皆禪を好み、僧侶の宋元に來往するもの多く、因つて、始めて宋學を輸入し、多少禪理と契合するを認知するや、漸く之が講習に向へり。そも宋代性理の學は、朱晦菴に至りて大成し、從來發生せし諸種の哲學思想を併せて、整然たる一大體系を形成せり。而して、朱學の書の我が邦に傳はりしは、その沒後、多く年所を經ざる時に屬す。但だその講習の甚だ遲々たるは、當時の朝臣、氣力なく、武人未だ文華に習はず、唯だ桑門に行はれしに因る。北條氏、すでに倒れて、足利氏の世となるや、士庶漸く禪に倦み、仍つて性理の學は、代つて其地を占むるの趨勢を示せり。尋いで、應仁亂後、京畿の戰塵、地を捲いて起り、五山の法旆、魔風に飄るや、學僧四方に散じ、之を天下に弘布し、その極、僧裝せる醇儒を出すに至り、その化の布くところ、後年江戸覇府時代に隆昌なる學藝の素地を作りぬ。予は、便宜上、之を分つて、五山時代、戰國時代の二小期となさむ。前者は、之を輸入し、之を批判し、之を講習したる時代にして、後者は、主として之を弘布したる時代なり。

諸學競起時代

（三）近世期―諸學競起時代……最近三百年、奎運の盛、支那の春秋戰國及び宋代と相若く。支那宋明の間に並注せし朱學と陸王の學とは、ともに一たび五山に入り、覇府學術の源泉をなし、その流、混々として盡きず。之に次いで、漢唐の古學あり。この三大學派の間に搖曳するもの、折衷學あり。儒道神佛四教を融會せむとする調和派あり、全然他に資するところなき獨立學派あり。自己に體系を構成するよりも、むしろ他の瑕疵を駁擊せむとする批評學派あり。四民の制、儼存し、庶人學に疎遠なるの弊を救濟せむとする平民教派あり。その多樣多趣なる、わが國民の人文史を重からしむること、果して幾何ぞ。予は、之を分つて、創始時代、繼承時代、頽破時代の三小期となさむとす。

木齋叙述の對象

この卷、述ぶるところは、前の二大時期に止め、主として、從前全く閑却されし許多の事實を闡明するを期し、最後の一は、卷を別にして、纂述せむと欲す。その他、故なし、事項の多端にして、紀述の複雜なる、到底僅少の紙數を以て、滿足する能はざればなり。

第一篇　漢學講習時代

第一章　應神以前漢籍傳來の有無

日本道德思想の根源

東海中の神區たる我が日本は、皇統一系、天璜長しへに涸れず、神鬼呵護、金甌缺なく、その國體、すでに宇内に冠絶す。紀記等の古典、述ぶるところの神話及び口碑を考ふれば、一種の祖國的精神、極めて明晰なる表顯をなせしを觀るべし。謹んで按ずるに、天祖　大日孁貴の德たるや、窺測すべからずと雖も、之を三神器に徵すれば、得て言ふべきものあり。鏡の明、劍の武、玉璽の仁信、萬世彝倫の道、すでに皇せり。故に近世水戸の儒者會澤安、その著新論に於て、言を爲して曰く。むかし天祖肇めて鴻基を建て、位は即ち天位、德は即ち天德、以て天業を經綸す。細大の事、一として、天に非ざるものなし。德を玉に比し、明を鏡に比し、威を劍に比し、天の仁に體し、天の明に則り、天の威を奮ひ、以て萬邦を照臨し、天下を以て皇孫に傳ふるに迨ぶや、手に三器を授け、以て天位の信となし、以て天德に象つて天工に代り、天職を治し、然る後、之を千載世に傳ふ。天孫の胤、儼として、其れ犯すべからず。君臣の分

定まつて大義以て明かなり。天祖の神器を傳ふるや、特に寶鏡を執つて祝して曰く、此を視ること、猶ほ吾を視るごとくせよ、と、而して、萬世奉祀、以て天祖の神となし、聖子神孫、寶鏡を仰いで、影を其中に見る。見るところの者は、即ち天祖の遺體、而して視るは猶ほ天祖を視るがごとし。こゝに於てか盟誓の間、神人相感じ、以て已むべからず。その遠を追ひ、孝を申べ、身を敬し、德を修むる、豈に已むを得むや。父子の親、敦くして、至恩以て隆なり。天祖すでにこの二者を以て、人紀を建て、訓を萬世に垂る。夫れ君臣なり、父子なり、天倫の最も大なるもの、而して、至恩內に隆にして大義外に明かに、忠孝立つて、天人の大道、昭昭乎として其れ著はる。忠は以て貴を貴とし、孝は以て親を親とす。億兆の能く心を一にし、上下の能く相親しむ、まことに以あるなり。若し夫れ、至敎の不言に存する、百世日に用ひて知らざるものは、これ其故何ぞや。天祖天に在まし、下土を照臨し、天孫誠敬を下に盡し、以て天祖に報ゆ、祭政維れ一、治むところの天職、代るところの天工、一として、天祖に事ふる所以に非ざるはなし。祖を尊び、民に臨み、すでに天と一、故に天と悠久、亦た其勢の宜しく然るべきなり、と。天祖の言、後に驗あるに因り、以てその德の前に基づくを知る。

外國思想輸入の理因

朝鮮の上古

上下古今、百世と雖も、亦た直に察すべきのみ。嗚呼何ぞ其れ盛なる。然れども、我が朝、もと武を以て國を立て、神武以還、十數世、景行仲哀に及ぶるの間、東邊西陲、なほ時に變故あり、難を靖し、亂を戡むるの間、未だ文敎に暇あらず、而して、三韓の交涉、夙に頻繁にして、文字圖籍、皆先づ彼より之を傳へ、因つて創搬を爲すに及ばず。その後、隋唐と使節を往來するや、制度典章を輸入し、次いで之を日本化し、一種の特色を發揮し、以て今日に至れり。言ふ勿れ、我が邦人は、摸倣自ら喜ぶの民なりと、吁戲何ぞ其れ然らむ。天の我が邦に祚する、二十世紀以後に於て、世界的大活動をなし、やがて、赫々の功業、宇內を混同するに至らしめむとす。之を、彼の支那が生れながらにして老人たるに比すれば、我は常に壯年なるもの、豈に長しへに摸倣をするものならむや。予は、倣の凶德なるを知ると雖も、さばかりの理由なく、徒に短き過去を見て、悠久なる將來の趨勢を察するに及ばず、直に以て自ら小にするの惑を爲さゞるなり。

上古の文化は、その大半、之を支那より傳へしと雖も、その媒介たるものは、實に朝鮮なりき。然り、朝鮮の人文、亦た之を支那に承く。檀君が太白山に降り、王儉の故

上古の海外交通

城(今の平壤)に都し、子孫相繼ぎしといふ開國の傳說は、遊離神話の一條にして、その群、固より考ふべからずと雖も、殷の箕子、周に臣たるを欲せず、去つて遼東地方に往き、八條の敎を設け、殷民五千、相從ひしといふは、朝鮮文化の起源を說明するものに外ならず。その後、燕人、衞滿、箕氏を南方に逐ひ、子孫相繼ぐこと、三世凡そ八十七年。尊いて古朝鮮の版圖、漢に入りしと雖も、箕氏の餘裔は、馬韓に王たるもの數十世、秦の遺民の國をなせし秦韓即ち辰韓、及び弁韓と相並んで、はじめて三韓の稱あり。その末運に瀕するや、高句麗・新羅・百濟の三國、新に興り、鴨綠以南の半島を分割して、鼎峙の勢をなし、駕洛即ち任那の一國は、その東南隅に偏在し、爭戰長しへに絕えざりき。

こゝに、太平洋中の日本と半島の朝鮮と、その交涉の起原、亦た頗る古るし。予は、素盞嗚尊の子五十猛命を以て、檀君に擬するの可否を知らず、又素盞嗚尊、大國主を生みし後、去つて韓に之きしといふ傳說の眞僞を詳にせずと雖も、大國主が一代豪雄の資を以て、出雲に負嵎し、新羅及び常世國と通じ、又天孫瓊々杵尊、吾田岬の韓國に通ずるの便を以て都を定めしを見て、海外交通の、國初より、すでに久しきを信ず。而して、朝鮮の史には、倭人瓠公が、新羅の始祖赫居世の大業を翼贊せし一事跡を載す。次いで新羅の王子天日槍の投化は、垂仁天皇の三年に在りといへども、むしろ神代となすべきが如く、又蘇那曷叱智の東に來るあり。その後、駕洛國の請により、鹽乘津彥を遣して、その鎭將となし、その地を任那と改稱し、日本府を搬めしことあり。支那との交通は漢書に「倭人百餘國、歲時來獻す」といひ、後漢書に「山島に依つて居をなす、凡そ百餘國、武帝朝鮮を滅してより、使譯を通ずる三十餘國」といひ、光武の中元元年、委奴國王に印綬を賜ひしことあり。おもふに、當時邊境國造中の有力者、直接に支那と交通せしこと、蓋し多かりしなるべし。その我よりするものは大抵韓地に由りて帶方郡に至り、彼よりするものは、對馬・壹岐を經由し、筑紫の西陬に至る。兩國の史乘、殘闕多く、往々にして信を取るに足らずと雖も、如上の趨勢は、斷じて、疑惑を其間に挾むべからざるなり。

上古文字の有無

支那・朝鮮は、固より同文の國、我が邦、之を交通せし以上、その文字を傳へしを想像すること、斷じて理なしとなさず。況んや、我が邦當時未だ文字の發明あらざりしに於てをや。神代文字の有無を論ずるもの、左右の祖を分つを常とすと雖も、そ

應神以前漢字使用の形跡

の之ありとなすは、彼の日文（ヒフミ）及び天名地鎮（アナイナホツマ）、秀眞、或は薩人書、肥人書の類を認めて、上古の物となすに因る。齋部廣成の古語拾遺に「上古の世、未だ文字あらず、貴賤老少、相傳へ、前言往行、存して漏さず」といへるもの、以て其證となすべし。之に次いで三善清行が昌泰四年革命勘文には「上古の事、皆口傳に出づ、故に代々の事、遺漏すべし」といひ、大江匡房は「我が朝、はじめて文字を書して結繩の政に代るは、應神の朝に創る」といへり。貝原益軒、之を承けて曰く、我が邦、上世文字なし、古語拾遺及び匡房の筥崎廟記を讀んで知るべきのみ。この二書は、古代の作、左證となすべし。或は以て上世國字ありとなすものは妄說なり、これ無稽の言、信ずべからず、と。

たとひ、確證なしと雖も、應神以前、少くとも、支那朝鮮交通の衝に當りし筑紫地方等に於ては、必ずや、漢字の使用を試みしものあるべく、韓地より投化せしもの又漢字を知らずといふべからず。榊原芳野が「橿原定都の後九百年餘、其間外國人の來るものあれども、未だ文字を齎らし來るものあらず。蘇那曷叱智・天日槍來ることあれども、其頃は、韓國にも未だ文字あらずと見えて、傳はれる者なし」といひしは、朝鮮の史乘を考究するを閑却せしものにして、斷じて、早計に失するを免れず、或は他に其證あるか。予は、應神以前の漢字使用を言ふと雖も、固より、當時すでに盛なりしとは言はず。おもふに、海外の使輸を主とし、或はその音訓を假りて、時に國語を記せしに止まりしや必せり。或は曰く、蓋し譯部ありて、漢字を訓讀せしか、と。今考ふべからざるのみ。

圖書典籍

文字すでに或は之を傳ふ、圖書典籍は如何。これ今日に在りては、殆んど推究するを得ざるものにして、たとひ、精緻の研鑽を積むと雖も、屢ば言へる如く、古史殘闕多きを奈かむともするなきなり。

徐福東航の俗說

こゝに一言すべきは、徐福の事なり。歐陽修の日本刀歌に曰く、傳聞其國居大島、土壤沃饒風俗好、其先徐福詐秦民、採藥淹留丱童老、百一五種與之居、至今器玩皆精巧、前朝貢獻屢來往、士人往々工詞藻、徐福行時書未焚、逸書百篇今尙存、今嚴不許傳中國、舉世無人識古文、先王大典蔑夷貊、蒼波浩蕩無通津、令人感激坐流涕、鏽澁短刀何足云、と。今按ずるに、徐福海に浮んで歸らざりしは、始皇二十八年にして、我が孝靈天皇七十二年に當る。若し徐福果して我が邦に入りしとすれば、大陸思想の傳來に關して、幾分の光明を放つものといはざるべからず。然れども、予が見にして

誤なくむば、徐福東航の說は、秦漢以後、東海殊に日本の地人に對する空想と聯結し、支那神仙譚の一部を形成せしものにして、その本は、斷じて彼に在り、後に及びて之を我に傳へしものなるや必せり。徐福が航着せし地の何處なるかに就いて、諸史の傳ふるところ、聚訟紛々として決せず。後漢書の東夷傳には、倭國の條下に附記して、「又夷洲及び澶洲あり、傳へて言ふ、秦の始皇、方士徐福を遣し、童男女數千人を將ゐて、海に入つて、蓬萊神仙を求めしむ。得ず。徐福誅を畏れて、敢て還らず、遂に此洲に止まる。世世相承けて、數萬家あり。人民時に會稽に市す。會稽東冶縣の人、海に入つて行くや、風に遭ひ、澶洲に至るものあれども、所在絕遠、往來すべからず」といひ、章懷太子の注、沈瑩の臨海水土志を引いて、「夷洲は海の東南に在り、郡を去ること七千里」といへり。澶洲又或は其近傍か。而して、兩者固より、我が日本に非ず。次いで北史隋書の如きは、秦王國の一部となせしも、その地、固より考ふべからず。その明かに之を日本となせしものは、義楚六帖・太平御覽等にして、疑もなく、唐代之を我が邦に傳へしならむ。後に五山の詩僧絕海明の太祖に謁し、徐福の事を問はるゝや、詩を賦して、「熊野山前徐福祠、滿山藥草雨餘肥」といへり。絕海果して本づくところありしや否や、固より考へ知るべからず。こゝに於て、同時の宋濂は、日本曲に於て、「紅雲起處是蓬瀛、十二樓臺白玉京、不知秦世童男女、還有兒孫跨鶴行」といひ、この前後より、徐福漂着の地を以て、日本の紀伊、而かも熊野の近傍となすに至り、今は儼たる一故蹟となれり、然れども、亦た何ぞ古しへの歌枕、源氏名所の如く、後人の揑造に係らざるを知らむや。絕海の詩に謂ゆる徐福の祠は、紀伊風土記に、何時の比か、飛鳥井神社に移せり」とあり、而して、飛鳥井神社は、今や紀伊新宮の町端、蜑家漁屋の間に在り、徐福の祠と稱すべきもの、固より見えず。唯だ同町の南方、字を熊野地と呼ぶ處、田疇の間に、徐福の墓といふものあるのみ。橘南谿の西遊記に曰く、徐福の塚は、新宮の町の濱手の畑中に在り、古木五六株ありて、石碑に秦徐福墓と彫付たり。其船より初めて陸にあがりたりし地は、新宮より六七里も東にて波多須村といふ所なり。此所の古老の云ひ傳へに、徐福十二月波多須村の矢賀の磯に、暫く住居し、後に本宮・新宮・那智のあたりに移り住めり。波多斯村の矢賀丸山といふところに蓬萊山といふ楠ありて、小き社もありしに、三十年ばかり以前の洪水に、社も楠も流れ失せぬとなり」と。紀伊の海岸は、太平洋中、暖流の洗ふとこ

ろにして、徐福が諸方を泛遊せし後、此地に漂着せしを想像するは必ずしも當らざるに非ざれども、區々の口碑、豈に信ずるに足らむや。況んや、その遺蹟、又この一所に限らざるに於てをや。筑後の北境、山内村に童男山あり、相傳へて、徐福が拉し來りし童子等の老死せしところといふ。近世の名僧徹定、かつて憑弔の什あり曰く、徐福居何處、尚喚童男村、欲問長生藥、石人默不言、と。之を要するに、徐福の事、固より考ふべきなく、羽後の雄鹿に蘇武の祠ありといひ、尾張の熱田に楊貴妃の廟ありといふと相似て、斷じて、齊東野人の語たるに過ぎざるなり。

神功皇后の征韓

之に次いで、特記すべきは、神功皇后征韓の役なり。書紀の文に曰く、冬十月己亥の朔辛丑、和珥津より發するの時、飛廉風を起し、陽侯浪を擧げ、海中の大魚、悉く浮んで船を挾む。大風順に吹き、帆舶波に隨ひ、櫂楫を勞せず、便ち新羅に至る。時に隨船の潮浪、遠く國中に逮ぶ。新羅王、こゝに於て、戰戰栗栗、身を措くに所なく、諸人を集めて曰く、新羅國を建てゝ以來、未だ嘗て海水の國を凌ぐを聞かず、若しくは天運盡きて、國海となるか、と。この言、未だ訖らざる間、船師海に滿ち、旌旗日に耀き、鼓吹聲を起し、山川悉く振ふ。新羅王、遙に望んで以爲へらく、非常の兵、將に己が國を滅せむとす、と。嚮焉として志を失ふ。乃ち今醒めて曰く、吾聞く、東に神國あり、日本といふ。亦た聖王あり、天皇といふ、と。必ず其國の神兵ならむ、豈に兵を擧げて以て拒ぐべけむや、と。即ち素旆にして自ら服し、素組して以て面縛し、圖籍を封じ、王船の前に降り、因つて叩頭して曰く、今より以後、長く乾坤と伏して倚部となり、その船柁を乾かさずして、春秋には馬梳及び馬鞭を獻じ、復た海の遠きを煩はず、以て毎年男女の調を貢せむ、と。重ねて誓つて曰く、東の日、更に西に出づるは且く除き、阿利那禮の河、返つて逆に流れ及び河石昇つて星辰となるに非らずむば、殊に春秋の朝を闕き、忍んで梳鞭の貢を廢するとき、天神地祇、ともに討て、と。或は曰く、新羅王を誅せむと欲す、と。こゝに於て、皇后曰く、はじめて神教を承け、金銀の國を授かる、と。又三軍に號令して曰く、自ら服せしを殺す勿れ、今すでに財の國を獲、亦た人自ら降服す、之を殺すは不祥なり、と。乃ち其縛を解いて倚部となし、遂にその國中に入り、重寶府庫を封じ、圖籍文書を收め、即ち皇后杖しところの矛を以て、新羅の王門に立て、後葉の印となす。こゝに於て、高麗百濟の二國、新羅の圖籍を收めて日本國に降りしを聞き、密にその軍勢を伺はしめ、勝つべからざるを知り、自ら營

外に來り、叩頭して嘆じて曰く、今より以後、永く西蕃と稱し、朝貢を絶たず、と。故に因つて以て、內宮家を定む、これ、謂ゆる三韓なり、と。之を彼土の史に見るに、新羅沾解王の時、倭人の來襲を被りしといふの外、絶えて詳悉なる紀述を存せずと雖も、予は、斷じて、この事實を疑はず。皇后の新羅を征する、その圖書を收めて還れるならむ。之を以て、漢書高祖本紀の成句を塡めしものとなすは、固より理なきに非ざれども、一段の中、數處に見ゆるより考へ、且つ當時の事情に照らして、斷じて有り得べき事に屬すといはざるべからず。然り而して、儒學直に擧まらざりしは、何の故ぞ。伊地知季安曰く、海西書籍の國朝に入るは、蓋し皇后親ら新羅を征し、收めて還りしところの本を首とすべし。然れども、國人未だ之を讀むものあらず、と。或は讀むに暇あらず、又讀むと雖も、解する能はざりしに因るならむのみ。

儒學の傳來

第二章　漢學講習初期の概況

文字圖籍、すでに傳來せしと雖も、未だ之を講明して其學を樹立せしむるものあらず、而して、その始めて之あるは、實に阿直岐・王仁の功なり。應神天皇十五年、百濟の阿華王、王子阿直岐を遣して、良馬二匹を貢せしむ。阿直岐、亦た能く經典を讀む。皇太子菟道稚郎子、之を師とす。帝、かつて阿直岐に問うて曰く、汝の國の博士、汝より賢なるものありや。對へて曰く、王仁といふものあり、これ國の秀なり、と。天皇即ち荒田別・巫別を遣して、之を徵さしむ。王仁は百濟の人、その祖を狗といひ、狗の先を鷺といふ、漢の高祖より出づ。狗、はじめて百濟に至り、因つて家す。王仁博く經籍に通ず。十六年二月、使に從つて來り、論語十卷・千字文一卷を獻ず。按ずるに、論語は、經文のみにては、十卷あるべからず、且つ古しへは、之を計るに、篇を以てし、卷といはず、これ鄭玄の注本なるべし。鄭玄は、漢末訓詁の一大家、之を呼んで、漢學の傳來となす、固より可なり。然れども、千字文に就いては、異說あり、蓋しこの年、晉の武帝太康六年に當る。李遐の千文注を考ふるに、「鍾繇はじめて千文を作る」といふ。これ蓋し鍾氏の原本、今傳ふる周興嗣の次韵に非ざるや、必せり。こゝに於て、稚郎子、更に王仁を師とし、遂に典籍に通ず。本朝の文教、こゝに於てか、大に興る。この歲、百濟の阿華王薨ず。敕して、阿直岐を遣歸して、位を繼がしめ、因つてその削地を復す。阿直岐すでに去ると雖も、王仁ひとり留まつて歸らざりき。

儒學傳來の意義

大陸道德思想流布の權輿、上に述べたるが如し。賴襄仍つて論をなして曰く、我が邦、列聖民を保つこと子の如く堯舜禹湯に讓らず。その風俗、君を尊び、上に親しみ、相愛し、相養ふ、又唐虞三代の民に過ぐるあり。經籍なしと雖も、その道、固より具に在り、特に未だ名いうて、之を敎へ、仁といひ、義といふものあらざるのみ。たとへば、人家の如し。同じく是れ一里なり、而して之に居るや、舊あり、新あり。某巷陌某井溝、皆名目あり、記するに帳簿を以てし、新者必ず舊者に問うて、之を知る。舊者曰く、是れ吾が巷陌井溝なり、と。可ならむや。今天下の仁義なり、儒者指して之を私して曰く、これ漢の道なり、と。國學と稱するものあり、斥けて之を外にして曰く、これ我の道に非ざるなり、と。皆非なり。道、豈に彼此あらむや、之を載するに、文を以てす、彼較や我より舊く、彼來つて之を貢し、我取つて之を用ふ。釀冶織縫の工と何ぞ異ならむ。戰籍は織縫釀冶なり、而して仁義は蠶なり、桑なり、麴米銅鐵なり。麴米銅鐵蠶桑を以て、彼より來れりとなすものは儒者の見なり、織縫釀冶を廢せむと欲するものは、國學者の見なり。故に曰く、皆非なり、と。

儒學盛行の理因

これを國體上より考ふれば、山陽の所論、固より允當なり。然れども、學術發達の上より言へば、未だ盡さゞるもの無しとせず。他なし、地方的道德現象の沈澱物に過ぎざる無文の倫理的訓言と、兎も角も學理的體制を有する儼然たる敎義とは、その威嚴に於て、その効力に於て到底同一の談に非ざればなり。儒敎は百濟より、始めて之を傳へしと雖も、その創始者たる漢族とわが大和民族とは、相互に共通なる東洋的特色と祖國的精神とあり、こゝに於てか、些の障礙なく、今後圓滑に弘布すべき運命をトすべかりき。故に之を一言すれば、祖宗傳來の道德思想は、儒書講習の爲に愈よ明晰に煥發され、兩者互に相輔相助の勢をなし、並び行はれて毫も戾ることなかりき。

辰孫王

百濟より儒學を傳へしもの、普通に阿直岐・王仁の二人を擧ぐと雖も、續日本紀に記するところに因れば、別に、辰孫王あり。應神天皇、荒田別に命じて、有識を百濟に求めしとき、その國主貴須王、その孫辰孫王を以て、これに應じ、使に隨つて、入朝するや、帝之を嘉し、以て皇太子の師となし、大に儒風を闡ぐといへり。大日本史には疑を存し、その事、大に王仁に類す、疑ふらくは、別人に非ず、今考ふべきなし、といへり。伊地知季安は、臆見を着け、辰孫王・阿直岐とともに來つて使し、因つて王仁を

訓讀

鴈めしとなせり。或は辰孫王を以て王仁とともに前後して來歸せりとなすものあり。その實は、今考ふべからずと雖も、王仁以外、儒を以て名あるもの相繼いで來歸せしこと、固より疑ふべからず。書籍の傳來、この後蓋し少からざりしなるべく、又何ぞ長しへに、論語・千字文の二書を講習せしに止まらむや。

當時漢籍講習の方法、果して如何なりしか、わが國古しへより、稱して言靈のさきほふ國といふ以上、訓讀の法を以てずでに此時に濫觴すといへる諸家の說、固より不可となさず。試にその一二を擧くれば、湯淺常山は曰く、王仁書を讀むの法、いかなる事をや敎へたりけむ、三韓の讀法なるべけれど、直によみ下したるにぞあるべき。されども、又三韓にも、直下によむの法に非ずして、別によみ解く法の有る故にこそ、諺文といふ物は作り出したるなるべし、と。山崎美成は曰く、吾が邦にて漢籍を讀み漢字を用ひ、及び文字の音訓、ともに彼の若郎王の初めて經典を學びたまひし時より、已に之あること疑ふべからず。されば、文學の行はれしころより、はやく和讀することゝはおもはる、と。日尾瑜は曰く、王仁・阿直岐等が若郎子王に傳へ奉りし讀法、必ずしも、彼國のまゝに傳へ奉りしことゝは思はれず。如何と

訓點の變遷

なれば、彼此域を同うせざれば、語も亦た自ら異なり、語異なれば、必ず譯を俟ち、而かる後、意義始めて通ず。且つ王仁が詠めりといふ歌を見れば、皇國の語にも通達せしこと疑ふべくも非ず。もし譯言もなくして、空しく或は漢音、或は吳音、或は百濟音にのみ傳へたらば、今の僧徒の陀羅尼を誦し、蘭學者の蘭書を讀むを聞くにひとしく、何の益あるべからず、と。後に本居宣長、亦た之を言へり。これ通說なり。

漢籍の講習、當初すでに訓讀をなす、世に顚倒の讀法を以て、吉備眞備に擬るとなす、恐らくは、謬ならむ。凡そ訓讀の法、その助詞の符號を錄せるものを點圖といひ、數種あり。その中、ヲの點の下にコトの點あるものあり、因つて此點を稱してヲコト點といふ。ヲコト點の因つて來るや、固より久しく、斷じて假名發明の前に在り。王仁の當時は、未だ必せずと雖も、奈良朝以前に在ること、辨を俟たず。日尾瑜、又曰く、當時文籍はじめて渡りしことなれば、假名と云ふ者あるべくもあらず、記誦することの難しさに、斯る式をば作り設けたまひにけむ、嗚呼我が先王の此學に心を凝したまひしこと、此の如く、なみ〳〵ならざるを以て、後世吾輩の如き、愚昧不肖の者までも、此道あることを知ることを得たり。實に廣大無窮の明賜、仰ぐに

猶ほ餘りあることならずや、と。山崎美成は、定家卿の野記を引き、ヲコト點の法、もと僧家に掬まれりとなす、時を以てすれば、頗る後る、未だ遽かに信ずべからず。ヲコト點は、王朝時代、博士の家、世之を傳へ、各多少の特色あり、甚だ之を貴重し、移寫改寫等の事あり、漸次顚轉、多少の訛誤を生じ、且つこの點法を以てすれば、遽に通じ難く、讀書の際、甚だ不便なるを以て、その後、全く廢し、遂に今日普通謂ゆる訓點となる。その時は、王朝の中葉に在るが如し。江村北海曰く、今の訓點も、その來ること、既に久し。其故は、嵯峨天皇の御時に、學士伊時、遊仙窟の訓點を木島明神にさづかりしと云ふ事、すなはち其跋に見ゆ。其跋は文章生英房にて、其人文保中の人なり。文保は、後醍醐天皇即位の二年前に改元ありし年號なり。余、これを見るに、ヲコト點に非ず、全く今のかべり點なり。それは後に點をつけかへたるものと云ふ人あれども、左にあらず、上にいへる傍訓緣譯のくはしきを併せて、是すなはち明神に授かりしといふ所のものなり、と。五山の末年、岐陽に至りて、訓點の法、一新時期を劃するが如く。その後、桂菴文之に至り、又改補するところあり、惺窩之を承け、遂に四書の道春點となる。なほヲコト點等に就いては、論述すべき事、多けれども、煩

稚郎子講學の効

を厭うて、こゝに具せず。讀者唯だ漢籍の講習、その初よりすでに訓讀の法を以てせしを記清すれば足らむ。

稚郎子、すでに典籍に明かなり。應神天皇の二十八年高麗王、使を遣して、朝貢し、因つて表を上る。その中、高麗王敎日本國の語あり。稚郎子、之を怒り、その使を責めて、表を破る。堂々たる大國、蠢爾たる醜虜の侮るところとならず、使者をして膽寒からしめしもの、實に太子講學の功に因る。帝、之を稱し、汝之を讀むに非ざれば、國朝誰か失禮かくの如きを知らむやといひ、愈よ之を鍾愛せられしもの、又宜なり。すでにして、帝の崩ずるや、太子位を皇兄大鷦鷯尊に讓ること三年にして自殺す。後世或は之を疑ひ、旨を希ふの臣、羽父の魯隱に請ふ如きものあり、抱いて慟する、又宋の太宗が德昭を哭するに類するものありとなし、仁德の兄弟を處する、未だ善を盡さゞりしに非ざるやを疑ふ。然れども、予は、太子の德斷髮文身の泰伯に過ぐるもの、一に儒學を修め、道を信ずること極めて篤きの致すところとなさむとす。太子すでに崩じ、仁德猶ほ未だ位に即かず、王仁歌を作つて曰く

難波津に、咲くやこの花、冬ごもり、今を春べと、さくやこの花、

風して以て勸進す。帝、乃ち祚に登る。後世、この歌を以て、陸奥采女安積山の歌と並稱して、和歌の父母となす。固より異論あれども、姑らく舊說を存す。履仲の朝、內藏を建てゝ官物を收め、王仁と阿知吉師とをして、その出納を錄せしむ、すでにして逝くといふ。

王仁の功績

王仁は、本邦儒學の開祖、その功績異常、千古に炳焉たり。故に村上天皇の時、文章博士橘直幹、歌を賦し、之を贊して曰く、

わだつみの千重の白波越えてこそ八島の國に吹きは傳ふれ、

又贈贊を作つて曰く、

五彝敎化將開、博士遠自海來、永言於難波梅、日域文華之魁、

物茂卿、亦た之を稱して、宜しく學宮に尸祝すべきものとなす、皆中れり。

諸史

阿直岐、早く去りしと雖も、その後裔、日本に住まり、阿直岐史となり、王仁の後は文首となり、辰孫の後は津史となる。この後、又文筆を以て投化するものの多く、皆某史の姓を賜はりて、記錄の事に預る。船史・田邊史・白猪史の如き、是れなり。その中、阿知使王の後なる倭漢直より分れたる東文直と、王仁の後なる西文首との二家は、その部民を統率し、相並びて、文章を世襲し、諸史の中に於て、殊に敎育の任をも帶びたり。履仲の朝、はじめて諸國に史を置き、以て言事を記し、四方の志を達す。文字の需要、こゝに於てか重し。雄略の朝、大藏を置き、東西兩史、その簿を勘錄し、又史部を設き、漢部を聚めて伴造を定む。

五經の傳來

漢籍は、應神の時に、傳來せしと雖も、之を講ずるものは、王子大臣、時に之あるのみ。秦漢諸韓歸化人の子孫、諸史の家、なほ儼存し、朝廷の臣僚、之に嚮ふるものあらず。時に我が富强、韓を震服することすでに久しく、而して、諸韓は、支那六朝の間、皆使を通じて、其學を講ぜり。故に我亦た之を彼に資せざるを得ず。繼體天皇の時、百濟、王文貴等を遣して、我が行人を送らしめ、且つ五經博士段楊爾を薦む。五經の學、こゝに起る。四年にして、又漢安茂を薦め、以て楊爾に代らしめ、爾後分番交代して、敎授せり。欽明の世、五經博士馬丁安及び僧道深等、又百濟より來り、各僧俗に敎へ、後又五經博士王柳貴・易博士王道良・醫博士王保孫を貢す。醫博士は、間ま採藥師を從へ、潘量豐等は、卜曆等の書を持して來り、丁安等に代る。又僧曇惠等九人を遣して、同じく、道深等に代らしむ。吳人智聰、又儒釋の方書・明堂圖及び樂器等を以て來

漢籍講習の困難

る。朝廷方に學術を興すに汲々たること、想見するに堪へたり。

然れども、漢籍講習の困難なるや、その發達、なほ頗る遲々たりしこと、斷じて爭ふべからず。これに加ふるに、諸史の氏人、又學業を怠る。こゝに於て、敏達即位の初高麗の入貢するや、その表文を讀むものなく、唯だ船辰爾ありしを以て、幸に事を濟すを得たり。

船辰爾

船辰爾、本姓は王、百濟辰孫王の後なり。欽明天皇十四年、樟句宮に幸す、辰爾敕を奉じて、數ば船賦を錄す。即ち辰爾を以て、船長となし、因つて姓船史を賜ふ。敏達天皇元年、高麗表を上る、諸史を召して之を讀ましむれども、通曉する能はず。辰爾爲に文義を解釋す。帝、奬諭して曰く、勤めたるかな辰爾、懿なるかな辰爾、汝の學を好むに非ざれば、誰か能く之を解する者ぞ。今より後、宮中に近侍せよ、と。復た詔して、東西諸史を責めて曰く、汝等業何ぞ成るなき、汝等衆しと雖も、辰爾に及ばず、と。又尋いて高麗の表を上るや、烏羽を用ひ、字跡別つべからず。辰爾その羽を取り、之を飯甑に蒸し、帛を以て之を印し、文字盡く見はれ、始めて讀むを得たり。帝、大に之を嗟異す。

日羅

帝の十七年、日羅を百濟より召す、賢にして勇あるを以てなり。日羅甲を被り、馬に乘じ、闕下に詣り、跪いて拜して曰く、臣、本と國朝の人、父を阿利斯登といふ、宣化の朝に仕へて、火の葦北に國造たり。靭負の部を以て、大伴大連に隷し、勅を奉じて、海外に使し、臣を百濟に生む。今辱くも召に應じて、來歸して詔を待つと。乃ち甲を解いて贄となす。こゝに於て、帝、政を日羅に問ふ。對へて曰く、要は民を養ひ、食を足らすに在り。兵足れば民信服し、外人亦た懷く。然る後、朝せざれば或は師を興すに至る、と。因つて盡く獻策を理す。外士兵を談ずる、蓋し此に掬まる。日羅の學は、百濟に在りしときに習得せしものにして、その儒に通ぜしや、斷じて疑ふべからず。後世勝軍地藏と稱して奉祀するもの、即ち斯人なりといふ。

其後の趨勢

漢籍傳來初期の狀態、略ぼ此の如く、實は言ふに足るものなし。而して、之を鼓煽し、直に隋唐の文敎を傳へしものは、聖德太子の力にして、次いで、天智天皇、英邁の資を以て、大化の新政をなし、學校を建設するに至りて、近江朝の文物、燦然として觀るべく、然る後、支那・朝鮮と相並んで、毫も遜色なきに至れりき。

聖德太子

十七憲法

第三章　隋唐の交通

上宮聖德太子、崇峻天皇弑せられしとき、その賊を討つ能はず、反つて、之を助く。春秋趙盾の罪を正せし筆法、直に此に移すべく、加ふるに佛に佞し、その人となり、やゝ善懦に類し、聊か議すべきもの無きに非ずと雖も、隋と通じて、善く敵國の禮を持し、且つ民利を興し、文敎を弘布せし功、最も大、後世殆んど比すべきものなし。太子が佛敎の隆興に對し、大に盡すところありしは、言を俟たざれども、儒學の振起、亦た負ふところなしとせず。更に稱す、稍や長ずるや、好んで書を讀み、性最も聰敏、十人の事を訴ふを兼聽し、略ぼ違錯なし。帝、之を愛し、之を宮南の上殿に居らしめ、因つて號して上宮廐戸豐聰耳皇子といふ。太子好んで釋敎を好み、典籍を博覽す、と。蓋し佛理は、高麗の僧惠慈に學び、外典は博士覺哥に習ひたりといふ。而して、漢文に點し、はじめて和訓に註せしといふは、卜部氏の舊說なり。推古天皇十七年、憲法十七條を定む。佛敎を主とし、之に加ふるに儒書の語を以てす。その大旨、君命臣行の道を明かにし、上和下睦の理を說き、禮信を本とし、忿欲を絕ち、勸善懲惡、賞

隋と通ず

罰必當、賢才を用ひ、民業を勵む。僅々十七條の中、小大兼舉、彼此の政敎を析中し、長く後世法令の標準となる。その中、君則天也、臣則地也、天覆地載、四時順行、萬物得通といひ、治民之本、要在中禮といひ、信是義本、每事有信といひ、使民以時、古之良典といふ如き、皆儒家の語、而して、又神道を棄てず。三敎調和の規書は、或る意味に於て、はるかに其端を太子に發すといはざるべからず、この文、實に太子の手筆に係り、莊重嚴正、漢魏の遺風ありと稱す。

太子が隋と交通せし事蹟に至りては、特に記述を値す。勿論、その素志は、佛法の興隆に在りしならむと雖も、兩國の使聘、一たび通じて後、留學生、彼に學ぶもの、頻々相繼ぎ、學風又一變したればなり。はじめ、推古天皇十五年、煬帝大業三年、大禮小野妹子を隋に遣し、鞍作福利を以て通事となす。わが國書に曰く、日出處天子、致書日沒處天子、無恙、と。煬帝之を覽て悅ばず、書辭無禮なりとなせしも、ずでに琉球を伐ち、林邑を服し、赤土と通ぜし後、その意氣の宏遠なるを怪み、就いて國風を觀せしめむと欲し、文林郎裴世淸等十二人をして、妹子に從つて、來朝せしむ。十六年、隋使の爲に新館を難波高麗館の上に安置し、掌客を置いて、之を接待せしむ。八月、隋

使京に入り、國書信物を上る。その詳は、書紀に出づ。すでにして、世清等の國に歸らむとするや、復た妹子を大使となし、吉士雄成を副使となし、福利を通事となし、再び隋に遣す。その國書は、亦た太子の辭にして、その文、次の如し。

東天皇敬白西皇帝、使人鴻臚寺掌客裴世清等至、久憶方解、季秋薄冷、尊候何如、想清愈、此即如常、今遣大禮蘇因高大禮乎那利等往、謹白不具、

この時、學生には、倭漢直福因・奈羅譯語惠明・高向漢人玄理・新漢人大國の四人、學問僧には、新漢人旻・南淵請安・志賀漢人惠隱・新漢人廣濟の四人、合せて八人を遣して、留學せしめらる。十七年九月、妹子等歸朝す、唯だ福利は、還らず。天朝の支那に交通する、實にこゝに始る。二十二年六月、犬上御田鍬・矢田部連を隋に遣し、明年夏秋に及びて還る。

遣唐使

次いで、隋亡びて唐興る。舒明天皇の二年、大仁犬上御田耜・大仁醫惠日を遣す。四年に至り、唐の新州刺史高表仁、御田耜等を送つて對馬に至る。これを遣唐使の始となす。隋唐の往來、一たび開いてより、直にその學術文藝を移し、復た史姓諸家の專有に屬せず、朝臣漸く之に嚮ひ、遂に韓國の學風を改め、駸々として日に進み、其

國史修撰の權輿

後の學令詩文、みな唐初の風に依倣し、後世に至るまで、朝廷は唐學を傳へたり。

太子すでに文辭を善くす、故を以て、推古天皇二十七年、蘇我馬子とともに議して、天皇記及び國記・臣連伴造國造の百八十部並に公民等の本記を錄す。これを天朝國史修撰の權輿となす。後年馬子の子蝦夷、誅せられしとき、火に罹りて亡び、船惠尺、その燼を得て獻ず。天智天皇、賴つて庚午年籍を編すといへり。世に舊事記を以て、此時の撰となすは誤れり。その後、文武天皇の時、舍人親王、日本書紀の撰あり。天朝の文史、これより誦すべし。

南淵及び玄理

太子の文教に於ける、實に此の如く、その薨去は、推古天皇二十九年に在り。その遺はせしところの留學生高向玄理・南淵請安は、彼土に居ること三十三年、舒明天皇の十二年を以て歸朝す。南淵の歸るや、還俗して經を授く。天智天皇、潛龍の時、中臣鎌足と結び、蘇我氏を除かむとし、南淵に就いて周孔の教を學ぶに托して、車中に密議し、遂に之を除くを得たり。その間、南淵亦た多少の功績なきに非ざるべし、故に林氏の稽古篇、南淵を贊して曰く、文にして能く武、百篇の奎章、惜むらくは、即ち今亡し、と。玄理は、大化の朝に在り、新政を翼贊せし功、少しとせず。後に大錦上に

任じ孝德天皇の五年、遣唐押使となり、小錦下河邊麻呂・大山下醫慧日等と、唐に使し、學生及び沙門を隨へて西航し、新羅を經て、萊州に泊し、長安に至りて、高宗に見ゆ。玄理遂に其地に卒せしが、使船は、其年の秋、百濟の送使とともに還り、書籍寶貨を獻じたり。

留學生

留學生は、遣唐使の出づる毎に、必ず隨行す。その最も多きは、元正帝の朝にして學問僧を合せて五百五十人に上る。これ等は、天平年間に至りて歸朝し、その文化を傳へしを以て、奈良朝の典章技藝、この際、最も昌盛なりき。

奈良朝以前の文辭

聖德太子の憲法及び隋に贈りし國書等、その筆力を觀るに足るべく、同時の作としては、推古天皇四年に建てし伊豫の碑及び法隆寺釋迦佛背銘あり。その他、狩谷棭齋が古京遺文に類聚せし觀世音菩薩造像記・藥師佛造像記・釋迦佛造像記等、相次いで出づ。この後、宇治橋斷碑・藥師寺浮圖露盤銘・那須國造碑等、皆南都以上の作、文辭の漸く盛なること、概見すべきなり。

第四章　大寶以後學制の一斑

學校の起源

天朝學校の創建、實に大化の世に在り。孝德天皇、はじめて位に即くや、僧旻及び高向玄理を以て國博士となす。これより先、博士は常に之を三韓に徵し、交番敎授せしが、この時、はじめて國人に任ず。二人の達材、想ふべきなり。大化五年、帝又玄理及び旻に任じ、はじめて、八省百官を置く。然れども、未だ庠序を立つるに及ばず。白雉四年、旻、阿曇寺に卒す。その病むや、帝親ら幸して、之を問ふ。その翌年、玄理亦た唐に使して卒す。帝、甚だ之を悼む。

學校の完備及び武智麻呂

天智天皇、五經學の緒を承けて、學校を創め、僧詠百濟より歸化し、文學を以て河內に鳴り、擅んでられて、大學頭となりしこと、續紀に見ゆ。弘文天皇、はじめて詩賦の作あり。こゝに於てか、文敎漸く盛ならむとす。天武の朝、京師に大學を置き、諸國に國學を置く。而して、其制の備はれるは、實に文武天皇大寶の世に在り。故に本朝文粹、載するところ三善清行の封事に、伏見古記、朝家之立大學也、始於大寶年中といへり。その元年二月、天皇親ら臨んで、釋奠の禮を行ふ。而して、學政の整治に與つて力ありしものを、藤原武智麻呂となす。家傳載すところ、尤も詳なるを以て、下に其文を擧ぐ。曰く、大寶四年三月、拜せられて大學助となる。先に淨御原天皇、晏駕し

てより、國家事繁く、百姓役多く、兼ねて車駕藤原の京に移るに屬す、人皆忽忙、代學を好まず、此に由つて、學校陵遲、生徒流散、その職ありと雖も、奈何ともすべきなし。公、學校に入りてその空寂を視、以爲へらく、夫れ學校は賢才の聚るところ、王化の宗とするところなり。國を理め、家を理むる、皆聖教に賴り、忠を盡し、孝を盡す、この道に率由す。今や學者散亡、儒風扇せず、これ聖道を抑揚し、王化を翼贊する所以に非ざるなり、と。即ち長官良虞王とともに陳請し、遂に碩學を招いて、經史を講說し、決辰の間、庠序鬱起、遠近の學者、雲集星列、諷誦の聲、洋々として耳に盈つ。慶雲三年七月、徒つて大學頭となる。公、屢ば學官に入り、儒生を聚集し、詩書を吟咏し、禮易を披玩し、學校を撿揚し、子衿を訓導し、文學の徒、各その業を勉む。和銅元年三月、圖書頭に遷り、侍從を兼ね、公朝には內裏に侍し、綸言を撫候し、こゝに其間を以て、圖書經籍を檢校す。先に壬申の年より、亂離已來、官書或は卷軸零落、或は部帙欠少、公、こゝに奏請して、民間に尋訪し、寫し取つて滿足す。此に由つて、官書旁備はるを得たり、と。おもふに、若し斯公を微つせば、斯文衰へずして今日に至るを得べけむや、實に周孔の功臣、縉紳の師表と稱すべし。

大學寮

大學寮は、式部省に屬す。學生を簡試し、及び釋奠の事を掌る。その職員は、頭一人、助一人、大允一人、少允一人、大屬一人、少屬一人、博士一人、助教二人、學生四百人、音博士二人、書博士二人、算博士二人、算生三十人、使部二十人、直丁二人なり。その官位、頭は從五位にして、以下漸次等を低くし、少屬は從八位なり。大學は、唯だ一にして、京師に在り、諸國には、國學あり、部內の者を取りて、博士となし、國ごとに一人、或は外に權知博士、非受業博士あり、後には、國學の業を卒へし者より任用す。

學生

大學生の定員四百人、五位以上の子孫、幷に東西史部の子、もしくは八位以上の子の情願せしもの、及び國學生の貢擧せられしものより之を取る。延喜式には、士庶亦た一經に通ずるもの、入學を許さるとあり。國學生の定員、大國は五十人、上國は四十人、中國は三十人、下國は二十人、郡司の子弟を教育す。若し員に滿たざれば、庶人の子を取つて、之を補ふ。並に年十三以上、十六以下、聰令なるものを取る。神龜以降は、一博士にして三四國を兼ねしむ。太宰府の學舍は、一に學業院といひ、最も盛なりしが、諸國の國學は、幾もなくして陵遲し、その詳、殆んど考ふべからず。

學校の藏書

大學は言ふにも及ばず、國學は必ず經史を藏す。神護景雲三年、太宰府言ふ、この

學費

府、天下の一大都會なり、その學徒、稍や衆く、而かも府中惟だ五經を蓄ふるのみ、未だ三史の正本あらず、志、涉獵に在り、道尙ほ廣からず。伏して請ふ、列代の諸史、各一本を給し、以て學業を興さむ、と。詔して史記・漢書・三國志・晉書、各一部を賜ふ。知るべし、五經等は、國學皆之を藏せしことを。これ即ち學生研學の料なり。

はじめて學に入るや、皆束脩の禮を其師に行ふ。各布一端、皆酒食あり。その束脩を分つや、三分は博士に入り、二分は助敎に入る。學生は自ら其費を辨ぜしものならむと雖も、後には勸學田あり。天平寶字元年八月、敕して曰く、上を安んじ、民を治むる、禮より善きはなく、風を移し、俗を易ふる、樂より善きはなし。禮樂興るところ惟だ二寮に在り。門徒の苦しむところは、但だ衣と食とのみ。亦た是れ、天文陰陽曆筮醫針等の學、國家要するところ。並に公廨の田を置き、諸生の供給に用ふるに應ず、と。因つて、大學寮は三十町、雅樂寮は十町、陰陽寮は十町といふ。延曆十三年に至りては、大學寮の勸學田一百二十餘町あり。三善淸行の意見十二個條の中、請加大學生徒食料事の一條あり。勸學田の入は、皆大學の費に供し、大炊寮に於て、每日百度飯一石五斗を給し、以て博士學生に分ち、燈油料錢の如きも、亦た之を支給す。か

學校の教科

くの如くして、大學は、すべて官費の制、國學亦た然り。後世朝臣の子、特に才學あるものに學料を賜ひしことあり。

大學國學に於て敎ふるところは、經術を先とし、これを呼んで明經道といふ。大寶令に博士助敎、皆明經、師となすに堪へたるものを取るといへり。而して、その之に敎ふるの法、周易・尙書・周禮・儀禮・禮記・毛詩・春秋左氏傳の七經あり。皆之を學官に立て、周易は鄭康成・王弼の注、書は孔安國・鄭康成の注、三禮・毛詩は鄭康成の注、左傳は服虔・杜預の注、禮記左傳を大經となし、毛詩周禮儀禮を中經となし、周易尙書を小經となす。七經兼ね通ずるを要せず、二經以上、すでに足れり。而して、孝經・論語は學者をして兼習せしめ、孝經は孔安國・鄭康成の注、論語は鄭康成・何晏の注なり。この外には算學あり、書學あり、律學あり、音學あり、天文陰陽曆醫等の學あり。

考試の種類

考試の種類、頗る多しと雖も、學校內に於て生徒學業の優劣を判ずるものと、人才を擇定して之を登庸するものとの二に出てず。

校內の試

校內の試に、旬試と年終試との二あり。凡そ學生、先づ經文を讀み、然る後に義を講じ、旬ごとに一日の休暇を放ち、假前一日、博士考試、その讀者を試むるや、千言の

貢人と省試

舉人と寮試

内ごとに一帖三言を試み、講者は二千言内ごとに大義二條を問ひ、すべて三條を試み、二に通ずれば第となし、一に通じ及び全く通ぜざれば、斟量決罰す。これ旬試なり。年の終ごとに、大學頭助國司、藝業優長の者、之を試む。その試は、一年受くるところの業を通計し、大義八條を問ひ、六以上を得たるを上となし、四以上を得たるを中となし、三以上を得たるを下となし、頻りに三下し、及び學に在ること九年、貢舉に堪へざるものは解退せしむ。これ年終試なり。

登庸の試は、國學と大學と大に異なり。國學よりするものは、國使すでに試みたる後、朝集使に從つて赴集す。之を貢人といふ。至る日、皆辨官に引見し、即ち式部に付して考練す、之を省試といふ。而して、その第を得たるものは、進んで大學生に補し、第せざるものは、本貫に還らしむ。

大學よりするものは舉人といひ、寮又は式部省に於て之を考試し、之を寮試といふ。その種類、甚だ多く、秀才・進士・明經・明經等、皆こゝに於てし、その第を得たるものは、仕途に就かしめ、缺あるとき、次を以て之を補す。秀才・進士等、大寶令に見ゆるものにして、その由つて來るところ頗る久しと雖も、秀才は博學廣才の者を取り

秀才進士

文章生

て、方略の策を試み、進士は明かに時務に嫻ひ、幷に文選・爾雅を讀むものを取りて、時務の策を進めしめ、その考試、甚だ難きを以て、之に應ずるもの甚だ少く、後その法を革めしに拘らず、麼雲より承平に至るまで、二百餘年の間、わづかに六十五人を出せしに過ぎず。進士の如きも、神龜五年に至りて、始めて行ひしが如し。勢すでに此の如く、令の制、永く行はれず、漸次之を改むの已むを得ざるに至れり。

天平二年三月の格、文章生二十人といひ、雜仕及び白丁の聰慧の者よりも簡取し、その二人を文章得業生となし、以て秀才・進士、二科の貢舉に擬せり。次いで又、文章生中に俊士五人・秀才二人を置き、從前進士・秀才の試に應ぜしものを以て、之に補することゝなせり。かくの如く、文章生を置きし所以、その一は、如上の理由に本づくといへども、奈良朝以後、殊に文辭を貴びしこと、亦たその一因たるを失はざるべし。大寶令、すでに「凡そ學生講說に長ぜずと雖も、文藻に嫻ひ才、秀才明經に堪へたるものは、亦た舉送を聽るす」といへり。文章を以て、薦達を得しこと、すでに久し。然れども、文章生、一たび置かれて後、愈よ變革あるや、徒に節目を增し、政途に益なきを以て、天長四年、俊士を廢して、天平の制に復せり。之に次いで、寮試に及第し

たるものを擬文章生となし、その定員を二十人とし、一史の文五條を試み、三以上に通ずるものを以て、之に補することゝなし、この擬文章生、又簡試を經て、文章生に補せらる。その試は、ともに春秋二期に於てす。

秀才

當時謂ゆる進士は、この文章生にして、これより進めば、文章得業生となり、之を秀才といひ、又一に茂才といふ。文章得業生、又更に方略の宣を蒙りて對策することあり。而して、方略は、文章を試み、その他、詩賦を試むかくの如くして、學藝を以て仕進を得るの道は、兎も角も開かれたり。

唐制の模倣

之を要するに、大寶の學制及び貢擧の制は、すべて唐制に本づくものにして、唯だ宜しきに從つて、多少の變革を加へしに過ぎざるなり。

學政の廢弛

この制、王朝時代に盛にして、その後、太だ衰弛せしと雖も、應仁亂後、なほ形似を存して、その跡、尋ぬべきものあり。醍醐村上の世、文治の盛を稱せしときに方り、當時知名の儒臣、菅原道眞・大江音人・紀長谷雄・橘廣相等、皆文章生より進みしものなり。藤原在衡、又文章生より擢んでられて、左大臣に陞る。然れども、この時すでに流弊あり、名門の子弟の如きは、五六歲にして文章生に補し、十四五歲にして對策せしものあり、又貴紳の推擧によりて進み、除目の擧狀に宣旨分・院分・春宮分と註するものあるに至る。故に三善清行、又かつて之を論じて曰く、こゝに於て、博士等、貢擧の時に至るごとに、唯だ歷名を以て士を薦め、かつて才の高下、人の勞逸を問はず、請託これに由つて間起し、濫吹之が爲に繁生し、權門の餘唾に潤ふものは、羽翼を生じて青雲に入り、闕里の遺躅を踏むものは、子衿を詠じて、蠹舍を辭す。此の如くして陵遲し、興復するに由なく、先王の庠序、終に丘墟となる。と。算博士三善爲康の如きは、その初、望、鄕貢にありと雖も、屢ば省試して、遂に不第に處り、恨を呑んで罷め、暮年節を變じて、少內記に補せられしといふ。吏外隱伏の事實、之に似たるもの、決して少からざるべく、古今東西考試の法、終に備はらざるものゝ弊、常に此の如きのみ。

考試の腐敗

考試の腐敗は、人才登庸の途を杜絕せしものにして、學校の盛衰と因果互に相聯關す。王朝の世、藤原氏、權を擅にし、衰々臺省に居り、朝臣才あるもの、常に下僚に屈し、菅原道眞、かつて一たび用ひられしも、その末路、貶謫の厄に遇ひ、大江氏、常に憤世の意あり、王室の振はざることすでに久しく、學術の隆興、何ぞ復た望むべけ

奈良朝の學者

葛井廣成

むや。

第五章　奈良朝の儒家

たとひ唐制を模倣して、變通その宜しきを得ず、且つ文藝に偏して、經術を重んぜざりし弊ありと雖も、學校の創建は、儒教の弘布を促進せしこと、言を俟たず。奈良の七世、諸帝皆佛に佞す。然れども、その間、儒を以て家を爲せしもの、亦た其人なきに非ず。葛井廣成の如き、蓋し其尤なるものか、

廣成、本姓は白猪史、從六位上に叙せられ、大外記となり、養老中、遣唐使となり、今の姓を賜ふ。かつて、試に應じて對策す。問に曰く、禮は敬を主とし、以て五別を成し、樂は和に本づき、以て八音を抱く。身を節し、性を陶するの用、寔に斯道に因る。世を御し、民を安んずるの義、すでに焉に盡く。世に因つて損益すと雖も、百王相因り、禮樂を用ふを利とす。すでに前聞あるも、未だ優劣を決せず、庶くは其別を詳かにせよ、と。對に曰く、臣聞く、三才始めて闢け、禮旨爰に興り、六情漸く崩して、樂趣亦た動く。固より知る、陰禮の作るや、綿代に基いて、自ら遠く、陽樂の開くや、邃古に肇りて實に遐かなるを。但だ結繩以往は、杳然として述べ難く、書契而還は、炳焉として談ずべし。夫の禮を原ぬるに、是れ國を肥すの脂粉、樂は即ち俗を易ふるの鹽梅、揖讓堯舜、斯道を率ゐ、以て上を安んじ、干戈履發、斯緒を抱き、以て下を化す。美善なれば丹蛇赤龍の瑞、自ら臻り、和諧なれば、黃竹白雲の曲、彌よ韻なり、高く天涯に鑒び、日月と俱に曜り、遠く地角に遍ねくして、山川と齊しく峙つ所以、水火の物を利するに辟へ、梨橘の口に味あるに方ぶ。たとひ、羌生の地を制するなきも、而かも、夏氏の天に應ずるあれば、異を敬するの旨、悉く卷き、同を親うするの跡、偏に舒ぶ。誠に乃ち俎豆の業、鐘鼓の節、理に於て、終に須らく、兩を行ふべく、義に在りて、寧ろ一を廢すべけむや、と。又問に曰く、李耳嘉遯、以て虛玄の理を示し、宣尼危難にして、仁義の教を修む、或は以て精となし、或は以て麤となす、その理如何、庶くは所以を聽かむ、と。對に曰く、竊に聞く、山林を眷し、以て黃綈を披くは、道教の玄教なり、是れ則ち柱下の風、皇朝に入り、以て青紫を拖くは、仁義の教儒なり、彼れ則ち司寇の訓、故に淸虛の理は二篇を煥して、春日に同じく、折旋の蹤は、五經に明かにして、秋月に類す。誠に能く蒼生の沈溺を拯ひ、皇風の絕廢を繼ぐ。伏して惟るに、聖朝、德は萬寓に光

り、化は五岳に高く、勳植その亭育を苞し、翔走その陶鑄を荷ひ、烈風五日、かつて條を鳴らさず、崇雨一旬、終に塊を破るなし。復た乃ち南蠻裸壤、青霧を占め、以て海に航し、北狄章身、白雲を蹈み、以て山に梯す、魏たり、蜀たり、その他、此の如し、猶ほ慴る、聊丘の教、未だ汚隆を備へず、玄儒の旨、雄雌を虧くことなきを。その條丁を分ち、その精蘊を辨ぜむを思欲す。竊に以ふに、玄は獨善を以て宗となし、愛敬の心なく、父を棄て君に背き、儒は兼濟を以て本となし、尊卑の別を分ち、身を致し、命を盡す、これに因つて尋ねれば、鹽酸斷ずべし、と。

その對策二道

予輩は、この二道の對策によりて、學び得べきこと頗る多きを認む。その文の外形を云へば、六朝に流溢し、やがて唐宋の汀岸を嚙むに至りし四六駢儷の體を用ひ、その內容に就いて言へば儒教の本旨を咀嚼して盡さゞるところなきなり。殊に第二の對策、儒道の比較を試みしを觀れば、當時すでに老莊の學を參酌せしものありしや必せり。こゝに於てか、宋濂の日本曲に、「青牛不渡大洋海、莫怪無人識道書」といひしもの、全く虛妄の臆說に外ならざるを知るべし。儒道二教の典籍、すでに渡來し、次いで又讖緯及び陰陽五行の說を傳ふ。朝儀に拘忌多き所以、ひとり佛教の感化のみに非ざるなり。

廣成の經始

廣成、天平中、外從五位下に進み、新羅來聘の時、多治比土作と筑紫に往き、供客の事を檢校し、上言すらく、新羅の使、調を改めて土毛と稱し、書尾に物數を注す、之を舊例に稽ふるに、大に常禮を失ふ、と。太政官處分し、水手已上を召し、告ぐるに失禮の狀を以てし、その使を放ち還へす。すでに歸るや、備後守となり、從五位上に累進し、寵遇甚だ篤く、車駕その宅に幸し、宴飲留宿す。儒臣の榮、こゝに至りて極まる。

その他の儒家

廣成に次いで、百濟倭麻呂、下毛野蟲麻呂、刀利宣令等、その對策、皆觀るに足る。他に奈良朝の儒臣を擧ぐれば、魏の司空王昶の後たる山田御方あり、古事記を撰せし大安萬侶あり、高丘河內あり、調老人あり、伊與部馬養あり、大倭長岡あり、隋の楊帝の後たる陽侯眞身あり、養老中、律令の刪定に與りしもの、矢集蟲麻呂、鹽屋古麻呂、山田銀、守部大隅あり、唐人にして歸化せしもの、清村晋卿あり。又背奈行文、調古麻呂、紀古麻呂、楢原東人、桑井裴麻呂等あり。史、皆その傳を存す。若し、夫れ、彼に使し、及び留學せしものに至りては、前後數千百人、その得るところの學術、歸れば輒ち人に教へ、皆當時の文化を完成するに與つて力ありしものなり。就中遣唐の使者

には粟田眞人あり、留學生には吉備眞備あり。唐史氏、又その名を記し、千古に滅びず。次に眞人に就いて略述し、眞備は別に章を設くることゝなさむ。

粟田眞人

粟田眞人は、天足國押人命の後、學を好みて、進止容あり、天武の朝、小錦下直大肆に進み、持統の朝、筑紫大宰となり隼人一百七十四人、及び布牛皮鹿皮若干枚を獻ず。賞して衣裳を賜ひ、直大貳に進めらる。文武の朝、律令を撰ぶに與り、民部尚書となる。大寶元年、遣唐執節使となり、位號を改められ、正四位下に叙し、節刀を授けらる。筑紫に至る比、風浪惡しくして發するを得ず、遂に京師に歸る。二年朝政に參議し、尋いて再び唐に赴き、楚州に至る。人あり、來り問うて曰く、何の國の使ぞ。眞人曰く、我は日本國使なり、此處は何の州界ぞ。曰く、これ大周の楚州鹽城縣なり、と。眞人又問ふ、嚮に大唐と稱す、何に緣つて號を改むと。曰く、永淳二年、天子崩じて、皇太后、祚に登り、神聖皇帝と稱し、國を大周と號す。聞く海東に大倭國あり、之を君子國といふ、人民豐樂にして、敦行禮義あり、と。今使人を見るに、儀容閑雅、風聞果して信なり、と。言畢つて去る。長安に至り、武后に見ゆるや、宴を麟德殿に賜ひ、司膳卿を授けらる。眞人進德冠を冠す、頂に華蘤四披あり、紫袍帛帶、唐廷その溫雅を稱す。慶雲元年、復命して節刀を上り、大倭の田二十町、穀一千斛を賜ふ。二年中納言に拜し、從三位に進み、和銅の初、太宰帥となり、正三位に昇る。養老三年薨ず。眞人の唐に在るや、儒經を四門助教趙玄默に受け、能く文を屬す。事は唐書に見ゆ。之に次いで、邦人にして、學術文章、一代に秀で、彼土人士の歎賞を得たるもの、阿倍仲麿あり。その行跡は、世人知悉せざるなく、且つ儒學史上には關係少きを以て、こゝに述べず。

奈良朝の漢文

當時の學風、經術を講習すと雖も、主として文辭を重んぜしを以て、詩文觀るべきもの、漸く多からむとす。これより以前の文、間ま今に存することかつて述べたる如しと雖も、いづれも、短篇零章に過ぎず。大安萬侶の古事記の序に至りてはじめて其全を觀るべく、徵古典雅、文辭爛然、排偶の文を以て之を貶すべからず。舍人親王の日本書紀、史漢鴻烈、等を摸倣し、往々成句を綴拾して文を爲し、勵もすれば、辭を以て意を害するものありと雖も、叙事法あり、用字又格に合し、近古老生の文と日を同うして語るべからず。和歌の序、又漢文を以て之を遣る。萬葉集中、その例を見る、又棄つべからざるものあり。

邦化せる漢文の起源

蓋闇の文章、直に唐に倣うて、概ね格に乖かずと雖も、僻陬の地、文敎未だ進まず、

故を以て、唯だ文字を排列して、事を記するのみ、猶は前古の漢文の如く、上野群馬郡下賛郷碑及び風土記殘篇の文、即ち是れなり。かくの如きは、漢文擬作の甚だ困難なるを證するものにして、邦化せる漢文の一體は、世常に其例を絶えず。その後、孀喜の朝、遣唐使を停め、留學生、亦た廢止せしを以て、靡爛の極、記錄消息の一體となり、遂に東鑑一流の文となる。

詩も亦た之を翫ぶこと古く、弘文天皇、はじめて之を作る。その述懐の一首に曰く、道德承天訓、鹽梅寄眞宰、羞無監撫術、安能臨四海、と。興重渾朴、詞壇の鼻祖たるに愧ぢず。然れども、末句謙遜の意あり、後果して讖となる。之に次いで、川島皇子・大津皇子あり、その作、意よ盛なり。たとひ、その字面は、穉妥を缺くと雖も、唐と相通ぜし當時なれば、聲律は却つて精確なりしならむ。今傳ふるところの詩集、その最も古きは懐風藻にして、天平勝寶三年、撰ぶところとい ふ。一たび平安朝に入れば、凌雲集・文華秀麗集・經國集・扶桑集・本朝麗藻等あり。菅江諸家、歴世皆集あり。

第六章　吉備眞備

二千餘年間、庶姓の文學を以て三台の高位に上りしもの、首に吉備眞備あり、後に菅原道眞あり、唯だ二人のみ。眞備、本姓は下道朝臣、その先は吉備津彦命より出て、世、吉備に居る。九世の祖は御友別、その長子稻速別川島縣を食む。子孫道臣を以て姓となし、天武の朝、姓朝臣を賜ふ。父國勝、右衛士少尉たり。眞備從八位下に叙せらる。靈龜二年、遣唐留學生となる。時に年二十四。唐に在るや、經史を研修し、兼藝に該渉す。當時學生にして、名を唐に播くものは、唯だ眞備と阿倍仲麿と、二人のみ。天平七年東に歸るや、唐禮一百三十卷・天衍曆經一卷・天衍曆立成十二卷、その他數十品を獻じ、正六位下大學助に叙任せられ、尋いで中宮亮となり、從五位上に累進し、右衛士督に轉ず。孝謙帝の東宮に在るや、學士となりて、禮記・漢書を授け、恩寵甚だ渥く、遷つて大夫となり、仍ほ學士を兼ぬ。頃くありて、今の姓を賜ひ、右京大夫に遷る。勝寶の初、從四位上に進み、事を以て、筑前守に左降し、俄に肥前守に遷る。四年遣唐副使となり、唐に赴くや、玄宗、銀青光祿大夫を授く。歸るに及び、風に遭うて船散じ、眞備、益久島に漂着す。六年紀伊の牟漏崎に至り、京師に入る。正四位下に進み、太宰大貳に陞る。建議して、筑前怡土城を築く。敏しで、其事を監せしむ。寶字の初、唐の

亂るゝを以て、帥船王及び眞備に敕して、邊境の備をなさしむ。眞備議して曰く、且つ耕し、且つ戰ふは、古人の稱するところ。請ふ五十日教習して、十日役使せむ、と。廷議之を可とす。又授刀舍人春日部三關・中衛舍人土師關成等を遣し、就いて、八陣九地結營の法を學ばしむ。尋いで、西海道節度使となる。八年召されて、造東大寺長官となりしが、病を以て事を視ず。惠美仲麿の反するに及び、軍事を參畫し、從三位に叙せられ、參議に拜し、中衛大將を兼ぬ。眞備賊の必ず走らむことを想像し、兵を遣して、道を遮り、部下を指麾し、甚だ宜しきを得、旬日にして、事平らぐ。神護元年、勳二等を授け、正三位に叙せられ、明年中納言となり、俄に大納言に轉じ、靑宮の舊恩を以て擢んでられて右大臣を拜し、從二位を授けらる。景雲の初、近江の穀二千斛を賜ふ。眞備、對馬島の墾田三町一段・陸田五町二段・雜穀二萬束を獻じ、以て島儲となす。敕して、太宰府の綿二萬屯を賜ひ、新羅の交開物を買はしむ。稱德帝、その第に幸し、正二位に進め、尋いで稻十萬束を賜ふ。四年、帝不豫、眞備に敕して、中衛左右衛士府事に知たらしむ。帝崩ずるや、皇嗣未だ定らず、眞備等、文室淨三を立てむと欲す、淨三固辭す。又その弟大市を立てむと欲す、左大臣藤原永手等、定策して光仁帝を

その人物及び功績

立つ。眞備嘆じて曰く、圖らざりき、壽を享くるの弊、終に此極に至る、と。乃ち致仕を乞ふ。聽るさず。累表苦請し、久うして允さるゝを得たり。寶龜六年薨ず、年八十三。使を遣して弔贈せしむ。眞備の大納言となるや、奏して二柱を中壬生門の西に樹て、其一に題して曰く、凡そ官司に抑屈せらるゝものは、宜しく、此下に至りて、申訴すべし、と。又其一に題して曰く、百姓にして寃枉を被るものは、此下に至りて申訴すべし、と。並に彈正臺に命じて、その訴狀を受けしむ。はじめ、大學の釋奠、その儀、未だ備らず、眞備禮典を稽へ、之を重修して、器物はじめて備はり、禮容觀るべし。又律令二十四條を刪正す。延曆中、詔して、之を用ふ。著すところ、私敕類聚、三十八條あり。

聖武・孝謙の二帝、相繼いで、佛を信じ、內廷弊事多し。眞備その間に在り、優容委蛇、身、重臣となりて、革正するところなし。藤原廣嗣の反する、又玄昉と眞備とを以て祠となし、眞備因つて一たび貶せらる。これに次いで道鏡神器を覬覦するの日、眞備又之に阿從す。これ全く講經を以て奇利を釣るもの、張禹・孔光、一流の人、その氣節に乏しきを病む。近世安積艮齋の史論中、眞備を譏斥せし文あり、毫も寬假するところなく、頗る快心の事に屬す。然れども、眞備海を航し、偶ま玄宗の盛時に遭ひ、

その學

歴代の奬學

その文物を傳へ、學制を完備せしの功、亦た沒すべからず。物茂卿、かつて之を稱して曰く、むかし邃古に在り、吾が東方の國、泯泯乎をして知覺なし。王仁氏ありて、而して後に、民始めて字を識り、黄備氏ありて、而して後に、經藝始めて傳へ、菅原氏ありて、而して後に文史誦すべし、惶寓氏ありて、而して後に、人々言ふときは、天を稱し、聲を語る。この四君子は、世、學宮に尸祝すと雖も可なり、と。稱揚頗る到ると雖も、亦た必ずしも溢美の言に非ず。

一部の私教類聚、その學、內外兩教に渉るを證す。而して、是れ實に後世陽儒陰佛の俑を作りしものに非ざるか。學者詞人の唐に於ける、亦た此の如きものあり、眞備に於て、何ぞ怪しまむ。世に眞備片假名を創始せりとなすものあり。然れども、私見を以てすれば、片假名は、訓點に用ふる略字より、漸次變化せしものにして、その起原、更に古く、その完成、はるかに後に在り、この說斷じて信ずべからず。

第七章　王朝學風の盛衰

大寶の御宇、學制はじめて定まりてより、歴世文教を奬勵せしこと、史に明徴あり。今その彰著なるものを、左に列記せむ。

奈良朝

元正天皇、養老元年、詔して、釋奠の器を造る。之に次いで、聖武天皇、神龜三年、內裏玉泰を生ずるや、朝野の文士に勅して、各之が詩を作らしむ。時に制に應ずるもの、百十二人、物を賜ふこと差あり、その達材、多きを見るべし。孝謙天皇、天平寶字元年、大學寮田三十町を置き、生徒の用に供す。勸學田、こゝに始まる。

平安朝

延曆四年、菅原古人、儒を以て名を知られ、桓武天皇に侍讀し、輔弼の功あり、こゝに至りて、敕して、その子淸公等四人に衣糧を賜ひて、學業を勵ましむ。十一年(或は十七年といふ)詔して漢音を學ばしむ。はじめ、王段の二博士、百濟より來るや、授くるところ、皆漢音、その後、百濟の尼法明、對馬に來り、吳音を以て經を誦してより、吳音大に行はれ、時降るに及びて、訛謬漸く多し、故に此令あり。佛門亦た漢音を習はざれば、度緣を給せず。十三年十一月、詔して、大學寮に越前の水田百二十町を賜ひ、はじめて、號して勸學田といひ、故を拜せて二百二十餘町。平城天皇大同元年、諸王以下の子弟、十歲以上に詔じて、皆大學に入り、分業敎習せしむ。三年一月、直講博士一人を省いて、紀傳博士を置く。これより、紀傳・明經・明法・算道を稱して、四道の學と

なす、嵯峨天皇弘仁十二年、文章博士、從七位たりしを改めて、從五位の官となす。淳和天皇、天長元年、敕して、大學寮に山城の地五町九段を賜ひ、二年五月、明法博士を從七位下の官となし、四年三月大學寮に河內荒閑の地五十町を賜ふ。仁明天皇、承和元年四月、紀傳博士を停めて、文章博士一員を加置す。八月天皇、文宣王を紫宸殿に釋奠し、親ら尙書を講じ、後に恒例となす。光孝天皇、仁和元年八月釋奠、大臣公卿、畫像を九拜す。これより先、論孝五經、周禮等を輪講せしが、この年、周易を講ず。醍醐天皇、延喜五年、藤原忠平等に敕して、式を撰定せしめ、別に篇目を立てゝ、大學寮釋奠等の式といひ、開卷瞭然たり。村上天皇、康保元年、詔して、橘氏の私學學館院を以て、大學寮別曹となし、又釋奠して、書を講ず。拾芥抄には、七經といふ、即ち孝、禮、詩、書、論、易、傳をいふなり。

奈良朝より、王朝の末に至るまで、文敎の盛、かくの如しと、ゝに於て、官學の外、別に私學の起るあり。

私學

その權輿となすべきは、和氣清麻呂の弘文院なり。日本紀殘篇に載せたる其傳に曰く、長子廣世、便ち大學別當となり、墅田廿町、寮に入れて、勸學料となす。大學の南邊私宅を以て、弘文院を置き、內外經書數千卷を藏し、墅田四十町、永く學料に充て、以て父の志を終へしむ、と。拾芥抄に曰く、弘文院、和氣氏の諸生別當たり。荒廢の地たり。勸學院の北に在り、清麻呂、之を建立す、と。その創建は、廣世なれども、父の志といへば、之を清麻呂に歸するも可なり。見よ、宇佐の神敕を受け、姦僧天位を覬覦するの變を防止せし一代の忠臣は、又實に文敎の振興に志ありしものなるを。

弘文院

弘文院、一たび設けらるゝや、空海の綜藝種智院、藤氏の勸學院、橘氏の學館院、在原氏の奬學院、天長の淳和院、菅原氏の文章院等、前後して建てられたり。

其他の私學

綜藝種智院は、續性靈集補闕鈔に見ゆ。然れども、純然たる學校には非ざるが如し。淳和院は、天長帝の仙洞にして、即ち西院なり。その學院となれるは、何年なるか、今詳ならずと雖も、三代實錄に「元慶五年十二月、淳和院、永く別當を置く。これより先、無品恒貞親王、奏言云々」とあれば、王氏の年少、學を爲すところたりしは、疑ふべからず。奬學院は、拾芥抄に「在原行平卿、之を申置す、勸學院の西に在り」といひ、西宮記には、その建立を以て、元慶五年に在りとなせり。後に大學寮の南曹となりしことは、日本紀略に見ゆ。學館院は、文德實錄、嘉祥三年五月、嵯峨太皇太后、弟右大臣氏

公朝臣と議して、學舍を開き、諸子弟に勸めて、誦習せしめ、時人漢の鄧皇后と比す」といへり。勸學院は、天長三年、左大臣藤原冬嗣の創立に係ること、後紀に見ゆ。藤氏全盛の時、生徒殊に多かりしならむ。而して、朝野群載に收めし天永三年勸學院解狀に、右、謹んでに按ずるに、勸學院は、閑院贈太政大臣建立の後、こゝに三百載とあるを見れば、その長く續へざりしを知るべく、俗諺に、勸學院の雀、善く蒙求を囀る」といひしもの、亦た宜なり。文章院、又朝野群載に見ゆ。

武人の諸學

公卿縉紳の輩學、かくの如く、而して、武人の建學は、はるかに後れて、鎌倉時代の金澤文庫を首とし、足利學校の創立、又之と相若くが如し。

諸學博士の說

公、私の塾舍並立し、四道の學、ともに行はれ、博士輩出し、各自家に名づけ、專る以て相輕んじ弟子亦た門戶を立て、常に爭言あり。この時に方り、春澄善繩、仁明帝に優遇せられて莊子を講じ、性周愼謹朴、所長を以て人に加へず、門徒を謝遣し、終に講讀の及ぶところとならざりしといふ。

諸家專門の學

嵯峨の前後數世、皆學を好む。諸博士、相爭ふは、奎運一時の盛を證するものなり。帝の時、菅原清公・清原眞人・南淵永河・朝野鹿取・小野岑守・菅原清友等あり、皆儒を以て聞こゆ。然り而して、如上諸家、子孫相嗣いで、其學を承くるや、遂に之を以て職となし、世襲專門の風を馴致するに至り、加ふるに、天慶亂後、權、將門に歸し、幾もなくして、源平二氏となり、北條氏となり、朝家の學、長しへに振はず、依然として、漢唐の學を株守し、進講又典例に從ふのみ。はじめ、菅原道眞・藤原在衡、皆文章生より進んで、三公に至る。こゝに於て、紀傳の學、大に重んぜられ、菅氏の學、最も盛なり。同時に藤原弘蔭、日野氏の家を起し、曾孫有國、一條天皇の時に名あり。而して、道眞の同學大江音人は、江家の學を起し、その裔匡衡父子、並に世に稱せらる。諸家の學、その後、振はず。唯だ菅江二氏、朝廷の儒たりしこと、これより數百年。清原氏は、中原氏とともに、太政官の外史局務を掌り、又攝關家の別當たりしと雖も、往々にして、學者を出し、又二氏と並ぶ。就中賴業ひとり卓見を以て稱せらる。

遣唐使の廢止

宇多天皇の寬永六年、菅原道眞の議によりて、遣唐使を廢す。世、或は之を以て、儒學衰微の因に擬すものあれども、私見を以てすれば、斷じて僻見なり。この年、唐に在りては、昭宗の乾寧元年、李克用、邢州に克ち、李存孝を殺せし時に當り、後九年、唐祚全く亡び、五代十國の世を經て、遂に宋となる。この間、たとひ交通を怠らずとす

詩賦の盛衰

るも、また何ぞ益するところあらむ。況んや、國際上の使聘、全く絶え、且つ私航禁ありと雖も、吳越の商船、常に往來し、趙宋建國の後、なほ彼此相通ぜし事蹟、少からざるに於てをや。而して、漢唐訓詁の反動は、宋儒性理の學となり、邵康節、周濂溪より、二程子を經、朱晦菴に至りて、之を大成し、その學の消息は、晦菴歿後、幾もなくして之を我が邦に傳へたるなりき。

學校の廢弛と專門の家學とは、儒學をして、漸次衰運に向はしめし所以なれども、予輩は、更に大なるものあるを忘るべからず。他なし、國文學の勃興、是れなり。奈良朝以來、詩賦を尚び、漢籍の講習は、之に資せむが爲の準備に過ぎず。而して、訓詁の學、又思索を助長するに寸効なし。儒學の存するは、唯だ形骸のみ。嵯峨天皇、天資文を好み、睿才神敏、宸藻最も富贍を稱す。次いで、宇多、醍醐の諸帝、皆聖作あり。村上天皇、最も好文を推し、傳ふるところ、宮鶯曉囀の七絶、最も警絶と稱す。而して、菅原文時の封事、奢侈を禁じ、貴官を停むるの外、鴻臚館を廢せず、遠人を懷け、文士を勵さむことに論及して曰く、鴻臚館は外賓の爲に置くところなり、頃年所司修造する能はず、漸く將に荒廢せむとす。若し歸化の國、德を慕ふの人をして、之を聞かしめば、或は君恩薄しと謂はむ。加之、故事、蕃客朝するとき、之を饗し、之を餞するや、必ず賓主をして、筆を闘はしむ。これに因つて、詞人才子、心、蕃、漢に對して、文藻を競はむことを期す。夫れ文章は、經國の大業、不朽の盛事なり。伏して望むらくは、深く圖り、遠く慮り、此館を廢する勿れ。然らば、遐方公を離れず、文士業に倦むことなからむ。これ即ち海外に示すに、懷柔の仁を以てし、天下に耀かすに郁文の華を以てするなりと。今夫れ、秦極まるは、否に赴くの時、村上の御宇は、辭章盛衰の因つて判るところ、その之に資するの要なきや、儒學亦た漸く振はず。

王朝詩文の掉尾

文時の封事は、三善清行の作と相並んで、王朝文章の掉尾なり。而して、都良香、紀長谷雄の輩は、詩壇最後の奎星、光焰なほ天を燭す。運籌累牘、珠玉を疊み、文彩風流一時に朗映せしもの、豈に偶然ならむや。然れども、その中、すでに衰颯の氣あるを奈かむ。これより後、尾して出づるもの、光芒漸く短く、やゝ傳ふべきは、ひとり前中書兼明親王あるのみ。詞人學者、復た出でざるなり。

國文の勃興

詩賦の盛行は、國文の發達を防礙せしこと少からずと雖も、今や其地を易へて、宮闈の新詞、頗る觀るべきものあり。はじめ、中古の公文、すべて漢文を用ひ、大禮の

時、わづかに宣命體を用ふるのみ。その一時に盛なるや、之を善くせざるもの、或は人に命じ、或は強ゐて自ら摹倣し、天朝固有の言語を用ふるを恥としたりき。唯だ女流は、深閨に在りて、多く學を修めず、わづかに假名を學び、直に言語を寫せしを以て、其語は古に異なりと雖も、其趣は居然として相同じ、延喜の頃、紀貫之、その雅馴なるに着目し、古今集序・大井河和歌序等、皆その體を用ひ、後に土佐の任滿ちて歸るや、日記を錄せり。且つこれより先、和歌の小序、漢文を用ひしも、古今集以下盡く和文に變ぜり。かくの如くして、和文は、女子の消息文より出でゝ、新に其勢を擅にし、一たび宮掖に入るや、愈よ其盛を見るに至れり。一條天皇の世、宮媛才名あるもの無慮十數人、紫式部・清少納言・赤染衛門より、高内侍・江侍從・新宰相の輩に至るまで、皆假名文及び和歌を善くし、辭藻婉麗にして意思深雅、一時令秀詠言の選、古今に冠絶す。故に帝自ら曰く、朕の不德なるも、唯だ人を得るの一事、庶くは前朝に耻ぢず、と。こゝに於て、妃嬪藝を學ぶのみならず、公卿縉紳、又爭ひて之に向ひ、加ふるに、九重の上、風流都雅を事とするの極、淫靡の風、所ゆる月卿雲客の間に起り、濃清奢華を貪るの俗に進らず、歌を以て相贈答し、情好を通じ、物の哀れを感ずるを

風俗の頽廢

以て優秀となす。廟廊の臣僚、すでに氣骨なし。その間、豈に聖經賢傳を讀誦し、子史の精華を咀嚼するものあらむや。その漢籍といふは、唯だ白傅を以て稱せられし一部の長慶集のみ。文教全く衰頽し、舉世又儒學を講習するものなく、專門の數家に於て、僅に一線の餘脈を維ぎしに過ぎざるなり。左大臣賴長・少納言信西の輩、頗る學問を好むと稱すれども、その專習するところは、典禮に在り、故實に在り、終に儒學を振興するに想及せざりしなり。故に後白河天皇の時、木政大臣藤原伊通、意見十七條を上り、其中に曰く、帝王學を崇ぶ、詩賦を善くするを謂ふに非ず、治體を知るが爲なり。君、此を學んで、臣を使ひ、臣、此を學んで、君に事へば、天下自ら治まるべし。もし徒に詩賦に工にして、事情に達せざるもの、無益の人なり。世、當に經世の器あるべし。臣を知るは、君に如くなし。請ふ、之を擇べ。凡そ大臣專ら身の爲に謀り、心を盡して、公に奉ぜざるもの、皆朝廷の罪人なり。臣の學ぶところ、此の如し、と。惜いかな、この疏をして、數十百年の前に出でしめざりしや。嗟乎、時すでに晩し、たとひ、臍を噬むと雖も、悔何ぞ及ばむ。

次に菅江二家の傳統を略述し、最後に清原頼業に及び、以て此篇を終ることゝ

なさむ。

菅原古人

是善

道眞の略傳

第八章　菅　氏

菅原氏は、野見宿彌の後、古人に至りて、姓を菅原といふ。古人、延曆の世に在り、儒行世に高く、俗と苟くも合はず、卒後家に餘財なく、諸兒寒苦、桓武天皇、その侍讀の勞を追賞し、その男四人に衣糧を給し、學業を勸めしむ。その子清公、その孫是善。是善善く家業を紹ぎ、清和天皇に侍讀し、孝經論語等を講じ、官、參議に至り、政敎を補翼し、又文藻に工なり。帝、特に之を寵遇す。かつて諭を奉じて、都良香等と文德實錄十卷を撰し、又自ら東宮切韵二十卷、銀牓輪律十卷、集韵律詩十卷、會分類集七十卷を撰す。別に家集十卷あり。元慶四年八月薨ず。

是善の第三子を道眞となす。その行迹は、世人知らざるなければ、こゝに具せず、唯だ儒家としての經歷に就いて、略述せむ。道眞、幼にして穎悟、十一歲の時、詩を賦す。是善嘆じて曰く、蘭は苗にして秀なり、と。かつて、都良香に就いて學ぶ、良香その聰敏を奇とし、之が師たるを愧づ。貞觀中、文章生に擧げられ、得業生となり、次いで

その慘禍

進んで文章博士となる。寬永六年、遣唐使を命ぜられしも、唐末の寇亂を聞き、奏して、之を罷む。その後、累りに擧げられ、醍醐天皇昌泰二年、右大臣に陞りしが、藤原時平等と合はざるを以て、終に讒せられ、その翌年、太宰權帥となり、延喜三年、その地に薨ず。一條天皇の時、太政大臣正一位を贈らる。

道眞、末路の慘禍を免れずと雖も、文章生より身を起し、三台の貴位に上り、百世の下、なほ廟食す、その榮、極まれりといふべし。而して、その擢進は、實に宇多天皇の信任に本づき、聖鑒その才學德器を認めしに由る。傳へて云ふ、道眞年五十の時、門人宴を設けて、之を賀するや、一老人あり、賀章及び沙金を案上に置き、顧みずして去る。衆見て之を怪む。その文に曰く、傳へ聞く、菅家の門客、ともに知命の年を賀す、と。弟子跡を人間に削り、世上に名なしと雖も、而かも、數ば淳敎の風を記し、多く蘊味の過を改む。古人言ふあり、德として報ゆざるはなく、言として酬ゆざるはなし、と。深く彼の義に感じ、罷めむと欲して能はず。金は以て中誠の輕からざるを表し、沙は以て上壽の涯なきを祈る。其人を疑ふこと莫れ、其志を求むべし。遠く北闕の以北に居り、遙に南向の和南を增す、と。然る後、宇多帝の設けしところなるを知る

といふ。その尊重されしや、此の如し。こゝに於て一介寒素の儒士、衣冠の身、臺省に上り、德器の隆を以て、華胄世家の年少と並ぶ、その妬忌猜陷を免れざるもの、亦た宜なり。その右大臣に叙せらるゝや、表を上つて、辭して曰く、臣、地は貴種に非ず、家は是れ儒林、偏に往來拔擢の恩に因り、自ら今日に至る。昇進の次、人心すでに縱容せず、鬼瞰必ず睚眦を加へむ。伏して願はくは、陛下高く聖鑑を廻し、早く臣の官を罷め、唯だ志を匹夫に奪はず、亦た復た望に衆庶に從ふを得む、と。表三たび上れども、聽かれず。その後年の禍、道眞自ら之を知る。復た三善清行の書、離朱の眼も、睫上の塵を見ず、仲尼の才も、匱中の物を知り難し。公、明哲なりと雖も、宜しく無妄を慮るべし、といふを待たざるなり。嗟乎、千秋金鑑の張九齡は、李林甫と相容れず、陸贄は裴延齡の爲に出され、貞元の末政、終に救ふべからず、裴度、五朝の重臣を以て、出入數ば勞す。黨猶器を同うせず、冰炭相容れず、君臣際會の難き、古しへより然り、又何ぞ怪むに足らむ。唯だ明哲は身を完うし、兼ねて君の惡を爲さず、易に亢龍の悔ありといふもの、信なるかな。

その經綸の才、果して宇多帝の鑑識に負かざるや否やは、こゝに論ぜず。その學、

その本領

淳茂

頗る該博、唯だ夫れ、常に和魂漢才を口にしたると、遺誡中に述べしところとを併看すれば、道眞は必ずしも、外國思想に盲從するものに非ず、多少獨特の見地を有せしならむと雖も、その家學は、紀傳の一道にして、專ら書史を講習し、因つて自ら類聚國史を撰びしことあり。物茂卿之を稱して、菅原氏あり、而して後に、文史はじめて觀るべし、といひしもの、中れりずて、に、文を善くし、又詩に妙にして白家の調を學ぶ。要するに、一代の藝士、廟堂瑚璉の器たる、固より可なりと雖も、特に儒術を以て重きを爲すものに非ざるが如し。著すところ、菅家文章菅家後集等あり。

道眞の子淳茂、才藻父の風あり。大江匡房、かつて謂ふ、儒家家聲を墜さゞるもの、唯だ都在中及び淳茂等、三數人のみ、と。淳茂、夙に秀才に擧げられ、對策及第して、文章博士となり、後に式部權大輔に任ず。宇多法皇、かつて中秋を亭子院に賞し、文人を召して、詩を賦し、淳茂をして序を作らしむ。法皇、淳茂の詩を見て嘆じて曰く、恨むらくは、故右相をして、之を見せしめず、と。渤海の貢使裴璆の來朝するや、淳茂迎接し、詩を以て酬酢す。はじめ貞觀中、璆の父頲、使を奉じて來朝し、道眞と唱和す。こに至りて、淳茂の詩、言、先人の時の事に及ぶ。璆、讀んで感泣す。淳茂と璆と、兩生邂

文時

爲長

大江音人

近世以て奇となす。その子在躬、その孫輔正、輔正、文章博士となる。

淳茂の兄右大辨高規の子を文時となす。文時は、道眞の孫なり。文才博洽、名聲當時に震ふ。源英明・大江匡衡等、皆文時に請うて、その辭賦を竄改す。天慶五年、對策及第、內記辨・式部大輔を歷、文章博士を加へらる。村上の朝、封事を上る、その剴切は三善清行に及ばずと雖も、亦た能く事を言うて、當時に補あり。識者之を稱す。帝、詞賦を好む。文時寵遇太だ渥、然れども、晩年に至り、官路滯塞、天元の初、頻りに請うて從三位に叙せらる。世に嘗三品と稱す。子雅熙・輔昭、並に文學あり。輔昭、最も著はれ、文才、父祖に減ぜず。

文時の兄雅視より七世、爲長といふものあり、又儒を以て、建保中に名あり、次篇略述するところあるべし。

第九章　江家

大江氏は本姓土師、音人に至りて、始めて顯はる。音人、業を菅原是善に受け、博學洽聞、善く文を屬す。天長の末、文章生に補せられ、承和中、秀才となり、累遷して、從三位參議左衛門督に至り、檢非違使別當に補し、清和天皇に侍讀す。かつて、是善と勅を奉じて、貞觀格式を撰定す。その序及び表文の如き、皆音人の手に出づ。著すところ、群書要覽四十卷・帝範三卷あり。かつて曰く、我國の爲に力を致すこと多し、子孫必ず大位に至るものあらむ、と。その孫維時及び七世の孫匡房、皆官納言に至り、果して其言の如し。

朝綱

維時

その子玉淵・千里・春潭・千古。玉淵の子朝綱、父祖の業を繼ぎ、該博宏贍、詞藻典麗、夙に文章生に擧げられ、對策登科、村上の朝、敕を奉じて、新國史及び坤元錄を撰す。又別に後江相公集あり。その子澄明・澄江・澄景。澄明亦た文を善くす。惜いかな、早く夭す。澄江の孫佐國、頗る詩文を善くし、その子通國、亦た才思あり、玉淵又子仲宣あり、その子以言、又文名あり、文章博士となる。

音人の第四子を千古といふ。千古の第三子維時、夙に文章生に擧げられ、後文章博士に遷り、承平中、式部少輔となり、文選を北曹に講ず。天德中、中納言に至る。人となり、博聞彊記、經史に淹貫し、凡そ遷都以來、第宅の變遷、人物の死亡年月、皆能く諳記す。江家の學、こゝに至りて、典禮に傾く。著すところ、日觀集あり。子重光・齊光。重光

匡衡

の子を匡衡となす。

匡衡、人と爲り、長身鳶肩、七歲はじめて書を讀み、九歲詩を賦す。業を祖維時に受け、長ずるに及び、博洽當時能く及ぶものなく、略ぼ讖緯を解し、和歌を善くす。天延中、文章得業生に擧げられて、秀才に補し、永觀永祚の間、文章博士に遷り、一條天皇に侍讀す。著すところ、江吏部集あり。匡衡、位、才に稱はず、仕途沈滯し、屢ば請ふところあれども得ず、每に轗軻を嘆ず。かつて朝列と舟を浮べて、大井河に遊び、各和歌を咏す。匡衡の歌に曰く、

川舟にのりて心のゆくときは、沈める身ともおもはざりけり。

匡房

匡衡、かつて一藏室を設け、四面紙窓、躬自ら其中に在つて、校補纂緝し、日に晒し、風に刷ひ、謹厚生四人を擇んで、側に在らしめ、一人披繙し、一人補寫し、一人糊を作り、一人裝綴し、日々以て常となし、歲を卒へ、身を終ふ。かつて曰く、吾に異能なし、以て前を修し、後に貽すべし。唯だ江家の秘書監となり、守つて損失せざれば、吾が事畢る、と。その子擧周、時棟、皆對策及第す。擧周の子成衡、その子を匡房となす。

匡房、穎悟絕倫、四歲はじめて書を讀み、八歲史漢に通じ、十一歲詩を作る、世稱して神童となす。權大納言源師房、詩を賦せしめ、以て之を試む。匡房筆を援つて、立どころに成る。師房之を奇とし、後冷泉天皇に進呈す。天皇大に感賞し、學料を賜ふ。關白頼通、平等院を宇治に創し、師房と往いて規度す。大門北に向ふ。頼通、師房に問ふ、寺門北に向ふ、古しへ亦た諸ありや。曰く、知らず、と。匡房なほ幼、從つて後に在り、師房往いて之に問ふ。匡房曰く、天竺の那蘭陀寺、震旦の西明寺、本朝の六波羅寺、門皆北に向ふ、と。頼通嘆賞す。文章得業生に補せられ、對策及第、式部少丞となる。才を負うて世を憤り、跡を山林に晦まさむと欲す。權中納言藤原經任、之を諭して曰く、卿は命世の才、何ぞ自愛せずして、遽かに此に至る、と。匡房廼ち止む。然れども、此に因つて、頼通の意に忤ふ。時に後三條天皇、東宮に在り、匡房學士となりて、帝に侍讀し、帝亦た悅んで、善く之を遇す。匡房家貧、衣を借りて、版位に就き、日夜左右に在りて、文學を講論す。帝、位に即くや、即日藏人に補し、幾もなくして、左衛門權佐となり、京師に令し、嚴に夜行を禁ず、是を以て、帝の世を終るまで、盜賊稀少、路人剽掠の患なし。尋いて、春宮學士を兼ね、右少辨となる。帝、かつて、幣を伊勢に奉じ、親ら宣命を草して、匡房に示す、「朕、即位以來、敢て私をなさず」の語あり。匡房曰く、神は欺罔すべか

その聲譽

らず、諧ふ、叡念を賜へ。帝、色を作して曰く、朕、何の私ある。曰く、前に藤原實政を以て左中辨となす、豈に隆方に超えずや、と。帝、默して罷む。その直言、概ね此の如し。承暦中、高麗醫を請ふ、廷議その無禮を以て遣らず。匡房をして、牒を作つて、之に報ぜしむ。その詞、云ふあり、雙魚難達鳳池之浪、扁鵲豈入雞林之雲、と。世之を傳稱す。永保應德の間、式部大輔・左大辨を歷、寛治の初、參議に任じ、嘉保元年、權中納言となり、承德元年、太宰權帥を兼ね、明年に至りて、はじめて任に赴き、尋いで正二位に進み、秩滿ちて歸る。かつて、人に問つて曰く、余、鎮西に在り、得るところの雜賄、密に其貨を識し、受くべきと然らざると、分つて二艘に載す。海を渡るや、一艘を覆沒し、非理の貨船、事なくして到る。世、すでに澆季、神亦た靈なし、と。その憤世の意を觀るべし。嘉承中、中納言を罷め、再び權帥となりしも、足疾を以て、任に赴かず、遂に府務を決す、是を以て、府解屢ば至り、獄訟繁く興り、時論之を譏る。天永二年、大藏卿を兼ね、幾もなくして、髡髮し、晩年の日錄を焚き、即夜薨ず。年七十一。世に江帥と稱す。著すところ、江家次第・江談・江都督集等あり。

はじめ、參議音人、文學を以て著はれ、八世業を繼ぎ、匡房に至りて、三世帝師となる。薨ずるに及び、中納言藤原宗忠、嘆じて曰く、朝の樞要、文の燈燭なり、國家良臣を失ふ、惜むに勝ゆべけむや、と。匡房和歌に工なれども、最も詩文を以て、世に名あり、少時、秋日閒房賦を作る。大學頭藤原明衡、之を賞して曰く、その鋒森然、定めて敵者少からむ、と。又落葉埋泉石の詩を觀て曰く、すでに佳境に入る、と。長ずるに及びて、才藻炳蔚、一時の名聲、悉く之を稱す。菅公廟に謁して作られる二百韻の詩の如き、盛に世に傳へ、その他、大篇巨什、諸書に散見す。然れども、今之を觀るに、語、極めて淺率卑近、殆んど稱するに足るものなし。要するに、その才、綜覈に敏、自ら運するは、蓋し所長に非ざるなり。

その學

江家の學、匡衡に至りて、典禮に傾きしこと、前に述べたるが如し。匡房亦た然り博覽强記、朝典に諳練す。その江家次第を著すや、縉紳取つて摸楷となす。家に藏書多く、累世災に罹らず。庫を二條高倉に作る。或は曰く、京師火多し、何ぞ之を思はざる。匡房曰く、我が家の文章、當に朝家に關すべし、何の慮か之あらむ、と。仁平中、文庫火に遭ひ、朝廷亦た衰ふ。

その本領

匡房、藤原伊房・藤原爲房とともに、博物を以て名を齊うし、時人稱して三房とい

ふ。然れども其志を繹ぬるに、固より濟世に意あるもの、これが故に、一意典章を講習せしや必せり。その後三條天皇に敎ふる、德を修め國を治むるの要を以てし、その位に即くに及び、荐りに弊政を革めて、天下大に治まり、白河天皇、又之を擢用す。こゝに於て、藤氏の權衰へて、院宣の世となる。然れども、匡房遂に大に合はず、故に晩年に及ぶや、知己の凋謝を傷み、嘆じて曰く、匠石は斧を野人に輟め、伯牙は絃を鍾子に絶つ、況んや、風騷の道、何ぞ識者鮮きを怪まむ、と。これを以て、寛治以後は、心を文辭に役せず、感に觸れて偶詠し、輯集卷を成し、暮年詩紀を作つて、自ら述ぶ、又かつて自ら稱して曰く、我、文學穎達を以て名譽古に邁え、齡、中壽に垂んとす。唯だ藏人頭を經ざると、子孫の無似とを以て憾となすのみ、と。然れども匡房の子孫、必ずしも無似ならず。その曾孫廣元、源頼朝を關東に佐け、之をして天下に覇たらしめ、因つて幕府の元老となり、數ば大難を定む。大江氏、すでに王家を去りて、武門に屬し、その末、毛利氏となり、元就に至りて、遂に山陽山陰十六國に覇たり。征韓の役、小早川隆景、明の大軍を碧蹄館下に敗り、李如松、膽落ち、氣死し、因つて明をして和を我に請ふに至らしむ。隆景は元就の子なり。儒家の末、變じて武門となり、材を出

江家と源氏

すこと少からず、豈に異ならずとせむや。

江家の源氏に於ける、緣故實に淺からず、而かも、又匡房より始まる。永承年中、源義家の陸奥より還るや、關白藤原頼通に詣り、語、戰功に及ぶ。匡房固より兵學に通ず。別室に在りて、之を聞き、退いて人に謂つて曰く、渠、將才あり。好男子、惜むらくは、未だ兵法を知らず、と。從者慍り、以て義家に告ぐ、義家曰く、其れ或は然らむ、これ予の幸なり、と。遂に弟子の禮を執つて、兵書を受く。後、寛治元年九月、義家、清原武衡等を擊ち、金澤柵を攻めむとするや、柵を去ること數里、雁行の亂るゝを見て曰く、これ伏あるなり、と。兵を縱つて搜索し、數百人を得て、之を鏖す。因つて衆に謂つて曰く、兵法に言ふ、鳥亂るゝものは伏あるなり、と。我學ばざれば殆し、と。後、遂に二衡を平らぐ。按ずるに、「鳥起者伏也」は孫子行軍篇の語、義家先づ此書を受けしものか。

江家の學

匡衡・匡房、憤世の念、終世消遣する能はず。廣元の東下、豈に偶然ならむや。はじめ匡房一たび攝關の專政を變じて、院宣の世となし、廣元再び之を變じて、幕政を開く。大江氏の國家政務に關する、固より大。その學儒に醇ならずと雖も、決して、之が考覈を忽にすべからざるなり。

第十章　清原頼業

その略傳

清原氏、攝家の政を辨理すること多年、その間、儒を以て稱せらるゝもの、殆んど之なく、頼業に至りて、はじめて名あり。頼業、もと顯長と名づく、左大臣夏野の裔、大外記祐隆の子なり。大外記明經博士に補せられ、特に敕して、明法を兼ねしめ、高倉帝の侍讀となす。承安二年、宋國、法皇に書を贈つて云ふ、日本國王に賜ふと。朝議以爲へらく、禮に非ず、宜しく之を卻くべしと。時論決せず。頼業曰く、朱雀一條の兩朝、彼に贈るところの牒狀、稱呼不敬なり、卻けて受けず。承曆中、贈るところ、亦た曰く日本國に賜ふと。而かも之を受けて、人或は譏議す。況んや、今贈るところは、明州の刺史にして、宋主に非ざるに於てをや。古昔は、彼此互に天皇と稱し、以て敵國の禮を用ふ。而して、今此の如し。耻孰れか焉より大ならむと。聞くもの、之を韙なりとす。安元中、越中權守を兼ね、治承養和の間、諸州兵起るや、內大臣平宗盛、計の出づるところを知らず、乃ち頼業に謀る。頼業曰く、目下の急は、亟に弊政を革むるに在りと。文治五年卒す。年六十八。子孫祠を建てゝ之を祭る。後嵯峨天皇、號を賜うて、車折大

その學

明神といふ。相傳ふ、人あり、かつて車に乘じて、その祠を過ぐれば、車忽ち折る、因つて名づくと。

頼業の禮記を讀むや、本經に據りて、解をなし、舊注を取らず。又大學中庸の二書を其中より抽き、別冊となして進講す。これ世の傳ふるところなり。漢唐の學、行はるゝずでに久し。而して頼業の爲すところ、かくの如きもの、豈に訓詁記誦の餘弊に鑑るところあるか。按ずるに、晦菴朱熹、宋の寧宗慶元六年を以て逝く。之を我朝にすれば、土御門天皇正治二年にして、頼業の死に後るゝこと十一年、全く其時を同うす。朱學傳來の前に在りて、その所見、偶ま暗合す、これ奇となす所以。故に之を贊するもの、或は曰く、夫れ清原頼業の卓見は、猶ほ長庚の空に當るが如し、官私の學、光すでに虞淵に沒して、大學の曹司、鞠して茂草となり、勸學院の雀も、復た蒙求を囀るの聲を聞かず。頼業獨見を此間に奮ふ、豪傑の士といふべし。五山僧徒が、禪餘に涉獵し、桂菴・文之・梅軒・如竹が亂世に講說する、烟嵐を隔てゝ、且つ見はれ且つ滅する星光を望むが如く、混一の運、方に成るの日、愠窩氏出づ、乃ち皎々たる月輪を東嶺の上に見るなり、と。儒學史上に於ける頼業の位地、大抵かくの如し。

儒學史上の位地

予が私見を以てすれば、大學は、三代學校倫理教則の遺、中庸は、原始的道德の宇宙論的解釋にして、支那人文の種族的特色は、まさしく個中に存す。故に後世道德の說を立て、その要素として、史的觀念の尊重を閑却せざるもの、自然の勢、この二書を研鑽せざるべからず。而かも、この書は、二戴の編纂せし禮記中に埋沒し、終にその眞價を發揮するに及ばず。漢唐間に於ける獨立思索は、時運の然らしむるところなりと雖も、其一は、學者輩、爲學の工夫を誤りしが故のみ。宋初の理學、邵康節、周濂溪、張橫渠の輩、なほ儒に純ならざる、固より怪しむに足らず、程門はじめて道學の樹立を見る、即ち四書を以て其學の基礎となせしが故にして、就中、學庸二書の標章を最とす。賴業の見、果して、此に及べるか、載籍備らず、之を研覈するに由なきこと、儒學傳「賴業學才その著したる書を見ざれば是非を知らず」といふが如し。而して、承應遺事、後光明天皇の聖語を引いて曰く、高倉院の御侍讀に淸原賴業を召されけれども、殿上はゆるされず、砌に立て授け奉れり。然るに、其時賴業寵揚を得て、禮記の中より大學中庸を抽出し、敎奉るといふは、近きころの造言なり。一己の私にて世を欺くは、禁止すべしと仰ありけり」と。聖慮蓋し觀るところありて然るならむと雖も、予は唯だ姑らく傳說を存し、他に確證あらざる限り、前人の名譽を抹殺するに忍びざるなり。之を要するに、賴業は、後世宋學の盛行を豫知すべき暗流の源頭に立つものなり。

第二篇　宋學輸入時代（上）……五山時代

第一章　五山時代の學風

文明史上に於ける五山の位地

人は言ふ、鎌倉室町より以後、德川氏の前に至るまで、海內干戈に苦しみ、文敎地を拂ひ、幸にして、一縷の餘命を、五山僧侶の間に留めたり、と。淺いかな、その五山を觀るや。之を以て、國民文學の發達を評量するの語となせば、猶ほ、或は可ならむと雖も、ひとり、儒學に至りては、固より、王朝時代を凌駕し、加ふるに、その、謂ゆる學僧體の風骨非凡にして、造詣の深きこと、却つて、近世の儒者に優るものあり。之を東にして鎌倉、之を西にして京都、兩地の五山禪林に存する古刹殘塔は、長しへに、憑弔の客を惹くと雖も、その中に潛みし幾多の大智碩德が行跡に至りては、全く等閑視せられ、未だ一人の之を顧視するものあらず、嘆ぜざるべけむや。

朝廷儒術の衰微

王綱一たび紐を解き、學校漸く廢し、保元以降に及べば、邑虎翼を傳け、饑鷹肉に飽き、寰宇雲擾、士大夫、皆金革に從事し、八柱一たび傾いて、四維張らず、源平迭に興り、互に雄覇を爭ひ、次いで北條氏となり、足利氏となり、一切武斷を以て、治となす。

儒者の無氣力

朝家衰ふること、すでに久し。こゝに於てか、醍醐・村上の朝、一時の盛を極めし臺閣の文章は、一朝にして、翻つて緇流の間に落ちぬ。その故、他なし、朝臣すでに氣骨を缺き、毫も爲すに足らざればなり。大江廣元・三善康信の輩、皆、京人を以て、東に之き、覇府帷幄の謀臣となる。あゝ時勢、知るべきのみ。

廟廊の文華、必ずしも、廢絕せしに非ずと雖も、その存するものは、唯だ形骸のみ。かの千載・新古今・新勅撰より、新後撰・續千載等に至るまでの歌集を續出せしめしは、なほ朝臣の文彩風流を觀るべく、更に儒學の上に就いて、之を言へば、連綿幾十世、明經文章の博士たりし江菅諸家の後裔、漸く凋零に歸せしも、なほ粟田口儒者として、鎌倉武家の爲に敬重せられし清原業忠の如きあり、自ら稱して菅丞相より三長を有すといへる該博多藝の一條兼良あり、ともに人の注意を惹くに足る。然りと雖も、當時儒臣の學問は、死學に過ぎず、これを一概して、依然たる記誦訓詁のみ、極言すれば、古來の典故に精しきのみ。この風は、はるかに、大江匡房の前後に搦まりしものにして、その由つて來るところ、洵に久し。かの菅原爲長が、大相國の前に出て、僧圓爾と、儒佛兩道

五山緇流の生氣

の優劣を論じ、孔子よりの系統幾世なるやを反問せられ爲に箝口し、他に言ふを得ずして退きしといふが如き、その毫も氣魄なく、能力なきを示すものに非ずといはむや。

加ふるに、當時の緇流は、四民以外に一級をなし、傲然として、王侯將相の間に翺翔し、その素生を尋ぬるに、民間俊秀の才に非ざれば、逆流の不平兒、稜たる風骨、氣宇太だ昂る。之に次いで、北條氏の中葉以後、元僧の來朝するもの多く、足利氏に及べば、或は使命を奉じ、或は求道に意あり、我より彼に航せしもの、頻々として、相繼ぐ。こゝに於て、緇流の學は、日に新なる生氣に滿たされ、駸々としてその歩武を進め、武門亦た之を禮遇せり。見よ、かの北條顯時によりて創設されたる金澤文庫は、應仁亂後、なほ釋奠の禮を擧げ、こゝに出入せしものは、全く五山の禪僧なりしを。而して、之を再興したる上杉氏の祖先は、かつて鎌倉管領として、夙に禪僧の教を蒙りしものなり。かの逸書を藏するを以て名ある足利學校を再興したりしといふ足利基氏は、禪僧義堂に師事せしものにして、後に上杉憲房、僧快元を擧げて、之を督せしめしといふに非ずや。然れども、この二校は、猶ほ言ふに足らず。當時禪徒の巢窟は、實に五山なりき。五山に於て蘊蓄せられ、咀嚼されたる文學は、之を十刹に及ぼし、十刹は更に之を廓して、天下に普及せしむ。當時の武夫猛將、決して、文事に疎ならざりしもの、豈に偶然ならむや。五山十刹、脉絡貫通し、以て亂世の文教を鼓吹す、その効、豈に少々ならむや。

五山とは何ぞや

謂ゆる五山十刹とは何ぞ、北條足利の兩氏に創建せられ、天下の諸蘭若に冠たるものとして、特殊の關係と待遇とを占斷したるもの、その由來等に就いての考證は、餘白なきを以て、こゝに省略し、次に一表を示さむ。

鎌倉五山		鎌倉十刹	
一 建長	一 禪興 六 善福	一 關東	一 禪興 六 善福
二 圓覺	二 瑞泉 七 太慶	二 東勝	二 瑞泉 七 太慶
三 壽福	三 東勝 八 興聖	三 壽福	三 東勝 八 興聖
四 淨智	四 萬壽 九 法泉	四 淨智	四 萬壽 九 法泉
五 淨妙	五 東漸 十 長樂	五 淨妙	五 東漸 十 長樂

京都五山		京都十刹	
一 天龍	一 天龍 六 普門	一 等持	一 等持 六 普門
二 相國	二 臨川 七 廣覺	二 臨川	二 臨川 七 廣覺
三 建仁	三 眞如 八 妙光	三 眞如	三 眞如 八 妙光
四 東福	四 安國 九 大德	四 安國	四 安國 九 大德
五 萬壽	五 寶幢 十 龍翔	五 寶幢	五 寶幢 十 龍翔

時代の遷降に從つて、多少の變革あれども、大體は此の如し。而して、京都五山の上

室町時代の五山

に南禪の一寺、別に存せしこと、最も注意すべし。

鎌倉の五山は、北條氏の禪學を振作せしといふ外、表面に於ては、特に彰著なる事實あらざれども、京都の五山は、足利氏と緊密の關係を存し、その禪徒は、海外の使聘に任ぜしのみならず、往々にして、將軍の顧問に參與せり。故に之を一言すれば、京都の五山は、室町時代の外務・內務・文部等、凡そ天下政敎の權を掌握し、たしかに、政治機關の樞要なる一部なりき。こゝに於てか、苟くも、蝸牛角上、蠻觸の爭を雲烟過眼視し、胸中の權略、優に政治的才幹を抱けるもの若しくは、文學的技能を有する輩に對しては、五山は、實に唯一の登龍門なり。名を取らずして實を擇ぶものは、必ず此に歸せざるべからず。されば、五山の僧侶を指して、武夫の跳梁を避け、或は殺逆の悲觀に厭世の情を起せしものとなすは、未だ必ずしも、その眞相を窮めたるものに非ず。彼等は、斷じて、受性空寂を愛し、坐禪を好む底、不立文字本色の圓顱と看做すべきに非ず。各種の人才は、雜然紛然として、此間に集り來り、五山の叢林に出沒して、各その所長を發揮し、手に唾して、百代の功業を爲さむとす。彼等の中には、戰國游說の士の氣風を帶びたる策士もありしならむ。然れども、之を一概して、その僧侶たるの本分に負かず、平和の方法を以て、その志を遂げむとす。一言すれば、武を假せて文に反し、自家の天地と爲さむとするなり。これ彼等が、延曆園城等の古刹に嘯集せし謂ゆる惡僧輩と異にして、わが島帝國の人文史上に、その特絕の位置を占斷する所以なり。かくの如くして、彼等の幕府及び諸侯に對するや、干戈を戢めしめむが爲に、慈心に訴へて、法を說き、德化に依らしめむが爲に、道念を鼓吹して、學を勸め、海外の文化を輸入せむが爲に、交通を盛にして、國を開かしむ。こゝに於てか、ひとり、之を佛理に求むべからざるを以て、幷せて、儒術を用ふるに至る、その擧止と本領と、兩つながら、尋常人の臆想する能はざるところにして、活眼達識、百世を驚かしむるに足るものなしとせず。故を以て、粗暴なる武人輩も、之を崇敬依信するの止むを得ざるに至り、常にその保護を怠らざりき。

五山の學術

五山の僧侶は、武人に近邇し之を屈伏せしめ、能くその精神を支配せり。その生氣あり、且つ活力に富める、何ぞ怪しむに足らむ。人、すでに枯禪に非ず、故に社會も亦た寂滅に歸せず、否、王朝時代より萎微して振はざりし國民の氣力は、こゝに恢復するの傾向を示せり。ひとり惜む、世は依然として、武人の天地なり、九葉十三世、

海外交通

爭亂相繼ぎ、彼等の盡瘁も、表面上に於ては、さしたる効果なかりしを。然れども、彼等は、長しへに、その態度を改めず。叢林軒を連ね、法塔甍を並べ、泉水靈にして掬すべく、風月清くして嘯くべし。こゝに於てか、五山の文學は、世の爭亂に關せず、駸々として日に進み、直に德川時代儒學の盛を皷煽したりき。

こゝに便に任せ、傍徑に入るを顧みず、室町時代の海外交通に就いて、一言せざるべからず。弘安胡元の役に後ること、凡そ六十年、足利尊氏の天龍寺を建つるや、寺主疎石(夢窓)元國に勸化せむと欲して、直義と議し、請うて允さる。實に南朝興國二年北朝曆應四年、支那に在りては、元の至正元年なり。その翌年、はじめて纜を解き、是より、每年例となり、世に天龍寺船と稱す。事は閩朝要記等に詳かなり。この時に方り、我が邊民の彼に寇するもの絕えず、謂ゆる倭寇、即ち八幡賊、一名を蝴蝶軍と呼ぶものゝ祖先なり。元、高麗を介し、之を禁遏せむことを我國に請ひしが、幾もなくして亡び、明の興るや、又之を詰る。而して、その使の來りしは、太宰府なりき。懷良親王、之を却けて、顧みず。彼土の史に依れば、親王の贈書中、相逢於賀蘭山前、聊以博戲といふ句あり、おもふ明主爲に氣を落せしこと、幾許ぞ。すでにして、胡惟庸の

變ありてより、その洪武十六年、全く我と絕ち、我が島帝國は、實に祖訓不征之國十五の中に在り。南朝の臣僚、實に此の如しと雖も、北朝は然らず。足利義滿、數ば使を遣し、その後明國を侵掠せし、我が邊民の健兒を捕へて彼に送遣し、その歡心を買ひ應永八年五月、僧祖阿及び筑紫の商人肥富を遣せし後は、頻に通交の擧あり。次いで允澎は、寶德四年、命を奉じて明に入る。その入唐記に云ふ、十月九日、中書舍人至るや、予一詩を呈す。舍人曰く、外域予が大明に朝貢するもの、凡そ五百餘國、唯だ日本人、ひとり書を讀む、と。その他國に比して、重きを爲せしや、知るべく、しかも、禪機活潑の僧侶、數ば强硬主義を執りて、彼を驚かせしことあり。然れども、室町將軍、彼より日本國王に封ぜられ、恭獻と謚され、以て榮となす。或は扈從の餘、甚しく國威を汚瀆せしものなきを保せず。但だ夫れ足利氏の明國交通は、之を一概して、その結果は、斷じて利益なりき。ひとり、財政の急を救濟せしのみならず、醫の徃々彼に學ぶあり、その他、曆算、繪畫、彫刻等の技術を輸入せしのみならず、こゝに予が研究に最も緊切なるは、直に宋學を傳へしこと、即ち是れなり。

彼等が此の如く氣骨あるは、之を內にし、之を外にし、如上の政治的關係、すでに

五山文學の歸着點

然りと雖も、更に大なるものは、禪家の風、直截にして、活機を尙ぶに本づくや、必せり。而して、五山文學の特色は、支那の文化を移植せしに在り、その吸收せしものは宋元の詩文、その咀嚼せしものは程朱性理の學、その脫胎して國民文學に貢獻せしものは諸曲、狂言、草子等、是れなり。

儒學

諸曲等、謂ゆる室町文學を精細に評價するは、世自ら其人あるべし。若し夫れ、五山の詩文に就いては、他日、日本詩文史の筆を執るとき、詳述するところあるべく、こゝには、性理學の輸入及び流布に就いて、概說するところあるを得む。

その開展

宋儒の學術、之を一概して佛敎と近接の關係を有せしは、固より爭ふべからざる事實なり。朱晦菴、その初、最も佛に耽り、禪を以て、儒敎の本體を解く。その形而上學は、純然たる佛理なり。這般學說の禪林に入り易きもの、固より其所なり。之に加ふるに、當時朝廷の學者は、かつて前に述べたる如く、活氣なく、精力なく、到底之を咀嚼するに堪へず、程朱學の輸入、久しからずとせず、而して京洛の五山、はじめて樹立するに及び、その學、大に行はる、豈に其故なしとせむや。その俊芿はじめて、之を傳へしといふ疑問の如き、玄慧はじめて四書を講ぜしといふ如き、實は瑣々たる小事のみ。寧一山の元より來朝せしは、最も注意すべき一大現象にして、又實に關東京都、兩五山の聯絡を確立せしめしものなり。程朱の學は、一山の爲に、俄然流布するの氣運に際會し、虎溪中巖夢窓雪村龍山の如き、皆その門下より出で、就中、虎關は、宋學の批判家として、嚴正なる態度を持し、之を五山叢林に移植するに就いて斷じて、大功ありき。義堂之を受けて、儒禪の關係を闡明し、學者に適從するところを敎へ、その後、惟肖岐陽一慶の輩あり、遂に儒佛不二の新義を立てたり。儒佛の調和は、德川時代の森儼塾、存道、智脫の輩に始まらずして、その源流、遠く五山の中に在り。かくの如く、儒佛は、相輔相助の勢をなし、程朱學をして、愈よ盛行の運に向はしめぬ。

その盛況

然れども、程朱學は、元と圓顱の徒を嫌ふものにして、竟に長く緇衣群中に潛在するものに非ず。然り、五山の末葉に至りては、僧衣儒行するもの漸く出て、桂菴實に其首たりき。かくの如く、儒佛漸く分離して、各自の體面を保つや、やがて、兩敎界の俊髦が角逐磨礪する絕代の鉅觀は現出すべかりしなり。而して、應仁の大亂に際し、九重の城闕、煙塵を捲き、五山の壁、亦た忽ち崩れ去るや、禪徒四散して、俄然一

頓挫を來しぬ。然り、これ一頓挫たるに相違なしと雖も、五山僧侶の功績は、決して、絶滅せざるなり。その四方に分散せしものは、各地の文教を鼓吹し、後年の素地を作り、愈よ程朱學を普及せしめ、五山の殘僧と雖も、なほ覇府初期の儒家を養ふに足るものありき。知らずや、藤原惺窩の如きも、その初、相國寺に學びしものにして兼ねて又桂菴の學統を傳へしものに外ならず、林羅山亦た建仁寺に字を習ひしものなるを。之を要するに、五山の學術は、鎌倉に搬り、室町に盛に、戰國の間、なほ命脈を存し、以て豐德二氏、興替の間に及べるなり。

近代學者の五山觀

ひとり怪む、近代の學者の五山を視るや、之を精該切實なる學術の上よりせずして、徒に寒瘦硬澁なる辭藻の上よりするを。五代叢林の文字、後世間ま之を稱するものあり。之を文にしては、林羅山が「足利氏の天下兵馬の權を領するに至りて、洛陽五山諸師の文字、禪を以て時に名あるもの、間出するや多し。こゝに於てか、天下の文章、皆禪に流る。南禪寺の信義堂、相國寺の律絶海は草創の禪滋か。少壯の嚴惟肖、建仁派の江西は討論の世叔か、嚴東沼澤天隱、三横川は修飾の子羽か。村菴雪嶺月舟、常翁は潤色の子產か。こゝに於てか、禪林の文章、集めて大成す」といふあり。

之を詩にしては、賴山陽が「國朝の詩運、兩たび開けて、兩たび壞る、猶ほ文章のごときなり。初には長慶體に壞れ、後には萬曆體に壞る。中間は爭亂絶えず、中晩宋元となるに暇あらざるなり。五山の僧侶、頗る瘦硬の絶句を爲る。その中の巨擘、義堂、絶海の如きあり、頗る雄奇、臺閣縉紳、及ばざるところあり、當時王覇盛衰、渠輩冷眼傍視、頗る之を吟咏に形はし、譏諷を含有す。又近世君子、徒に風月を鏤刻し、無益の詩を爲るの比に非ざるなり」といひ、龜田綾瀨が「藏經東流、高僧巨緇、代々作り並に出て、宗風を闡揚するの外、翰を摛し、辭を吐き、その音高古、固より末學の能く優劣するところに非ざるなり。弘安慶永の間、義堂、絶海、策彥、師錬の諸老宿、駢起し、その風調格律、皆晩唐を師とす、冲和の音、沈鬱の思に乏しと雖も、終に是れ宗工と稱するに足れり」といふあり。その之を稱揚尊崇するや、至らざるに非ずと雖も、その選擇を誤りしのみならず、唯だ詩文の末技に就いて論をなし、五山僧侶の大本領たる儒學に及ばず、嗚呼亦た何ぞ言を爲すに足らむや。

論究の理因

予輩が五山の學術を論ずる、必ずしも一片好奇の心より然るに非ず、その絶代の功績、長しへに、幽昧に埋沒せしを憾むの餘、聊か闡幽顯微の俠を負うて敢て之

五山の印書

を斷簡零冊の間に求めむと欲するのみ。庶くは、幾個の高緇輩、九原の下、幸に破顔微笑するものあるを得むか。

こゝに又忽諸に附すべからざるは、五山に於ける印書の新事業なり。今本邦印書の起原を尋ぬるに、稱德天皇の寶字八年、百萬塔に納められし陀羅尼を以て、其先となし、その後、佛書の摸刻、常に之ありと雖も、儒書は正平年間、堺浦道祐居士の鏤梓せし論語を以て、その嚆矢となし、これより、稍や後れて、五山に於て、その業、愈よ盛なり。貝原益軒の和事始に曰く、夢窓國師の弟子妙葩は、相國寺の祖なり。夢窓多く佛書詩集等を版に刻めり、多くは、妙葩の跋あり、又高師直が板行せし佛書あり。その後、兵火にかゝりて、彼板は盡く燒き亡ぶ。其故に不傳といへり。師直の板行せしは、師直の跋あり」と、柳庵隨筆には、詳に其目を擧げて曰く、弘安二年に秋田城介藤原泰盛が大日經を刻し、同六年に金澤越後守、傳心法要を刻し、正安四年、高野山の慶賢が御請來目錄を刻し、同年に沙門知眞が觀無量經を覆刻し、正和癸丑に沙彌宗哲、虛堂新添を刻し、嘉曆戊辰には、尼如淨、佛界老人心要を刻し、同己巳年に尼道澄が慧昭語錄を刻し、曆應二年に、高武藏守師直が、首楞嚴義疏注經を刻し、觀

應四年に、尊氏卿、大般若經を刻されたるを見るに、縱橫爭戰の際、何の暇ありて、かゝる盛舉におよばれけるにや、この外に、曆應の圓悟心要、貞和の雲臥紀談、貞和の雪峰外集、貞和の景德傳燈錄、正平甲辰堺浦道祐の圓珠經、文和の勅脩清規延文の楊仲弘集、景德傳燈錄、康安の宗門十規論、貞治の夢想國師錄、五燈の會元禪林類聚、應安の了庵語錄、應菴小參、寧禪師語錄、永和の歷代偏年互見、永德の宗派、至德の韓文、嘉慶の柳文、冥樞會要、佛光語錄、明德の氏族大全、應永の三國佛法傳通緣起、佛祖正法直傳、無門關、枯崖漫錄、大毘盧遮那成佛神變加持經、宗派顯戒論、徹翁語錄、大燈年譜、永享の慧照語錄、嘉吉の大毘盧遮那成佛神變加持經、文明辛丑の聚分韵略、同丙午の聚分韵略、延德の慧照語錄、明應の三體詩、論語、聚分韵略、大永の貞永式目、醫書大全、享祿の韵鏡、聚分韵略、天文の聚分韵略、難語、俗解、歷代序略、永祿の聚分韵略、韵鏡等は、今も稀に傳はりて、古人用心の切なるを、瞻仰するに足れり」と、五山印書の盛、かくの如し。怪しむ勿れ、その儒書に係るもの、極めて稀なるを。これ論者が親しく目睹せしものに就いて云ふのみ。その傳を失せしもの、又何ぞ限らむ、その中、亦た何ぞ儒書なしといふを得むや。要するに五山に於ては、儒佛の書を刻し、兼ね

て、先住高綱の遺集語錄に及びしなり。しかも是れ、單に豪舉に非ず、需要ありて然るのみ。嗚呼、誰か又、室町より戰國に至るの間を以て、日本史上の暗黑時代となすの愚を學ぶものぞ。

活版

五山時代の印書に就いて、なほ一言すべきは活版なり。活版經籍考に曰く、本朝に活版の行はれしこと殊に久しく、且つ盛なりき。その始めて作り出せし時代は、いつにや、未だ考へず、但し室町家の中葉の頃より盛に行はれたるなるべし。其一證をいはゞ、應永の初め、歸化の明人某たるものあり、京師にて、五百家註韓柳集を活字に印せし本あり、其ことは、跋に載せたれども、支干のみ記したれば、其年代、詳ならず。予が襟に見たる一本には、應永七年博多僧某なるもの〻校點して題字ありたるものあり。此七年より遡り考ふれば、其支干、正に應永三年にあたれり。これ中華にては、明朝洪武の季年なり。されば吾邦活版の權輿は、元明の活版の遺法を得たる明初の人、本朝へ歸化して、此集を印行し云々と。德川家康が慶長活字印書の業、その濫觴、頗る古きに在るを知るべし。

印書の盛

當時印書の盛は、彫板の工、儼たる一個の職業たりし事實に因つて、直に推測すべし。東北院職人歌合、七十一番歌合に經師あり「我おもしろ」に寄板木彫繼の一首あり、以て其證となすべし。

五山學及

五山の學術文章は、印書の發達と相待ちて、海內に波及し、數百年、爭亂の世、幸に天下の蒼生をして、眼に一丁字なき頑民とならしめざりしのみならず、後年の新氣運を促生せしめたりき。

五山內部の盛運

世人或は好古日錄引くところの老人夜話に「老人少年ノ時、洛中ニ四書ノ素讀教フル人無之、公家ノ中、山科殿知レリ」といひ、臥雲日件錄に「寶德元年閏十月三日、長照院竺華來り過ぐ。竺華曰く、吾が翁大椿は、筑紫の人なり。少年東遊して、常州の師に就き、四書五經を學ぶ。はじめ、孟子の講を聞くや、時に食足らず、人に就いて、豆一升を求め、之を座隅に掛け、日に一握を蒸り、以て飢を療すのみ。かくの如きもの、凡そ五旬、後、將に易語を聞かむと欲し、而かも、資用に乏しく、之が爲に、西、紫陽に歸り、財を親族を求め、錢十五貫を得、因つて持して又東遊し、遂に易學を得たり、云々。曰く、今時かくの如く困學するもの復た多く之を見ず」といふを觀て、室町時代學問の衰、勉勵の苦を臆想するものあり。然り、この時代の末世、尋常俗家に在りては、

此の如きものありしならむ。然れども、義滿・義持・義教、數世の間、五山の僧侶が、宋學を爲すに於ては、斷じて然らざるなり。當時僧俗の關係、その他の狀況に就いては、なほ隱伏せし史外の事實あらむ。之を以て一概に律するは、正に柱に膠して瑟を皷するの愚を爲すものと擇ぶなきや、必せり。予は、唯だ當時五山學術日新の趨勢と、諸種の機關及び裝置の意料外に完全なりしことゝを一言すれば足れり。

思想傾向の趨勢

第二章　朱子學の傳來

漢唐訓詁の學は、要するに、文獻學的研究を主とするものにして、その本質上、停滯固定、毫も思辨の發達を促進せざるなり。六朝の間、江の南北、學風を異にすと雖も、その差違は、瑣末に過ぎず。唐の太宗、儒臣に敕して、十三經注疏を撰して、經義を一定するや、やがて訓詁の終局にして、之に繼ぐものは、截然面目を異にしたる宋儒性理の學なりき。蹈つて今之を本朝に見るに、奈良朝より王朝を經て、鎌倉時代に至るまで、海內師奉するところ、亦た實に漢唐の學、その後、程朱の新籍を輸入せしもの、豈に偶然ならむや。清原頼業、すでに暗流の源頭に立ち、將來の趨勢を豫示せしものに外ならず。江村北海、かつて、本邦の詩を論じ、彼土に比して、大抵二百年を後れ、常に並行して遞降するを公言せしが、予の私見を以てすれば、ひとり詩にのみならず、一般學術に於て、亦た然るものあり、他なし、人文史上の諸現象は、すべて時代の思潮を代表し、決して個々單獨に起伏するものに非ず、その間、自ら聯絡を存して必然的に開展すればなり。

朱學の傳來

わが邦、漢唐の學を奉ずること、六七百年、その間、學者傳ふべきもの、寥々晨星も啻ならざるは、なほ彼土の漢代以後、搬思特見を出せしもの、絕えて無かりしと一般、復た怪しむに足らざるなり。而して、朱學の傳來は、實に彌府三百年、文化の原動力に外ならず、これに就いて、多少の探究を着くるは、必ずしも無用の閒事に非ざるべし。

第一說

朱學の傳來、古しへより、頗る異論あり、予の知るところを以てすれば、凡そ六、今漸次古に溯り、左にその大略を擧げむ。

（第一）後小松天皇應永十年（西曆一四〇三）に傳來したりといふ說――中村惕齋、この言を爲せしといふ。醍頭大學に曰く、後小松天皇應永十年癸未、南都歸船、載四

書集註・詩經集傳來、同年八月二日達之洛陽、於是東福不二岐陽和尚、始講之、と。又文照軒柴橋著すところの新書籍目錄に曰く、朱子の新註、本朝へ渡ることは、後花園御宇、普廣院御治世、東福寺岐陽和尚、始以朱子注講談したまへり、と。この二說、傳來の歲月を異にし、その間、二十餘年の遲速ありと雖も、岐陽を以て、その始講者とな すの一點に於て、正に符合す。要するに、南浦文集等に見えし二三の事實に本づき、その他を考覈するに及ばず、大早計の言を爲せしものに外ならず。然り、岐陽の朱學に於けるや、その功、固より大なるを疑はずと雖も、その說、甚だ遲きに過ぐ。何となれば、應永十年を去ること、二十五年前、康曆年間、すでに、京師に新註を講ぜしものありしは、五山の學僧義堂が空華日工集に明記するところ、この一事を以てするも、眞の權輿となすに足らざること、言を俟たればなり。茅窓漫錄、この外に中原康富記・建內記・臥雲日件錄を雜引すと雖も、皆その後の事に係るもの、朱學傳來の起源を論ずるに際しては、徒に勞せりといふべきのみ。

（第二）後醍醐天皇の元弘（西曆一三三〇頃）以前に、垂水廣信、之を傳へたりといふ說――藤井懶齋の國朝諫諍錄、はじめて之を記し、永井貞宗の本朝通紀・寺島良安の和漢三才圖繪・井澤長秀の俗說辨、皆之を承く。然れども、是れ著者佐々木玄信が一時の妄言に本づき、二山伯養、之を懶齋に傳へ、因つて書に記し、遂に後世を誤りしものにして、日高夏繁の兵家茶話、はじめて之を論じてより、茅窓漫錄・文敎溫故・先哲叢談等、並に之を攻め、殆んど完膚なきに至り、今や舉世之を信ずるものなし。はじめ、玄信善く諸家の系譜を記するを以て稱せらる。而かも、その得て詳にすべからざるものに至りては、牽合附會、以て世を欺く。一日伯養を過ぎ、談、偶ま譜に及ぶ、伯養問うて曰く、荊妻は垂水氏なり、傳へて言ふ、むかし、垂水某といふもの、伊勢國司に仕ふ、とず。すでに其名を失ひ、且つ未だ何の世の人なるを知らざれば、その跡、絕えて考ふべからず、豈に遺憾ならずや、と。玄信曰く、これ垂水廣信なり、廣信、河內守と稱す、伊勢垂水の人、はじめ、國司に仕へ、後に後醍醐天皇に事へ、諫疏聽かれずして去る。廣信學を好み、はじめて伊洛の說を奉じ、著はすところ、嘉文亂記六十五卷あり、かつて京に在るや、藤原藤房と學を論ず。一日藤房に謂つて曰く、宋の大儒朱晦菴の書、これより前六年、はじめて本朝に入る。世儒未だ知るあらず、我幸に深く之を尊信す、請ふ今之を借さむ、宜しく此書に覃思すべし、と。藤房諾す、然れども、

藤房の學、雅に儒佛を混ず、故を以て、卒に廣信と合はず。廣信、延文元年三月下世、年九十六、事は長濟草に載す。今子の爲に誦讀せむ、と。乃ち誦するもの、歷々として聽くべし。伯養驚き且つ喜んで曰く、吾子の記憶、まことに天性に出づ。此に由るに非ざれば、余何を以て、之を知るを得む。請ふ、再び誦せよ、余將に之を錄せむとす、と。玄信又誦す。伯養隨つて之を筆し、以て明證を得たりとなす。この時に方つて、京師の藤井懶齋、國朝諫諍錄を撰す。伯養、懶齋もと久要たるを以ての故に、之を懶齋に致し、以て諫諍錄に載せしむ。これ此事の顚末なり。然れども、謂ゆる垂水廣信なるもの、古今その人なく、嘉文亂記及び長濟草、亦た未だ其書あるを聞かず。玄信が咱嗟の間に出せし妄語、一たび、世に行はれ、海內遂に犬吠の說をなす。甚しいかな、人の怪を好むや、その端を求めず、その末を訊はず、惟だ怪を之れ聞かむと欲すといへる韓愈の言、亦た中れりといふべし。

第三說

（第三）後醍醐天皇建武（西曆一三三四―一三三五）前後に、僧玄惠之を傳へしといふ說――一條禪閤兼良の撰に係る尺素往來に、「前後漢唐朝所釋古來雖用之、近代獨淸健玄惠法印、宋朝濂洛之義爲正、開講席於朝庭以來、程朱二公之新釋、可爲肝心

225567

第四說

第五說

候也」といひ、貝原益軒の和事始、又之を承けて「古は、魯論五經の類、皆漢唐の注疏を用ふ、吉野先主の時、獨淸軒健叟（即ち玄惠）始めて程朱の義を唱ふ、これ程朱の學日本に傳はる始なり」といひ、山崎闇齋が眞邊仲菴に答ふる書にも、「朱書之來于本朝、凡數百年焉、獨淸軒玄惠法印、始以之爲正、而未免佛、藤太閤亦以爲程朱新釋可肝心、而猶惑乎佛」といひ、諸說皆同じく玄惠を以て、はじめて朱學に歸向せしものとなす。然れども、朱書傳來の權輿としては、未だ切實ならず。

（第四）後醍醐天皇元應元年（西曆一三一九）に傳來したりといふ說――南山編年錄に云ふ、元應元年十月四日四書集註舶來、と。柴野栗山は、この年、東福の虎關（師錬）朱子語類を讀みしといふを以て、その嚆矢となせり。

（第五）後深草天皇の正嘉年間（西曆一二五七―一二五八）に傳來せしといふ說――茅窓漫錄に引ける日野弘資の手錄に曰く、四書は、正嘉の頃、始めて渡りたれども、その後、打ち續きても渡らず、公私倶に之を用ひしむるは、文祿以來なり、と。而して、茅原虛齋、之を疑うて曰く、この正嘉といふは、後深草帝の正嘉なるや、後醍醐帝の御時まで六七十年の間、埋れ居たるや、儒家用ひざるや、覺束なし。大抵宋學の書

第六說

珍重するは、應永以來の事なれば、この正嘉は、室町將軍の頃、正長嘉吉の間をいふにや、と。然り、この言、一見せしのみにては、甚だ曖昧なりと雖も、北條氏の世、本邦緇徒の海外に出づるもの、道元・聖一・大明・大應・月林等あり、彼より歸投するもの道隆・普寧・正念等あり。宋亡びて元興るや、祖元・一山、亦た東に來る。この間に於て、朱學の諸書を傳へしとなす、決して、言を河漢にするものに非ず。新井白石の退私錄に曰く、朱子の小學を輯められしより、年數七十年程のことならむ、相州金澤にて、越後守顯時、八十以後の奧書かきし本の文庫より出でし小學を見侍りぬ。但し嘉言の註は、逸しけるなり。この頃、聞きしに、又世にその時嘉言の註ある金澤文庫の小學を藏せし人あるなり、それを合はせて、印刷して世に行ひたし」と。知るを要す、金澤文庫の創立者たる北條顯時、すでに朱子の小學を讀みしことあるをもすでに、小學を傳ふといへば、四書集註の類、豈に獨り傳らざらむや。又たとひ傳らずと雖も、之を朱學輸入の權輿となす、毫も不可なきに似たり。

（第六）順德天皇建曆元年（西曆一二一一）に僧俊芿、之を傳へたりといふ說――伊地知季安の漢學紀源、之を論ずる、詳かなり。この書、未刊の稿本にして、世に傳ふるもの無ければ、人の之を知る、亦た多からず。今下に其文を全載せむ。曰く、孔子すでに歿して、三千の徒、曾氏ひとり其宗を得、以て子思に傳へ、子思これを中庸に筆し、精微益す明かに、之を孟軻に傳へ、軻愈よ擴充して、七篇に述ぶ、軻の死するや、その傳泯び、道經空しく存する千五百年、宋に至るに及びて、天、斯文を開き、濂洛關閩、鉅儒輩出、周子の學を爲すや、師傳に由らずして、道體を默契し、圖を建て、書を著し、幽賾を發明し、以て孟氏に接するあり。二程繼承、學庸を表章し、經傳粲然、蘊微復た彰かなり、以て朱子に至る。朱子の學、居敬七分、窮理三分、博く經史を探り、華を斂めて、實に就き、尙ほ厥の淵源を粹にし、闡して之を大にし、道統復た續く、乃ち程子章句を定めしところの學庸に因つて、詳かに之が序を作り、以て世に行ふ。實に宋の孝宗淳熙十六年、我が朝に於て、後鳥羽帝文治五年、僧榮西、宋に遊ぶの年なり。又かつて論孟に集註し、敎へて次いで讀ましめ、併せて四書と稱す。その門人劉爚、國子司業に居るに及び、遂に寧宗に奏して、嘉定四年、之を大學に刊す。これより、四書大に世に行はれ、後學の宗尊するところとなる。今按ずるに、當時本邦の僧俊芿と名づくる者あり、字を我禪といふ、俗姓藤氏、肥後飽田郡の人、建久十年、海に浮んで、宋に

遊び、明年四明に至る、實に寧宗の慶元六年、朱子卒するの歳なり。居ること十一年、法を北峰に嗣ぎ、士庶崇敬、その像を畫き、瑞律師に乞うて、之が贊辭を爲り、以て祖堂に納るゝに至る。而して、その歸るや、多く儒書を購うて我が朝に回る。即ち順德帝建曆元年にして、寧宗の嘉定四年、劉爚四書を刊行せし歳なり。これに據つて、之を觀れば、四書の類、本邦に入る、蓋し俊芿齎らし回るところの儒書より始まるべきなり。書して、博雅を俟つのみ、と。これ實に前人未發の新說なり。今按ずるに、俊芿の傳は、元亨釋書・東國高僧傳に見え、その購ひし儒書は、二百五十六卷にして、律宗經書三百二十七卷・天台章疏七百十六卷・華嚴章疏百七十五卷・雜書四百六十三卷・通計二千百三卷といふ。俊芿すでに彼土の名臣輩と相識る、この際、新刊の朱註を購ひ得たりといふは、たとひ確證なしといふも、斷じて有り得べきことなり。又たとひ、全く然らずとするも、他の朱子の書、及び宋代理學者の撰述に係るもの、少くとも一二、之を我が邦に傳へざるの理あらむや、又何ぞ周程朱陸の名を知り、歸後時に之を口にせざる事あらむや。之を孰れにするも、朱子の書は、その歿後、未だ幾ならずして之を我が邦に舶載せるなり。

伏流千里

かくの如く漸次古に溯りて叙列せしところ、朱學の傳來を考覈して、餘蘊なきを確信す。然り而して、その學の普及、太だ遲々たりしは、何の故ぞ。朝廷の儒臣、依然として、訓詁を事とし、固より、新に即くに喜ばず、加ふるに、關左の風氣、なほ野にして、將門の人、聖經賢傳を講明するの素質なきに因る。彼等の喜ぶところは、禪に在り、不立文字の玄妙、直截簡切なる、たとひ之を能くせざるも、常に棄てざるなり。宋學は、禪に次いで來る。故に佛說の知識、未だ進まざる間は、殆んど、行はれざりしなり。これを一言すれば、伏流千里、しばらく地中に入るの時のみ。

元僧の來航

北條氏の末に至りて、元僧祖元・一山・子曇等、相次いで來る。この時、禪の行はるゝすでに久しく、鎌倉五山の僧侶は、儒學をも解し得べき知識の程度に達したり。こゝに於てか、彼等は幷せて之を傳へたるが如し。

祖元

祖元、字は子元、姓は許氏、宋の會稽鄞の人、七歳小學に入り、沈黙寡言、年十三、祝髮して僧となり、道德益す隆、四方傾企、慕向するもの日に益す衆し。宋の亡ぶや、天章に居る。我が朝の弘安二年北條時宗、使を遣して、高僧を招かしむ。明州の太守、祖元を遣して之に充て、その四年、來つて時宗を見、乃ち圓覺寺を拓いて居る。その逝く

一山

とき、年六十一。元の編修官揭傒斯は、當代の名家なり、爲に碑銘を作る、その文に曰く、余聞西域諸國、去中土至遐遠、然車馬可什日而至、而其人不知有孔氏者、東南諸國、邈在海中、而皆言孔氏、蓋去中土近、人居巢離文明之方、然尊信佛法、與西域同、以海路不能限之耳、佛光起乎會稽、赴平氏招、日本地近、又適其時、嗚呼佛光亦忠孝哉、と。佛光は、祖元の號なり。次いで、其銘に曰く、邈矣前聖、萬化之宗、孔釋雖異、忠孝則同、孰知我元、參天配地、孔釋並降、無遠不至、と。これに據れば、祖元は曾に佛敎のみならず、兼ねて聖道に精しく、その宋學即ち程朱の學を本邦に唱へしこと、亦た概證するに足らむか。

一山、字は一寧、姓は胡氏、宋の台州の人、幼にして郡の鴻福寺に入り、龎無等の席下に投じ、久しからずして、律を應眞に聽き、台を延慶に學び、ずでにして、義學の勤を嫌ひ、天童山に上り、疑を堂頭敬簡翁に質し、又珍藏叟に依り、その他諸師に歷事し、道を究む。元の宋を亡ぼすや、法を祖印寺に闡き、居ること十年にして、補陀山に移る。元の世祖忽世烈、かつて我が邦を犯して敗れしも、野心なほ止まず、邦人浮屠を貴ぶを聞き、一山に諭して、間牒の爲に來らしむ。一山已むを得ず、船に乘じて、太宰府に至る、時に正安元年なり。執權北條貞時、之を聞いて激怒し、伊豆に流す。或はその道譽を稱する者あり、貞時又素より祖師の道法を重んず。この冬、延いて、建長寺の席を主らしめ、尋いで、圓覺淨智の二寺に移る。後宇多上皇、その德望を聞き、屢ば召し見むと欲す。こゝに於て、北條氏、一山をして、都に上らしむ。上皇親しく見て、道を問ひ、眷遇頗る隆渥。文保元年十月、疾に寢ぬるや、上皇時々問候す、幾もなくして、終に逝く、年七十一。上皇寢室に幸して、嗟嘆し、宸筆を染めて、國師號を贈らる。

宋學盛行の氣運

一山の行跡は、門下の俊髦師錬の撰に係る元亨釋書に見え、師錬が這般の修史は、實に一山の激勵に因る。而して、一峰が言へるが如く、師錬性理に妙達せしは、その遺集中、朱子語錄に就いて批判を試み、且つ常に周濂溪を稱せしを見て知るべく、その之を一山より傳へしや、言を待たず。然り、氣運は、ずでに熟し、彼は、最も早く性理の學を解し得たるなり。元應二年、伊勢度會の人家行の類聚神祇本源を著はすや、亦た濂溪通書中の語を采る、之に次いで、玄慧の如きも、必ずや、一山の風を聞いて起ちしものにして、疑もなく、世は、こゝに、朱學を講明するの一大進境に到達したるなり。おもひ見る、京都鎌倉の兩五山、鐘魚晝寂にして、龍裡の梵唄、正に罷む

北畠親房と楠木正成

の時、滿地の松光、水の如く、白足の高僧、往々にして、詩書を誦し、程朱の性理を講ずるものあり、その學、因つて漸を以て進歩せしことを。

ひとり修禪を事とせし僧侶のみならむや、縉紳將士、亦た斯學を奉ぜしもの、時に其人あるに似たり。伊地知季安曰く、清軒健叟の出づるや、始めて濂洛の風を崇び、程朱の說を信じて、朝廷に開講す。ひとり、北畠親房、その蘊奧を得たりといふ。親房特に朱子の學風を欽し、四書五經、宋朝通鑑等を讀み、當時博識、肩を比するものなく、楠正成等と吉野南帝に事へ、柱石の臣となる。著述尤も多し。而して、その元元集天地開闢篇は、太極圖說を引いて、神道の秘蘊を述ぶといふ。楠正成の如きは、親房等と慷慨義を奮ひ、身を殺して王に勤め、その將に死せむとするや、子に訣書を貽して曰く、死期迫まれり、汝の成を視むと欲す、義の重んずるところを抱く、更に亦た遁れ難し、汝を戒む、學を勵み、以て吾が志を察せよ、と。今恐竊かに謂へらく、その義の重んずるところを知るは、宋學に非ざれば、恐らくは、未だ言ふを得ず、是を以て、之を觀るに、世、楠氏學べりといふを聞かざれども、吾は必ず之を學びたりといはむ。盛なるかな朱子、海外益す信じ、以て之あるに至る。實は人性の固有するところにより、その理義を自然に說くに感ずるが故なり、と。

武門の儒學

予は楠公が果して朱學を講ぜしや否やを知らずと雖も、博學の稱ある彼の今川了俊輩の如き、亦た然るを臆想せずむばあらず。その後、未だ幾ならず、五山唯一の學僧たる義堂が、新註を足利義滿氏滿等に進講せしを見れば、武門亦た空疎冷寂これ事とする禪家の學を棄て、切實緊要なる性理の新說を以て、その修養の資に供せむとする趨勢は、愈よ明晰といはざるべからず。

文學史上に於ける一山の功績

一山の名は燕澤蒙古の碑碣を以て稱せらるゝのみならず、實に本邦の學藝に、至大の貢獻をなせしものなり。彼が道風宏才は、本國たる元に於ても、決して輕視せられず、特に世祖の選に中りしもの、加ふるに、その學の該博深邃なる、釋典諸部儒道百家より、稗官小說鄉談俚語に至るまで、綜錯汎濫せざるなく、濟々たる群衲の讃仰して措かざるところなり。かの一休、正徹等、謠曲の作家は、實に一山が傳へし稗官小說、殊に元初の雜劇傳奇より脫胎して、別に一種の異彩を室町の文界に放ちしものに外ならず。

結論

予が叙述の筆は、覺えず、岐路に彷徨しぬ。試に概括して、一言せむか。朱學の書は、

晦菴歿後、幾もなくして傳來せしが、當時之を究明するものなほ少く、一山以後、はじめて、盛にして將相の門、時に之を奉ずるものあり、一たび五山に入れば、その傳承の跡、更に歴然として尋踪すべし、と。

（一）山　内

第三章　虎　關

五山學術の發展を論究するものは、かの有名なる元亨釋書の著者虎關禪師その人を、第二指以下に屈するを爲さゞるべし。まことに彼は極めて多面的なる偉才なり、然れども、予は今儒家として半面を叙述するに止めむ。

その略傳

虎關、名は師錬、姓は藤原、平安の人。父名は某、官、左金吾校尉にいたる。母は源氏。ともに賢德あり、五子を生み、師錬は實にその季子なり。弘安元年四月、既望を以て生る。伏犀額に挺み、駢齒疎眉、穎悟群に出で、幼にして讀書を好み、日に千言を記す。然れども、性多病、多く藥餌に親むを以て、母氏その勞を慮り、卷を奪つて深く藏せば、必ず搜索して之を讀み、手之を措かず。母氏その止むる能はざるを知り、遂に其爲すところに任せりといふ。精敏儁偉、想ひ見るべく、他日嶄然頭角を見はしゝもの、固より其素なくむばあらずはじめて八歲寶覺和尙に三聖寺に依る。覺一見し、大に喜んで曰く、これ誠に千里の駒なり、と。愛護備さに至る。十歲にして祝髮し、叡山に受戒す。この年、日に論語二篇を課し、隨て讀めば、隨て誦し、旬日にして之を畢る。十二歲、寶覺より起信論を授けられ、明日之を背誦し、琅琅卷を終へ、一字の差謬なかりきといふ。その强記、蓋し天性に出づ。覺、一日堂に上る。師錬、衆師兄の後より出て、卒然問うて曰く、如何是正法眼藏。覺曰く、破沙盆。錬曰く、休將常住物作自己受用。覺曰く、打草唯要蛇驚。錬曰く、忽化龍去時作麼生。覺曰く、拏雲攫　と。錬、時に歲僅に十四。京畿隨處の諸法窟、萬口一辭、之を傳へて奇譚となす。覺曰く、吾が道を興すものは師錬なり、憾むらくは、吾老いて之を見るに及ばず、と。これより、錬を導くに寬を以てし、少しも策勵を加へず、謂へらく、北溟の物、自ら化して鵬となるを聽るさむのみ、と。

すでにして、寶覺の遷化するや、南禪寺に赴き、規菴に依り、次いで桃溪に就いて參禪す。その規菴に依りしとき、歲市めて十五、後龜山天皇、下宮に在り、その鋭氣稠

人に出て、洒脫靈精、頗る玄妙を得たるを愛せられきといふ。十七歲、終に歸り、名緇碩儒に參謁し、その條貫を竭さゞるなし。かつて儒官菅原有輔に從つて、文選を學ぶ。在輔の家、曩祖道眞自ら點を加へたる文選一本を秘藏し、天子侍講の外、決して、人に示さず。然れども、錬の才器を愛するの餘、定規を愼むを得ずとなし、特に之を講ずるを許したりといふ。二十歲、建仁の無隱に依る。時に師錬、源有房と交遊の誼あり、一日有房人を屏け、語つて曰く、易は吾が道の蘊なり、大臣吉備公より三十餘傳して吾に至る、授與その人を得ずむば止まむのみ、今吾が家の童穉を觀るに、遂に之を委托するに足らず、乞ふ煩すに之を以てせむと。乃ち上下經及び卜筮の秘說を傳ふ。かくの如くして、師錬歲二十餘歲に及ぶとき、佛典語錄より以下、九流の書を究め、內外の學、その蘊奧を窺ひ、苟くも當時に行はれし學術は、兼修せざるものなく、人間の載籍、一も涉獵記誦せざるものあらず。而して、その特に敬慕せしは、宋初三敎一貫論の著者仲靈禪師に在りきといふ。亦た以て其志の嚮往するところを察すべきなり。

正安元年、師錬二十二歲、偶ま元僧寧一山來朝して京師に館す。錬、往いて之を見、忽ち感發するところあり、謂へらく、近時此方の庸流、奔波して元土に入る、然れども徒に我國の耻を遺すのみ、吾むしろ自ら往き、彼をして國に人あるを知らしめむ、とずてに行を治め、星槎徑ちに溟渤を凌がむとす。時に、母氏年すでに老ひ、且つ多病なるを以て、强ひて留めて往かしめず。その遺憾、想ふべきなり。然れども、當時航して彼土に到れるもの、外に馳せて內を忘れ、往々にして本朝歷代の典故に疎遠なるの情勢あり、錬の如きは法器異常、固より此の如くならざるべしと雖も、長しへに故國を離れず、一生の心血を傾注して、他日修史の業に從ひしは、その得失、亦た驟かに判ずべからざるに似たり。

德治元年、二十九歲にして、聚文韵略を編し、三十歲、相州に赴き、寧一山に謁して、其書を獻ず。一山甚だ之を稱揚し、又一偈を贈りて曰く、

高人問疾過巖扃、一默相看意已傾、不是忘懷於道術、荒凉野徑有誰行。

これより、數ば一山を訪ひ、廣く諸種の學術を審詢し、頗る得るところあり。その修史の業の如き、亦た職として、一山の激勵に由る。三十三歲の時、無爲和尙、北條氏の依囑に因り、師錬を擧げて掌記となし、俗事に執掌せしめむと欲す。錬固辭して舍

に退くや、群衲麕至して之を賀す。乃ち左右を顧みて笑つて曰く、吾、少年の命を聞く、諸公何の爲に來れるか、と。その自重の意氣を見るべし。

師錬、東西に遍歷すること、殆んど二十年、名聲世に聞こゆ。すでにして、後伏見帝の命により、古光院に棲遲す、三十七歲の時、梅破道人といふもの、京師白川の北涯に一庵を搨め、錬を招いて此に居らしむ。乃ち其請を容れ、扁して、濟北といひ、室を掩ひ事を謝し、專ら著述を以て務となす。三十九歲、新に勢州の景陽山を開く。四十五歲、元亨釋書、稿成りて、後醍醐天皇に上る。四十七歲、三聖に入る。六十二歲、南禪に住し、後に東福の海藏院に移り、閑居優遊、自ら風月主道人と號す。時に足利氏の宰臣高師直、亡父の爲に拈香を乞ふ、錬、禪規に依り、決して常用すべきに非ずとなし、却けて可かず。すでにして、尊氏之を招いて、鎌倉の建長寺に主たらしめむとす、復た聽かず。南帝後村上天皇、その道風を慕ひ、特に勅して、國師號を賜ふ。幾もなくして、貞和三年入寂す、年六十九。

その精勵

師錬、性溫順にして、動作度あり、人に對して、寡言、たゞ往哲の言行に及べば、終日倦まず。その居室、窓紙破れて糊せず、草萊蔓して芟らず、道に循つて世と俯仰せず、禪家の末、往々流れて晉時清談の虛誕に入るを惡み、常に以て言となす、而して、流俗の徒、錬の高風一世を籠蓋するを妬み、徒に多く字を識るを以て、之を謗るに至る。然れども、是れ錬の人と爲りを知らざるの致すところにして、以て累を及ぼすに足らず。かつて從容その徒に謂つて曰く、吾、幼より儒典に旁涉し、顯密を宗貫す、これ大に其故あるなり。若等唯だ心祖を究むれば庶かし、然らざれば、吾が徒に非ざるなり。と。蓋しその夙に景慕するところは、前に述べしが如く仲靈潛子の學術氣象に在り、獨り參禪超語を以て足れりとなすものに非ず。故を以て、終年矻矻、鉛槧に從事して、毫も怠倦の色なし。その一たび稿を草して論をなすや、未だ敢て昏氣を以て之を出さず、必ず淸且に愬して、之を發し、冬日嚴寒に當ると雖も、夙に起きて、炭爐を避け、端然として危坐し、龜手筆を鉤し、卷を握る。その集中、愛日南窓明又暖、穩乘朝氣注楞伽の句あり、精勵刻苦、想見するに堪へたり。

その本領

おもふに、師錬は博聞洽識、才思群を拔ける學者たりしならむ。若し氣局狹小、徒に一機一境を認めて禪の極致となせる小家の眼を以て、之を評せむか、同一の畛域に局促せむには、餘りに偉大なりき。故に之を呼んで儒となせば儒なり、道となな

せば道なり、禪となせば復た禪なり、往くとして可ならざるはなし。然れども、之を心機活潑の禪僧と稱せむよりは、識智瑩朗の禪學者と呼ぶの勝れるに若かず。これ五山禪徒に多く見るところなりと雖も、師錬を以て其首と爲すべし。その儒教に對する態度は、固より摘句尋章の末に在らず、宋儒を排して醇ならざる者と爲し、直に孔孟の眞面目に接し、その深義を闡明せむとす。爲學の工夫、はるかに時俗の上に在り、識力の高きこと、知るべきなり。

その著述

むかし、空門の一慧禪、彼を神州第一の名山たる富士と並稱して、下の言を爲せり。曰く、吾國山川之譚詭、物產之魁殊、金銀銅鐵之外、珍奇衆夥、而非吾所欣羨也、夫山有富士、僧有錬公、是吾之所瞻仰也矣、と。對比その當を得ず、幾分溢美に似たるものありと雖も、佛者の評語としては、當に然るべきものならむ歟。

著述甚だ富。濟北集二十卷、聚文韵略二卷、佛語心論十八卷、十禪支錄三卷、禪餘或問二卷、禪儀外文二卷、正修論一卷、禪戒規一卷、元亨釋書三十卷、而して釋書最も世に行はる。然り、錬が一生の事業は、實に修史に在り、たしかに、新機軸を出したるを見るべく、就中、國史に關する知識の精該を極めたる、他に其匹なしといふも可なり。故を以て、時輩が往々にして外人化するに快からず、國體論を草して、一代人心の嚮ふところを定めむとし、又南北分立の際に當り、皇室を尊崇して、武門の跳梁を制せむとしたる如き、尋常禪僧の及ぶところに非ず。然りと雖も、這般の事業を成し得たる所以、その儒佛兼修の根柢に在りとすれば、こゝに單に彼が儒教の態度を考察するも、亦た可ならずとせむや。若し夫れ、彼が著作全體に關する評論に至りては、予別に稿あれども、こゝに全載するを得ず、今專ら濟北の一集に就いて、彼の學問の何者たるかを觀むとす。

その傾向

師錬の學、甚だ宏富、中巖が之に贈りし書牘中、伏惟座下徹達聖域、度越古人、强記精知、且富著述、凡吾西方經籍五千餘軸、莫不究達其奥、以至子思孟軻荀卿揚雄王通之篇、傍入老列莊騷班固范曄太史紀傳三國及南北八代之史、隋唐以降五代趙宋之紀傳、乃復曹謝李杜韓柳歐陽三蘇司馬光黄陳晁、江西之宗、伊洛之學といへるが如し。然れども、其時恰も、漢儒崇拜及び程朱擴布、兩時期の過渡に當るが故に、なほ居然として、漢唐の訓詁を棄てざりしと雖も、宋學を批判し、脆げながら、兩者の並存を承認したる跡あり、その態度は、むしろ公正といふべく、その結果は、宋學の盛行

揚雄の太玄

一山との關係

その辨駁

を促進せしものにして、まさしく、時勢に順適せしものなり。

その漢唐に於けるの篤さや、ひとり訓詁のみならず、諸家の說をも合せて採らむとし、揚雄の太玄は、その最も熟通せしところなりと稱す。後年五山の徒、甚だ揚子雲を尊尚するもの、實に此に本づく。

師錬が程朱性理の學を親ふを得たりしは、その師一山の賜なるや、言を待たず。と雖も、一山の學術及び師錬が之に對して如何なる間を試みしや、今考ふべからず。濟北集中、載するところの議論、皆晩年の作に係り、之を一概して、精緻なる獨立的思辨に出てしものなるを疑はず。

宋儒の性理學は、孔孟の教理に形而上學的基礎を定めしものにして、廣き意義に於ては、儒佛の融合なり。之を孔孟の舊に非ずといふは、固より可なり、然れども、その相異なる所以は、思辨の進歩に外ならず。唯だ宋儒が佛教に負ふところ多きに拘らず、之を排擊して、動もすれば、兒戲に類するは、狹隘なる國家的精神に本づくものにして、大に惜むべしとなす。これ師錬が宋儒の性理學を公認せしに拘らず、敢て之を排斥するに怯ならざる所以のみ。

朱子を駁す

その先づ朱晦菴を難ずるを觀む。曰く、我、朱氏の儒名を賣つて吾を議するを責む。大惠年譜の序に云ふ、朱氏の擧に赴いて、京に入るや、筐中只だ大惠語錄一部のみ、又他の書なし。故に知る、朱氏大惠の機辨を剽竊して、儒の體勢を助くるのみ。朱氏すでに妙喜を宗とし、却つて傳燈を毀つ、醇儒に非ず、と。これ朱子が爲學の態度、かの耳を塞いで鈴を盜むに似たるを譏るなり。又曰く、朱子の語錄中、百家を品藻するや、理に乖くもの多し。釋氏尤も甚し、と。予も亦た此言に贊す。朱子が佛教に關する歷史的知識の極めて貧なるは、到底爭ふべからざる事實なればなり。而して、朱子が「釋氏只だ四十二章經、是れ他の古書、その餘は、皆中國の文士潤色して、之を成す。維摩經、亦た南朝の作」といへるに對しては、師錬之を駁し、一擊直に朱子を粉齏せむとす。曰く、文士潤色すといふものは、事是にして理非なり。文士の潤色は漢文なり、竺理に非ざるなり。經を譯するものは、十師なり、十師中、譯語あり、度語あり、漢人の謬妄、納るべからず。これ朱氏佛教に委しからず、妄りに誣毀を加ふ、一笑に充たず、と。抑も佛典の始めて梵語より飜さるゝや、文字の選擇を誤り、多少意義の變ぜしものなきを保せず。この點に就いては、朱子と師錬と、ともに論及するとこ

ろあらず、まことに惜むべしとなす。次いで、又朱子が傳燈錄を陋としたるを難じ、「その謂ゆる陋なるものは、文詞に在りて理に在らず、朱氏辨ぜずして、漫に品藻を加ふるは百世の笑端に過ぎず」と公言せり。

程明道司馬光を駁す

師錬又程明道が「佛氏の敎、滯固なるものは枯槁に入り、疏通なるものは恣肆に歸す」といへるを駁し、「夫れ程氏は道學を主として、吾が敎を非とす、その言、攻むるに足らず」といひ、明道が公識を欠くを極論せり。而して、その宋儒を歷詆するは、ひとり、程朱二人に止まらず、司馬光が韓秉國に答ふる書に、「佛老の言の如きは、中を失して道に遠く、言ふべくして行ふべからず。たとひ、人あり、眞に能く獨居晏坐、物を屏け、事を棄て、以て虛無寂滅を求めしめ、心は死灰の如く、形は槁木の如くならしむるも、物あり、欻然として來るに及べば、之に感ずる、未だ出てゝ之に應ずるを免れず。その喜怒哀樂、未だ必ずしも皆能く節に中らざるなり」といへるを駁し、「溫公佛を學ばず、唯だ凡心を以て聖境を議す、笑ふべきなり」といひ、精細に之を分析し、「今光の謂ゆる晏坐心身云々。之に應ずるものは、欲定邊の事なり、その喜怒哀樂、未だ必ずしも節に中らざるものは、六識心邊の事なり、その言ふべくして行ふべからざるものは、散智邊の事なり」といひ、光と朱氏とを並論して曰く、光、未だ欲定を知らず、況んや色定をや、未だ六識を知らず、況んや七八をや、未だ散智を知らず、況んや定智をや、我常に佛法を學ばずして、謾に議をなすを惡む。光の朴眞すら、猶ほ此の如し、況んや、餘波浮矯の類をや、降つて晦菴に至つて、益す張、故に我朱氏を合せて之を排す」と。

その歸着點

かくの如くして師錬は、宋儒を排せしと雖も、決して、儒敎その者を斥くるに非ず、否、却つて大に儒敎に取るところあるなり。曰く、夫れ儒の五常と、我が敎の五戒と、名異にして、義齊しく、合はざるを得ず、附會と雖も、何ぞ儒を紊さむや。請ふ先づ嵩公の輔敎編を取つて見一遍せよ、と。こゝに於てか知る、師錬の說は、全く仲靈の三敎一貫論に本づくものなるを。然れども、師錬は、無意義に兩敎を混同せむとするものに非ず。その契合を認むるとともに、その差別をも最も明晰に觀破せり。曰く、夫れ道は理を以て主となし、跡を以て主となさず、佛敎を以て儒道を見るものは人天乘のみ、猶ほ二乘と兢はず、況んや、佛乘をや、とこれ儒敎を以て世間的となせしものにして、實に仲靈より出てゝ、更に一歩を進めしものなり。之を要するに、

師錬は儒を奉じ、一躍して孔孟たらむを期せしものにして、宋儒の性理學は、必ずしも、信ぜざるに非ざるも、程朱の議論、甚だ多端にして、且つ誤謬多きは、其口を緘する能はざりし所以のみ。若し之をして陸學の精粹を窺はしむれば、必ずや、節を擊つて讃賞し、優に心契をなせしならむ。而して、其言の陸氏に及ぶものなき所以のもの、或は全く其書を見ざりしに非ざるか。こゝに於てか、その尊信して措かざるところは、周濂溪に在り。曰く、仲尼滅して千有餘歲、之を繼接するもの、幾許ぞや。唯だ周濂溪、ひとり興機の美を擅にす、と。濂溪の學、その宇宙論は、太極說を精髓となし、その實踐の敎理は、中庸に本づく、師錬の私淑せし所以、知るべきのみ。

宋學に對する功績

之を要するに、師錬は、決して朱學の振興者に非ず、否、むしろ宋儒の批判家たりしと雖も、すでに、朱子の語錄を讀みしといふ以上、四書五經の新註は、言ふに及ばず、朱子の著作に就いて、最も廣く、最も精しく研究を着けし第一人たるべし。而して、その排擊の燒點、單に宋儒の佛敎的知識に在りとすれば、決して宋學の流布を妨害せしものに非ず、喑々の中、之を輔助せしことありしや必せり。一山等、諸高僧の海に渡つて來朝するや、之に歸向するもの、參禪超悟の外、宋學あり、以て我が邦に於ける程朱弘布の先驅をなせしこと、復た何の疑ふところぞ。

その略傳

第四章　中巖

中巖、字は圓月、相州鎌倉の人、姓は平、土屋氏の疏屬なり。幼にして睿發、八歲壽福に入りて、僧童となり十二歲、道慧に從ひ、孝經・論語を讀み、且つ算學者某に就いて、九章算法を學ぶ。後年、中正子を著して治曆篇を修せしもの、此に本づく。その初、密敎を學びしも、雲屋東明に謁してより心を禪に傾く。十九歲、航西の志を起し、博多に赴きしも果さず。歸つて、師錬に濟北菴に謁す。時に師錬、元亨釋書を撰し、門を掩うて、客に謝し、ひとり不聞と中巖と、參敲を許されしのみ。かつて五家符命を作り、その激賞するところとなる。正中元年、二十五歲、再び航西せむと欲せしも、兵亂の爲に、船、發せず。翌年に至り、漸く其志を達し、はじめに江南に至り、その冬、雪竇に謁し、次いで、天下の巨刹碩衲を尋ね嘉興・天寧・靈巖・保寧・洪洲・雲巖・臭門・淨慈・錢塘の間、その足跡を留めざるなく、所在遊學の徒、古林・龍山・東陵・雪村等諸輩と離合時に相見る。偶まその友不聞、元室の嫌疑に觸れ、奇禍に罹れるを救はむとして、武昌に至

り、因つて、遂に百丈に登りて、東陽に參し、密を受く。我が邦百丈の傳燈、實に中巖に始まり、後日他の排擠を免れざりし所以、又こゝに起因す。時に元の文宗、新に即位し、大化治綱を張り、天下師表閣を建つるや、中巖命を奉じて、上梁文を作る。すでにして、百丈を出で、廬阜・鄱湖・金華を經、周流しばらくも歇まず居ること八年、正慶二年を以て歸朝す。時に北條氏、すでに亡ぶと雖も、京畿の戰塵、なほ未だ收らず、乃ち博多の大友氏に依り、次いで南禪に還り、時勢を痛論して、原民・原僧の二篇を作り、上表して以聞す。東海一滴集中の「上建武天子表」は即ち此時に作りしものなり。

建武元年、相州の圓覺に歸り、中正子十篇を作り、曆應三年、瑣細集を作り、門を藤谷に杜ぢて、世と相聞かず。次いで、上州利根の吉祥寺を搬立し、百丈東陽の法嗣たること表示せしに因り、洞宗の徒の怒を招きしが、不聞・別源等の救解によりて、幸に事なきを得たり。その四年、日本書を修す。後醍醐天皇、敕して之を焚く。康永元年、復た賈舶に乘じて、彼土に赴き、百丈の東陽を訪はむと欲して、果さず。歸つて、藤谷利根の間に居る。貞和元年、師錬を海藏院に訪ひ、元亨釋書を縱覽す。これより、鎌倉・京都及び豐後の間に往來し、席暖かなるに暇あらず。延文三年、天龍に在り、浦室集の註を草す。五年、京の葛村に妙喜世界を造りて閑居す。貞治二年、足利氏、強ゐて起して、等持院に入らしめ、その顧問となす。義堂書を寄せて、之を戒む。乃ち直に辭して妙喜に歸り、使者頻に至れども、遂に起たず。三年近江に如き、龍興寺を創す。應安八年、寂す、年七十六。佛種慧濟禪師と贈稱せらる。

その著及び學

著すところ、東海一滴集五卷あり。その卷四は、中正子十篇にして、儼たる一別冊、群書類從、ひとり之を抽いて、收載せしもの、殊に可なり。その論ずるところは、孔孟仁義の道、性命死生の理にして、その性情篇の如き、全く朱子を踏襲す。本邦朱子の理學を崇信して、之を筆にせしもの、この書を以て、權輿となす。中巖、生前藤原忠範と善し。忠範の家、儲粟に乏しく、而かも、榮祿に意なく、專心學を勵み、且つ漢唐を尙びて、宋學を排す。中巖、詩を贈つて、學尙漢唐不言今、奮起欲救伊洛弊といへり。而して、其師は、師錬にして、又往々宋儒を詆斥せしものなり。師友すでに此の如しと雖も、中巖は純然たる宋學者にして、西遊の間、得るところ、頗る多きを疑はず。その「贈觀瀾張學士」の序に予既遊廬阜、將過番禺、買舟彭蠡、風雨不可往也、信宿落星寺、會此相談太極無極之義一貫不二之道といひ、又その詩に「窮盡幽明歸無極、一異儒佛空

諸群、楊墨申韓寧復數、莊老虛玄猶弗援、天賜先生不失時、今上政是清明君、竚首塲屋得意後、護法著論莫相援、といふが如きは、その志を觀るべし。

皇祖泰伯說

瑣細集五家符命蒲室集註釋の類、皆傳らず。而して、日本書の焚棄されしは、はじめて、わが皇室を以て、吳の泰伯の後となせしに因る。然れども、中巖の素志は、偶ま我が邦家を顯彰せむが爲にし、却つて覺えず之を誤りしに在るや、辯を俟たず。後世林羅山の如き、神武天皇論を著し、中巖の意を推して、之に贊同し、その子鵞峰の本朝通鑑を修撰するや、又之を取り、水戸義公の言に因つて、はじめて改めしといふ。要するに、中巖は、獨創の見を以て、一種の史的考證を試み、以て此に及びしものならむと雖も、その書、すでに亡ぶ、今詳に之を論ずる能はざるなり。

その本領、

中正子の著作、中巖の學を證して餘あり、然ども、その詩文に因つて、その人と爲りを冥想するに、決して冷靜枯寂なる禪僧に非ず、亦た窮理を是れ事とする底の道學者流に非ず、熱情活氣、內に盈ちて、狷介孤峻、世と相容れざる詩人なり。然り、詩人としての位地をいへば、殆んど、絕海に凌駕す。その大友氏に依りしを以て、自ら杜甫が嚴武に依りしに比し、因つて、常に少陵を規撫し、斷章零句を以て傳ふるを屑とせず、長篇大作、骨力頗る高きものあり、但だ予は彼が直接に海外より宋學を輸入し、之を五山の間に移植せし形跡あるを以て、こゝに略論を着けしのみ、純然たる學者を以て之を律することを爲さゞるなり。

第五章　玄慧

その略傳

玄慧は、籍を五山に列せしものに非ずと雖も、ひとしく僧徒なるを以て、こゝに。附說するを便とす。その世系を詳かにせず、北小路に居り、獨清軒と號し、又健叟と號し、權大僧都に任ず。粗ぼ書史に涉り、又詞藻あり、世の稱するところとなる。常に司馬光の資治通鑑を讀み、二程朱熹の學を尊信す。後醍醐帝、召して侍讀たらしむ。これより先、經籍漢唐諸儒の註疏を用ふ。こゝに至りて、玄慧はじめて程朱の說を唱へ、世人往々之を學ぶもの多し。後、帝、竊に北條氏を滅ぼさむことを謀る。權中納言藤原資朝、その事を贊成し、無禮講を設け、將士の心を結び人の怪むところとならむを恐れ、陽に玄慧を延いて書を講ぜしむ。玄慧法律に明かにして典故に習ひ、足利尊氏及び弟直義の、愛重するところとなる。尊氏の反してより、凡そ再び關を

犯し、而かも、車駕毎に避けて延曆寺に幸し、僧徒に賴つて守禦す。尊氏深く僧徒の爲すところを憤り、延元中、京に入るや、高師直・上杉重能と議し、寺を廢して、僧徒を逐ひ、以て後患を絶たむと欲せしも、歷朝天子尊崇するところなるを以て、憚つて決する能はず、玄慧適ま至る。召して之に問うて曰く、延曆寺、多く郡邑の租入を徵し、三千の僧徒を養ひ、費たること、すでに廣く、而かも、動もすれば、我が師に抗す。今將に之を除かむとす。吾子以て如何となす。玄慧曰く、鵂鳥懷に入るや、人尙ほ之を救ふ、況んや、萬乘の主、親ら至る、孰か敢て禦がむ。將軍能く宿怨を忘れ、撫するに恩德を以てすれば、彼反つて我が用をなさむ、と。尊氏遂に其議を能め、更に數邑を以て延曆寺に增封す。直義の職を遜つて、錦小路に屏居するや、恩舊將士と雖も、師直を憚つて敢て至るものなし。玄慧、師直に請ひ、數ば往いて侍し、至る毎に、古今を談じ、以て之を慰む。會ま疾む、直義藥を贈り、之に系するに歌を以てす。玄慧起つ能はず、詩を以て答ふ。未だ幾ならずして逝く、時に正平五年なり。直義、佛經をその詩牋の後に手書し、以て冥福を薦む。時人頗る其意を哀しむといふ。

はじめ、法勝寺の僧慧珍、元弘建武以來、爭戰の得失を記すること三十餘卷、名づけて太平記といひ、直義に獻ず。玄慧を召して之を讀ましむ、謂つて曰く、書中事を載する、公ならず、且つ舛誤甚だ多し、他人をして視せしむる勿れ、當に删定を俟つて世に行ふべきなり、と。果さず、或は云ふ、今存するところの太平記は、蓋し玄慧をして改撰せしめしところなり、と。時に是圓といふものあり、法律に練習し、兼ねて文辭を善くす。建武中、尊氏諸國を服從し、府を鎌倉に開くや、因つて、廣く政事を詢ふ。是圓、玄慧・眞慧等八人と之を議し、古今の條件、その尤も事務に切なるもの十七事を參酌して、之を進め、名づけて建武式目といふ。尋いで又、新加制式二十一條を作り、尊氏大に之を可とし、皆施行す。玄慧著はすところ、庭訓往來あり。

幕府に對する功績

その學問

玄慧が四書集註を進講せしは、程朱流布に對する早晨の雞聲に外ならず、その功、固より錄すべし。その儒學を修むるの必要を論ぜし言は、庭訓往來に見ゆ。曰く。

夫學問者、立身開運之本、出惑入悟之源也、故內外聖人、皆是回棹於學海、採芳於詞林也、孔門四貫首、什室四達者、是其人也、億千載之先、察乎一篇之上、百萬里之外、觀乎一句之中、不登其室而逢其聖人、不換此骨而成神仙者、其唯學問之力歟、探天地陰陽之始、統草木山川之廣、綻花卉於冬風、雨霜雪於夏日、夫唯學問之功

也、旌五色於虛無之上、鳴五聲於寂寥之中、化夷狄於中華、反澆季於上古、學問之德也、

その言頗る該切、ひとり惜むらくは、その造詣の深淺、今殆んど考ふべからざるを。然れども、師錬が、朱學の批判者たるに對して、玄慧が廓張者たりしこと、予決して之を疑はず。之に次いで、之を縉紳將相縉素士庶の間に普及するに與つて力ありしものを義堂となす。然れども、予は先づ其師たる夢窓に就いて、略論するところなかるべからず。

その略傳

第六章　夢　窓

一山の學、その一、之を虎關に傳へしものは、中巖以後、杳として聞くところなきも、他の一、之を夢窓に傳へしものは、義堂より岐陽に至り、後世長しへに其統を絶たず。夢窓、名は疎石、伊勢の人、建治元年を以て生る。幼にして強記、默識屢ば人を驚かす。はじめ、最も老莊に沈潛せしが、後專ら竺籍を嗜み、正安の初、一山を建長に拜して、禪機を悟得し、次いで錫を諸州に飛ばし、或は甲州に、或は濃州に、或は土州に、或は總州に、終身丘壑の志を抱いて、毫も世榮を希はず。その土州に入りしは、文保二年にして、五臺山に上り、吸江菴を縛して居る。實に鎌倉北條氏覺海夫人の招を辭して、遠く遯れしなり。すでにして、その巍然たる道標は、後醍醐天皇の崇敬するところとなり、召して、京都の南禪寺を領せしめらる。その後、帝、南狩して反らず。終に芳野に崩ずるや、足利尊氏に勸めて、天龍寺を建て、帝の冥福を祈り、滔天の罪業を消滅せしむ。七朝國師の稱、正覺心宗普濟の號、決して、空しからずといふべし。正平六年寂す、年七十六。その年譜は、族姪春屋、之を編し、碑銘は、明の宋濂、之を撰す。語錄五卷あり、明僧永璵の序、楚石の跋を付す、その文、最も觀るべし。

その辭藻

その人と爲り、洒脫恬淡、頗る雅懷あり。歌は其最も長ずるところ、當時文藝ありし大智の詩と並稱せらる。詠草中、誦すべきもの少からず、その甲州河浦に山ごもりせし時の作、

我菴を、とふとしもなき、春の來て、庭にあとある、雪のむら消え、

有馬の溫泉に浴せしとき、林下寺宇の廢損せるを見て、

寺古りて、雨のもりやと、なりにけり、佛のあだを、今やふせがむ、

その他、

夢のうちに、夢と思ふも、夢なれば、夢を迷と、いふも夢なり、

雲よりも、高きところに出でゝ見よ、しばしも月にへだてありやと、

聞くは耳、見るは眼と、おもふなよ、我にあたまの主はなかりき、

鳴くかもの、かつて氷の下までも、かにとかはらぬ、冬の夜の月、

その學問

天資すでに超倫、學問亦た淵深、故を以て、門下の神足、春屋・義堂・絶海・天錫・椿庭・芳庭・の如き、一時の龍象、盡く其教を受く。皆謂ゆる五山文學を樹立せしむるに、與つて力ありしものなり。

予は、夢窓が果して宋學を研修せしや否や、從つて、この史上に載すべき價値ありや否やを疑はざるに非ず。語錄等に就いて檢するも、遂に明證なし。然れども、一山を師となし、義堂を弟子とする以上、全く緣故なきものに非ざるを斷言するに憚らず。故に、その經歷を略述せしのみ。その詳に至りては、本朝高僧傳等、別に其書あり。

その功績

夢窓の事蹟として、特に顯著なるは、天龍寺船の明國交通、及び印書奬勵等、直接に五山文學の消長に關するものを除いて、なほ二あり。吸江菴を創建して海南の文化を開拓し、後年その地に南學を發生せしむるの素地を作りしと、足利氏の將士を薫化し、その粗野の俗を變じ、文事を好むに至らしめしこと、是れなり。當時四國の太守たりし細川頼之は、吸江菴の保護を怠らず、又實に夢窓及び義堂・絶海等と方外の交を爲せり。頼之老境頗る寂寞、滿室蒼蠅掃難去、起尋禪榻臥清風の一絶を賦し、悠然高踏、その天命を全うせしもの、豈に夢窓師弟に負ふところなしといはむや。

細川頼之

第七章　義堂

その略傳

義堂、名は周信、空華道人と號す。俗姓は平氏、土佐高岡郡の人、母は藤氏、五臺山に臨り、白氣の懷に入るを夢み、偶ま一葬を踰えて、正中二年に生る。天資豪爽、識群童に超ゆ。十四歲の時、その族に横死せしものあるを見、發心して髮を松園寺に落し、淨義法師に從ひ、佛經を讀み、兼ねて、儒書に及ぼす。十五にして、叡山に登つて、登壇受戒し、里に回りて、新福寺道圓阿闍梨に依つて密教を受く。十七、叔父周念道人に

隨つて、京師に上り、夢窓を臨川に禮し、遂に玄旨を契す。二十七、夢窓の示寂するや、龍山に建仁に依り、又南禪に轉じ、靈利眞參、聲、華夷に聞こゆ。三十五の時、鎌倉管領足利基氏の聘に應じ、關東に行き、圓覺・善福に住して、群衲を度す。應安四年、上杉氏の爲に、報恩寺の始祖開山となり、居ること二十餘年、宗趣贍博、人を照すの鑑あり、四方の雲衲、之が擧ぐるところとなり、列刹に主たるもの、皆その人を得たりといふ。康曆元年、足利義滿、召して建仁を董せしむ。その此に入るや、台旆山に繡り、冠纓緇衲、堂廊に塡衍す。後、義滿に招延せられ、屢ば經書を講ず。至德三年、南禪に陞り、海內の群衲、爭ひ至り、岐陽亦た相州より歸つて名を隸し、講究四年、後、岐陽が宋學を倡ふるに至りしもの、義堂の力多きに居る。その夏、義滿、後小松天皇に奏し、特に南禪を擧げて、五山の第一に列せしむ。その後、疾を以て謝して、慈氏院に憩ひ、嘉慶二年、疾起つべからざるを知り、乃ち命じて、龕を造り、四月二日、自ら之が銘を裁し、四日端坐して滅を示す、年六十四。

その著述

義堂器識淵偉、道儀高古、その居るや、衆と甘苦を同うし、禪坐諷誦、疾むと雖も、闕かず、遂に辛勤を以て、素願に塡る。その學該博、又翰墨を善くす。明僧楚石等、見て稱嘆す。著すところ空華外集・日用工夫集あり、今世に傳ふ。又宋元の偈頌を選んで十卷となし、貞和類聚といふ。その他、語錄・祖苑芳集等あり。

その爲學の閲歷

同時に絕海といふものあり、詩名海の內外に震ふ。義堂より少きこと十一歲、同州同郡の人、その進退、亦た同じく、ともに夢窓の會下に出づ。これより先、文保年間夢窓亂を避けて、海南に至り、五臺を攀ぢ、吸江菴を緣して居る。二人が京に入つて之に從遊せしもの、その高潔なる道風を慕ひしに因る。時は興國正平の間に際し、楠正行と足利尊氏と、京畿に馳逐奔走し、戰鬪しばらくも止まず、五山に於ては、宋元歸化の諸碩衲、漸く化滅に歸し、淸拙雪村・虎關の如き、學藝に裕なるもの、相次いで歿したるに、ひとり夢窓の會下には、如上二僧の外、春屋・天錫・椿庭・芳庭等、幾多の龍象、輩出し、鎌倉五山の勞力を轉じて、京都に移すに至れり。この時、京都に於て、道儀學德、群を拔くの高僧を求むれば、夢窓の外に、龍山を推さゞるべからず。二人亦た其門に學び、その後、京都鎌倉の間に來往して、關左の文化を開發せり。夢窓・龍山は、儒學に關係すること、少しとするも、五山の興廢を論ずるもの、決して、之を問却すべからず。殊に夢窓が跡を海南に留め、因つて二僧を出したるは、後年吸江と五

山との間に、一條の聯絡を保たしめし所以にして、南方の文化、愈よ觀るべく、戰國の末、南村梅軒の學、大に此地に行はれ、やがて一種の特色を發揮せしもの、自ら其故なくむばあらず。

その精勵

義堂は、洵に學者として生れしものなり。その祖父は、儒佛兩敎を兼修せし人にして、その家學に承くるところ、大なりしや、辨を俟たず。然れども、その俊鋭の資は、枯禪に甘んずるものに非ず。その金澤文庫を訪ふや、詩あり曰く、

玉帳修文講武餘、遣人來覓舊藏書、牙籤映日窺蝌斗、縹帙乘晴走蠹魚、圯上一編看不足、鄴侯三萬欲何如、照心古敎君家有、收在胸中壓五車、

その關東に在りて、建長・圓覺の間に周旋するや、商今搉古、魯誥竺墳、泛覽遺すなかりき。且つや、この際、中正子の著著たる中巖の尙ほ存して、ともに談ずべきあり、その講學の精、固より想見するに堪へたり。

濟世の大志

然れども、義堂は、虎關等と異にして、その本領、別に存するものあり、之を一言すれば、王覇の辨を明かにし、一片濟世の志、之を儒術に資せしものなり。その師夢窓の如き、南北分立の際に當り、その賊衷、まことに苦、王室の爲に周旋せしところ洵に三たび其意を致せしものあり。その門下七十子の首たる義堂、豈に獨り然らざらむや。その東光寺に護良親王を哭したるが如き、滿腔の感慨、むしろ冷寂これ事とする空門衲子の事ならむや。又その後鳥羽天皇隱岐の山陵に題する詩を見ずや、

承久雄圖運已窮、乾坤反蕩火炎紅、雲車遠出蓬壺外、畫像猶存野廟中、故國茫茫桑變海、歸心杳杳水涵空、那知平氏功成後、甲冑仍生蟻蝨蟲、
曆數於天道不窮、萬年枝上萬年紅、干戈起自開邊後、社稷終歸戰國中、宴罷瑤池秋月落、春闌禁路曉花空、遊人不管興亡事、閑讀碑文認篆蟲、

これ獨り承久の當時を回憶せしのみに非ず、龍駕南狩の近事を影寫せしものなり。然り、社稷は、終に戰國の中に歸し、了んぬ。之を坐視するは、志士仁人の事に非ず、義堂も亦た緇衣を拂つて起ち、之が救濟を以て自ら任ぜざるべからざるに至りき。而して、その身、本と桑門に在るを以て先づ佛法を說いて、武夫の心を和げむと企てぬ。故に足利義詮の佛書を求むるを賀して、靑凝玉帳留人處、不問兵書問佛書といひ、又足利夫人に說いて、敬神崇僧惠民、國家不令而治といひしが如き、以て觀

るべきなり。然れども、亂離の世、人心荒れしこと甚しく、幽玄の說、秋毫の益なきなり。こゝに於てか、先づ平易切實なる佛敎によりて、嗟離を抑束し、人心を正し、徐に挽回の功を收めむと欲す。而して、之を達せむが爲には、有力なる爲政者によりて、之を下に及ぼすの便宜なるを認めたり。時に天下の事、粗ぼ定まり、足利氏の基、漸く堅し。義堂の鎌倉に在るや、十一年。管領基氏、氏滿父子の爲に、文學を勸め、仁義を說き、治國平天下の道を講じぬ。基氏は貞治六年を以て死し、義堂の之に侍せしこと、前後九年、その銅雀研記の如き、特に基氏の爲に作りしものなり。英才の譽ありし基氏、金澤文庫を目睹せし義堂、この兩者の關係より推せば、足利學校再興の事を以て基氏に歸するの說、亦た故なきに非ず。基氏すでに逝いて、氏滿繼いで立ち、漸〻、長ずるや、之に勸むるに學を以てし、乃ち貞觀政要を擇びて、之を講進し、因つて曰く、每々儒に命じて、孝經及び貞觀政要等を講ぜしむべし、是れ即ち國家政道の助なり。何となれば、人にして仁義五常の道を知らずむば、君命に遵はず、君命に遵はずむば、政事行はれざるなり。今より以後、粟田口儒人を召して、之を講ぜしむべし。庶幾くは、國家安寧にして、尊德日に新ならむと。氏滿その言を納る。之を德川氏の初世、林羅山が僧澤庵と相閲ぎしに比すれば如何。義堂の高懷、亦た欽慕すべきに非ずや。おもふに、その知るところは邦家至治の道、徒に君寵を爭ふは婢妾の事、むしろ心に愧ぢざらむらや。而して、義堂が氏滿治國の要を問ふに答へし言の如き、自ら僧して儒者の職に居らずと雖も、濟世の志、夢寐の間、忘るゝことなかりし深衷を觀るに足る。曰く、

凡治天下、文武二道也、武則治亂而已、文則爲政之術也、昔唐太宗貞觀之政、至今爲美、其初太宗以弓問弓工、答曰、木心不正、太宗乃召十八學士、問政事之要、吾日本三代將軍之世、以十八人之士分爲番、侍幕府之講、無乃擬十八學士乎、然則古今治天下國家、非文武二道則不可也、凡人爲上者憫下、爲下者敬上、是則非生而知之、以學而知之也、不學而知者、未之有也、千萬以學政治之備則幸甚焉、

鎌倉は關東政敎の中心なり、諸侯の會するもの、亦た隨つて少からず。義堂の學を勸め道を說く、獨り幕府の爲めにするのみならず、苟も諸侯と相見る、必ず此道を進說す。上杉氏の爲に曰く、文學を以て政務を補ふべく、公宜しく力學すべし、と。又、曰く、天下の爲に公道を行ひ以て眞俗を安んずべし、と。野洲駿河守等に向つては

曰く、凡そ天下を治め權柄を執るもの、當に文學を勸め、以て其智を益すべし。然らずむば闇昧にして多く通達せず、と。この際、義堂は遠く京都の管領細川頼之に寄するに六臣註文選を以てしたり。之に次いで、佐竹氏の爲に常州に之き、斯波氏の爲に遠く奥羽兩州に赴きしことあり。擾々たる武夫の間に立ち、左顧右眄、偃武修文の事に周旋せる、正に孟子が齊梁諸國に遊說せしと頗る相似たり。その康曆二年を以て、京都に赴き、足利義滿に謁するや、先づ之に勸めて、儒書中、特に孟子を讀むべしといへり。これ何ぞ自ら孟子を以て任ずるに非ざるを知らむや。然り、義堂は、その口吻に於ても孟子を學びしものあるなり。

一人修善則一家化之、一家修善則一國化之、一國修善則天下人皆化之、天下人皆修善則欲其國之不治、政之不行、其可得哉、故曰爲善不同、同歸於治、

義滿その言を納れ、儒官菅原秀長に就き、孟子の講を聞き、更に大學に及ばむとす、義堂曰く、大學は乃ち四書の一、唐人四書を學び、先づ大學を讀む。意ふに國家を治むるものは、先づ明德を明かにし、心を正うし意を誠にす、これ緊要なり。敢て請ふ、殿下、四書の學、怠らざれば、天下令を待たずして治まらむ、と。又爲に說いて曰く、德を修むるを文となし、戈を止むるを武となす、武の用は、天下を安んずるに在り、必ずしも、干戈を事とせず、故に武王紂を誅し、兵を戢め、文を修む。尙書武成に乃偃修文と曰へるは是れなり、と。義堂の說くところ、每に此の如し。義滿更に周易讀む可きや否やを問ふ、答へて曰く、易は知命の書なり、凡そ天地人、三才萬物、皆收めて其中に在り、と。之に次いで、左傳何の書ぞ、その儀如何の答に、左氏春秋は先王大法、褒貶を例となす、我を知り我を罪するものなり、と。乃ち聊か諷刺の意を交へ、又中庸は最も治世の書たりと說く。凡そ此の如き勸學修德の事たる、彼の奢侈淫逸に耽り貪婪飽く無き足利諸將軍に向つては、洵に偶像を捉へて說法するの感なき能はず。然れども、人性未だ必ずしも全く惡となさず、且つ幾分の宗敎心あり、今儒釋兩敎を以て之に訓ふる、義滿太だ頑なりと雖も、顧思するところ無きを得ざるなり。故に彼は奢侈に耽りしと雖も、必ずしも父祖の暴逆に傚はず、能く佛を護し、僧を崇め、巨費を投じ、叛臣の起るをも省せずして、相國寺の大堂塔を營み、叢林の徒をして、文學に潛心するの餘裕あらしめ、遂に此徒に一託するに政事の顧問、外國の使節等を以てし、文物輸入の爲に盡すを得せしめき。兵馬倥偬の間に於ては、む

しろ、亦た奇となすに足らざらむや。こゝに於てか、足利氏の初世、動もすれば、大義名分を過り、人をして長く嫌惡の感を惹かしむるものあるも、政教の爲に盡瘁せし五山碩衲の苦衷は、實に多とすべきものあり。唯だ憾むべきは、義堂等、身、佛門に在り、且つ天地閉ぢて賢人隱るゝの際、未だ十分に、その滿腹の經綸を展ぶることなくして止みしこと、是れのみ。

儒教に對する態度

義堂が儒術を世に行ふを得ざりし所以、その一半は、佛徒たりし爲にして、太だ惜むべきに似たれども、佛徒たりしが爲に、儒術に於て發明するところありしを見れば、彼此乘除するに足らむか。その儒佛の相關を說くや、乃ち曰く、

凡孔孟之書於吾佛學、乃人天教之分、齊書也、不必專門、姑爲助道之一耳、經云、法尚可捨、又何況非法、如是講則儒書即釋書也、

知るべし、唯だ人天教の分を以て、儒を參取せしことを。故に又曰く、

在儒仁義禮智信、在釋不殺不盜不婬不妄不酒、儒謂之五常、釋謂之五戒、其名異而其實同、佛初爲下根凡夫說、人天乘則五戒十善也、然則佛教得兼儒教、儒教不得兼佛教、

これ實にその門下岐陽不二說の由つて本づくところなり。蓋し儒教は、元と孔子が天道より人道を演繹したるに因つて形成す。而して、程朱に至りては、佛理を藉りて、儒學の究極を說明せむと欲し、遂にその面目を一變し、宋代すでに他の評隲に上れり。本邦に於ては、虎關はじめて、朱子の醇儒に非ざるを觀破せしが、義堂更に明白に說破せり。而して、朱子の敏なるや、さすがに苦心の痕なきに非ず。その中庸に註するや、乃ち曰く喜怒哀樂情也、其未發則性也、無所偏倚、故謂之中、發皆中節、情之正也、無所乖戾、故謂之和、と。無所偏倚の四字、以て性を救ふ。義堂は、直に一言にして之を盡す、曰く、未發即佛教一念未生以前也、と。而して曰く、這介田地非識情者能所及、但能忘情者得到、と。一念生ずれば如何、曰く、古今天地、古今日月、堯舜何人哉、一念正則末法即正法、一念邪則正法即末法、と。正念は一信を以てす、信心一念所出生即是此信心是佛心、此心一了一切了、すでに是れ佛界なり、故に因果應報を說き、儒の天命を排するは、自然の勢のみ。人の嘉遯貞吉の意を問ふや時節因緣天分定數を以て應へ、更に有爲の外に無爲を說いて曰く、

古今天地之間、有生者必有母、有母者必有恩、有恩者必不可不報、報有二焉曰、有

爲無爲、王祥臥氷、丁蘭刻木、是有爲而報者也、釋迦升天、目連設飯、是無爲而報者也、而又不見有爲之相、亦不見無爲之相、至這裡也、無因可報也、無愛斷也、無生死之可離也、無涅槃之可證、如是報者、眞實報可恩者也、如是斷者、眞實斷愛者也、如是離者、眞實離生死者也、如是證者、眞實證涅槃者也、

儒を見るやすでに此の如く、之を差別して、其長を取る、故に讀書自ら法あり、

凡讀書、先須正心而讀之、詩三百思無邪是也、今時學者心術不正、故讀書雖多、無所施用、只呼爲書簏而已、是無他、以心不明也、

正心は本なり、學問は末なり、故に曰く、上等坐禪工夫、中等坐禪兼學、下等惟學、と。義堂は、飽くまで、儒學の所長を認め、苟くも、本心を失はざるよりは、之を兼取せむと欲せしなり。

朱學の標準

教に於ては、儒佛を兼取し、儒に於ては、新古を併用す、但だ宋學は禪に近きが故に特に之を推す、是れ義堂の所見なり。空華日工集、康曆三年九月二十二日の條に曰く、

君又曰、昨日儒學者講孟子書、其義各不同、如何、余曰、所見不同也、近世有儒書、有新舊二義、程朱等新義也、宋朝以來、儒學者皆參吾禪宗、一分發明心地、故註書與章句、迥然別矣、四書盡於朱晦菴、菴及第以大惠書一卷、爲理性學本

又同月二十九日の條に曰く、

准后又見問、儒書新舊二學不同如何、曰、漢以來及唐、儒者皆拘章句者也、宋儒乃理性達、故釋義太高、其故何則皆以參吾禪也、

こゝに至りて、義堂が專心一意、朱學に歸嚮し、身、禪僧を以て、之が弘布に盡瘁せし所以を知了すべし。

こゝに、予は結論を提供するに先ち、義堂の辭藻に就いて一言するところなかるべからず。世人或は謂ふ、義堂は五山の文宗にして、絕海は詩宗たり、と。然り、義堂の文に於けるや、宋人を規撫し、ひとり深耕說の一篇、齋藤拙堂をして節を拍たしめしに止らず、林羅山、亦た之を激賞せしこと屢ばなり。銅雀研記の規模宏大なるは、姑らく言はず、日工集中の記事、往々にして、柳州東坡の小品を壓倒せむとす。次に詩に至りても、亦た必ずしも、絕海の下に在らず。その典重雅麗、瑕疵絕えて無き處、中晩の壘を靡するに足る。經術詩文、すでに兼達す、故に之を絕海に比すれば、朱

その辭藻

竹垞の王漁洋に對するが如く、その多方面なる處、偶ま才識の異常なるを觀るべきなり。次に七律數首を抄す。

一別空山月照庭、相思三見菊花馨、天荒地老那堪嘆、雪苦霜辛亦飽經、東海暮雲空縹緲、北山秋樹正凋零、殷　寄謝王孫草、換却春風幾度青、

相國遊山野趣長、故招我輩共林塘、清齋不作陶潛醉、幽賞偏尋惠遠房、雲外桂香飄夜月、岸邊風葉落秋籟、晚來更愛扁舟興、吹斷參差送夕陽、

空房寂寂想春林、歲晚憑誰寄此心、地暖遙知花信早、天寒不奈雪威侵、白雲千疊人何在、黃鳥一聲山更深、待我明年扶病起、青鞋布韈共幽尋、　寄春林上人

筆端訝見燦文章、千里飛來字字香、壯志知君身未老、衰容愧我髮先蒼、鶯花世界春三月、蟾蜍人間夢幾場、記得同舟江上渡、蓬窓雨濕暮鐘長、　次韻寄觀中書記

義堂の眞本領は、佛者たるの初一念を以て、經世の必要上、儒學殊に程朱學を參取し、之を弘布せむと欲せしものなり。唯だ夫れ、義堂が解釋するが如く儒を以て佛の一部分と見做し來れる間は尙ほ可なり。而かも、當時行はれし程朱の學は、元と斥佛の學統なり。斥佛の學統にして、その本體は禪理に依りて現はさるゝもの、

儒佛分立の趨勢

禪徒の爲に入り易きと同時に、佛を斥くるに至るに極めて便利なる階梯ともなり得べく、竟に長く佛門に對して、叛旗を擧ぐるものゝ輩出を防ぎ得べきにあらず。幸にして世運未だ平ならず。且つ朝廷の儒者、活氣なく、識力なく、善く古典に精かりしと雖も佛理に通ぜず、偶ま朱書を閲するも奥義を解する能はず、その竟に禪徒の下風に立ちしもの、亦た宜なりといふべし。氣運猶ほ此の如しされば禪徒の爲には頗る恐るべき大敵も、しばらく叢林中に愛育護養せられ、義堂に承けて岐陽出で、易の陰陽に依りて儒佛不二の說を成し、遂に朱註に和點を施し、徒弟の便に供し、岐陽に次いで惟肖出で、景徐・蘭坡・桂悟・桂菴出で、皆朱學を講明せりずてにして、應仁の亂の爲に學統二分し、その一は、五山の中に藏して、更に陽明學を混和し、遂に佛・朱・王、三要素の中より半脫したる半僧半儒の惺窩をば相國寺より出すに至り、その一は、桂菴等によりて諸州侯伯の砥礪となり、山崎闇齋に至りては、叢林の蟄蛇、全く脫化し去り、雲蒸龍變、五山の天、佛國の土、爲に毒氣害焰を蒙りしこと亦た甚しと云ふべきなり。闇齋はじめ妙心寺に居る、妙心寺は十刹の一なり後に南海の吸江寺に學ぶ、吸江寺(即ち吸江菴)は夢窓の創搨に係り、義堂絕海の出

てし處、その衣鉢は西胤・鄂隱・旭峰・待雨等によりて長く此處に絶えざりき。闇齋は野中兼山に依りて還俗し、神道を崇び、更に國體を論じ、覇府儒林の思潮を皷動し、その佛敎に向ふや、力を極めて抵排するに至りしと雖も、實は其初自ら禪徒たりしの反動に過ぎず、翻つて、又、五山學術の傳統を引き來りたるが爲に、能く朱學研鑽の功によりて儒佛の關係を判別し得たりしに外ならず。儒佛すでに分立し、その態度、はじめて明斷、その進歩、亦た豫めトすべきなり。されば若し能く覇府儒林の盛運を致せし所以を尋ぬれば、義堂等が禪徒の干戈亂離の間に儒道の尊ぶべきを示し、兼ねて、朱學の取るべきを明にせし功、固より大なりといはざるべからず。

その略傳

第八章　夢巖

夢巖、名は祖應、雲州の人、幼にして英發、東福寺に入りて、潛溪に謁し、後、鄉に還り、門を閉ぢて出てざること二十年、又東福に入る。博覽雄辯にして、善く文を屬し、中巖と名を齊うす。こゝに於てか、時名を負ふもの、大岳・東漸・大愚・岐陽・惟肖の輩、皆かつて其門に遊ぶ。應安七年寂す。大智圓應禪師と謚す。著すところ、早霖集三卷あり、續群書類從に收む。

その學問

その學、孟子を主とし、之を以て徒に授けしこと、日工集、その他の諸書に見ゆ。故に師錬が碧鵝殺人論を著すや、之を辯駁して、剩するところなし。臥雲日件錄に、中巖入唐所見聞之事、夢巖亦能辨之といふを見れば、その學の博きを想見すべく、又不要身後留蹤跡、命曲以書籍等令供本成寺祖塔修造資といふを見れば、著作の極めて少き所以を知るべし。その學風の如き、實は殆んど考ふべからずと雖も、岐陽の其門より出でしを見れば、これ亦た宋學を主奉せしものなるや、必せり。

第九章　岐陽

程朱學の五山に於けるや、岐陽に至つて、はじめて醇なり。名は方秀、不二道人と號す。岐陽は其字なり。姓は佐伯氏、讃岐の人、空海の同族なり。その母、夢に珠劍を獲て姙むあり。康安元年を以て、岐陽を生む。生髮未だ乾かず、州の亂に遭ひ、父清泰、避けて北越に奔る母、岐陽を懷いて、洛に入り、外祖源某に依る。源某もと儒を業とす、

その略傳

岐陽の英敏なるを見、孺子教ふべしとなし、授くるに、詩書を以てす。諳誦して倦まず。次いで源某の逝くに及び、泉石窓に東福に從ひ、重役を取る。時に夢巖方に東福を董し、博覽能文を以て、その名、遐邇に高し。岐陽之に從つて學ぶ。十四歲にして、夢巖逝き、乃ち靈源を安國に拜し、親炙すること八年、知解益す進み、法を讃州道福に開く。永德二年、辭して相州に之き、錫を龜谷に掛けしが、明年洛に歸り、名を南禪に謙し、南北の講肆に遊び、大小經論、探賾せざるなし。至德三年、義堂南禪に陞董し、頗る岐陽の才を賞す。空華日工集に、岐山序の一篇あり、空海の蹟を擧げて、之に擬するなり。岐陽の學、義堂より得たるもの、決して少しとなさず。明德三年、東福に歸り、藏鑰を掌る。應永九年、明の惠帝、僧天倫一菴を遣して、本邦に來聘せしむ、岐陽面識せむことを欲すれども、官禁許さず、因つて屢ば書を以て往來す。二師その博才を稱す。その書、今、不二遺稿中に載す。足利義持、常に召して、法を問ひ、崇敬尤も膴。幾もなくして、普門に因つて、東福に遷董し、金襴の衣を賜はる。十年、わが使船、四書及び詩經集傳等を載せて、明國より還り、八月三日、齋して之を洛陽に致し、岐陽はじめて之を講ず。當時程朱の新注、間ま世に傳はり、私に之を窺ふものあれども、未だ公

その著述

然之を講ずるものあらず。夢巖の孟子を講ずる、新注に依りしならむと雖も、未だ甚だ世に行はれず。足利學校、その生徒に教ふる、猶ほ古注を以てす。岐陽特に之を悼み、新注を講ずる毎に、輙ち曰く、儒に志ざすものは、必ず之を學べ、徒にかの棄つるところの書を讃する勿れと。これより先、宋書間ま或は傳來すと雖も、未だ之に和點を注し、以て世に弘むるものあらず。時に南北分立して相爭ひ、惟だ執載奇を出すを務め、儒學甚だ行はれず。海舶の珍書、手に之を採ると雖も、多く讀む能はず。こゝに於て、岐陽遂に和點を加へ、以てその徒、一慶、惟肖等に授く。應永二十七年、天龍の席を司り、俄に風痺に罹り、棗棘菴に退靖せしが、又起つて南禪に升り、未だ幾ならずして、不二菴を慧日山側に構へ、以て憩ふ。三十一年、宿痾頓に發し、その二月、卒爾即世す、年六十四。

岐陽天性充實、識量宏深、文藻典麗、名聲天下に藉甚たり。一時の名流、皆之と交り、その門、又英俊多し。

著すところ、翠川錄、今傳らず。不二遺稿二卷、その學を窺ふべし。而して、最も稱すべきは、訓點なり。その原本、今考ふべからずと雖も、後世桂菴の和點、全く之に本づ

訓讀の法

くものたる以上、その大概を臆想すべし。抑も訓點の如きは、瑣事に似たりと雖も、邦人に對しては、頗る重大の關係を有するものにして、一言すれば、譯讀の正否に外ならず、細心の研鑽は、自然の勢、その端を此に發せざるを得ざるなり。岐陽の着意、可なりといふべし。勿論之が爲に、直讀の法、いつしか廢し、五山の詩文、これより類唐に趁き、やがて、和臭を帶ぶるに至りしは、亦た已むを得ざるの結果といふべきも、その孰れか得、孰れか失、識者自ら判知するところなるべし。桂菴和點の一條に曰く、

不二和尙曰、呉音漢音ノ事、更難信、然レドモ、本國人讀ミツケタ樣ニヨマヂバ、聞レヌナリ。一家仁三家者、儒書ノ中ニテモ、呉音漢音隨處讀之也、或又經文禪語モ、其マヽ讀也、脫禪寂滅敎唱アケ、又雪山成道ト讀ムハ曲事也、セキベツト漢音、是ハセメテ外□記ナドニ、如此ヨメバコソアレ、セツセンヲセツサント讀物笑也、又論語ノ三十四十、スンデ讀ムコトハ、昔ヨリ俗書ヨミツケタレドモ、文字ハ人前ノ用ナリ、人間年、スンデ三十四十ナド答ヘタラバ、カタコトヽ可笑也。只世界ニ申ツケタ樣ニ、讀デ、早々達理肝要也。雖然、鄕談其外卑辭、ソハ又宜正之也。古點不亦樂乎之類、イヤシキナリ、タノシマザラムヤト讀ンデ好也、是ヨリ總別望ナラバ、文字讀ヨバ、無落字樣ニ、唐韵ニ讀ミ度キ也、其故ハ、偶一句半句、ソラニ覺ユル時モ、ヲキ字不知、曰其何字也、曰惜事云々。

これに由つて之を觀れば、岐陽の創意に係る訓點の法は、極めて實際に適合せむことを主としたるものにして、而かも、穩正明晰、後世佐藤一齋等の妄訓とは、自ら其撰を異にするを知るべきなり。

その態度

予は、岐陽に至りて、純然たる學者的態度を觀るを得たるを喜ぶ、彼れ固より僧籍に列すと雖も、醇儒の面目を存し、强ゐて坐禪風誦を事とせず、全く聖經賢傳に枕籍し、その生を斷送せしものなり。五山の學術は、こゝにその傾向を一變し、禪家勢力の失墜するとともに、儒學の漸く興起せむとする趨勢は、隱微の間に於て、認め得べかりしなり。

朱學の唱首

朱學の五山に於けるやすでに尙し。然れども、多くは、單に評隲するのみして、專心一意、之を尊信せしもの、なほ太だ寥々。師錬の如きは、動もすれば、反對の地位に立たむとし、玄慧は唯だ之を講說せしに過ぎず。義堂の學は、濟世の志に本づき、且

明德

つ訓詁と性理と、併せて之を取る。その態度、なほ曖昧なり。夢巖は、頗る之を信ぜしに似たりと雖も、未だ群疑を排して、之を唱道するに及ばず。岐陽に至りて、純然たる一個の程朱學者、故に若し本邦程朱學派の唱首を求むれば、斷じて、之を岐陽に歸せざるべからず。その不二論、儒佛の融會を主張したるは、朱子が佛家を排斥したると、大に異なりと雖も、單に外形上の差違にして、特に疑を挾むを須ゐず。且つ明德を表出し、その立論の基礎となせしが如き、愈よ其然るを見るべきなり。

朱子の大學明德を解するに方り、虛靈不昧の語を以てしたるは、明に佛說に本づきしもの、而かも、岐陽は、正に一歩を進めたり。

周易離卦曰、離明也、明也者明德也、明德也者乃吾聖人之德、所謂一心也、人人之所具、素有之大本、寂而常照、照而常寂、若止水焉、若明鏡焉、若帝網之珠焉、然則明德一心之用、一心明德之體、惟人不明之作狂惟狂、克明之則作聖、聖之與狂、其在一心之明與不明也歟(明說)

知るを要す、朱子は明德その者を以て本體となし、原理となせしに反して、岐陽は心を以て體となし、明德を以て用となし、これが區別を立てたるところ、議論はる

かに明亮なるを。その他、顯山說に於て、明の義を說き、晦叔字說に於て、晦を說きたる如き、併せて參核に資すべく、心の本體を明となす所以、畢竟晦に對して、姑らく之を言ふものにして、本來無差別の境に於て差異なきものとなせしを知了すべし。

すでに一心明德の體用を以て、其說を立つ。儒佛の不二は、その自ら到達すべき必然の結果のみ。而して、これ義堂より出て、更に明晰なる所以なり。

昔堯以此明德傳之舜、舜傳之禹、吾佛大聖聖人亦傳之大龜氏、大龜氏以傳之慶喜、慶喜之後數傳以至達磨氏、始來於震旦、以至於慧日、而光明盛大、皆傳一心於萬世者也、其所傳者異乎其名而其實一也(明說)

岐陽の心を主とするは、佛說に依ると雖も、明を說くや、常に儒に參し、特に易を以て本となす。故に佛理を解するに、儒學を藉り用ふるの觀あり、程朱と相表裏す。之に次いて、送連山知客歸山陽序に於ては、佛說の發達を以て、易理に比し、即中字說に於ては、佛說易理を合せて、一大爐中に投ぜむとす。岐陽の說、すでに不二を立つ、たとひ自ら儒家を以て居らずとするも、他の禪家とは、夐然として同じからず。彼

兩教の差別

は、むしろ周濂溪たるも、遂に藕益大師たらず、三省字說、不二の義を說く、甚だ詳、併せて觀るを要す。

然れども、岐陽は、兩教の差別を認めざるに非ず、その孝を論じたる如き、以て觀るべきなり。

孝也者順乎理以爲孝也、但以理有淺深、而不同爾、戒愼不睹、恐懼不聞者、儒教所以行孝而須於理也、……吾宗不然、人々但向父母未生以前、發大精進、起大勇猛、撥着所謂本來面目、則謂之順理(贈南國蓋上人叙)

佛教の孝を以て、未生以前に向ふに在りとなすは、仲靈潛子の孝論を承けしもの、更に左の言を觀ば、その論據の那邊に在るを知るに足らむ。

觀彼訂頑之訓、乃知橫渠學於釋氏、乾父坤母、民吾同胞、物吾與也、然則其爲孝也、菽水云乎哉、甘旨云乎哉、自非其道歸一則何及乎此、達人大觀二教不可壞焉(送東湖春知客歸越中叙)

その呼んで儒となすものは、漢唐に在らずして、宋儒に在り。岐陽は、疑もなく、性理學の價値を認知して、之が標章弘布に盡瘁せしものなり。

その辭藻

岐陽は學者を以て稱すべきものなれども、詞藻亦た決して人に遜らず。その文氣格やゝ劣らずと雖も、典雅工麗、「寄山陽芝居上人詩叙」の如き、「理巖字說」の如き、最も、觀るべく、詩も亦た自ら異趣あり。「賦紅梅送祖西童子還赤城」の五律に曰く、

河南春尙淺、何事早歸家、視子靑年富、慚吾白髮華、曉鐘千樹月、暮笛赤城霞、記取分携處、紅梅已着花、

學術文章、ともに兼達、門下の才俊皆然り。覇府時代儒者の標型、早く五山の盛時に存するを知るべし。

第十章　一慶

その略傳

一慶、字は雲章、京師の人、姓は藤氏、左大臣經嗣の子、至德三年を以て桃華坊の第に生る。幼より逸群、榮祿を事とせず、明德二年、はじめて六歲、山崎の成恩寺に入り、應永八年、歲十六、名を東福に隸す。その翌九年、明の使僧天倫、一菴の來朝するや、往いて謁す。倫、その器の重きを見、乃ち賦して與へて曰く、

十二年前蚤出家、因緣傳得祖袈裟、黃梅夜半曾分付、把住無容失左車。

すでにして、城北に適き、岐陽に聖壽寺に從つて、程朱學を受く。朝昏辛勤、內外を綜貫し、岐陽が東福に主たるに及び、輪藏を典るに充てられ、常に共に碧巖を評論し、その羅紋結角の處に至るや、岐陽掌を低つて賞す。後小松天皇、手詔を賜うて、之を召し、入つて元亨釋書を講ぜしむ。嘉吉元年、東福を董す。寶德元年夏、太上皇、御容を寫し、勅して讚を作らしめ、亦た自ら和歌を詠じて、その尾に書す。世以て榮となす。その冬、詔して、南禪に陞り、居ること三月、次いで、慧山の寶渚に居り、身を律する甚だ嚴。かつて慨して曰く、隱微に就いて流弊滋し、と。居常衆と石丈の淸規を講じ、因つて、諸家の說を會して、淸規要綱を撰し、又五燈一覽圖を作り、以て後學の檢尋に備ふ。その喜んで程朱の說を究むるや、理氣性情圖及び一性五性例儒圖を著す。寬正四年正月坐化す、年七十八、敕して弘宗禪師と謚す。

その略傳

第十一章　惟肖

惟肖、名は得巖、雙桂と號す。備中の人。性氣睿敏、年十六、京師に上り、芳草堂に從ひ、次いで祖應に東福に參し、岐陽と同門たり。然れども、程朱の學は、之を岐陽に受く。

その門下

經史子集、探抉せざるなく、文を以て、世に鳴り、仲方・太白等と、名を齊うす。應永中、足利義持、招延して、相國を董せしめ、寵待隆渥。その後、攝州棲賢・洛の眞如・萬壽・天龍に歷住し、後南禪に陞る。永享四年、足利義敎の使を遣し、書を齎らして、明の宣宗に贈るや、惟肖に命じて、其文を撰せしむ。八年六月、使舶明より還り、はじめ四書五經大全を傳ふ。これより先、明の成宗、儒臣胡廣・楊榮等に命じ、程朱の意に本づいて、この書を撰せしめ、すでに、梓に鋟して、世に頒するもの、二十餘年。惟肖、師說を承け、愈よ其詳を窮めむと欲し、使舶に托して、之を購ひたるなり。晚年、事を謝し、一刹を南禪寺中に構へて、燕息の所となし、命じて雙桂院といふ。世、因つて稱して、雙桂和尙といふ。從學するもの、甚だ衆し。恒に人に示して曰く、たとへば山に登るが如し、須らく自ら努力すべし、と。又堂に上るや、輒ち曰く、天、何を言ふか、四時行はる。地、何を言ふか、萬物生ず、と。傍ら莊子を好み、はじめて林希逸の鬳齋口義を講じ、鈔十卷を作る。蓋し篇中多く禪語を用ひて、世人曉り難きが故なり。著すところ、語錄の外、文若干卷、題して東海瓊華集といふ。

その門人、頗る多し。景徐蘭坡・桂悟・桂菴、その最たり。特に桂菴の如きは、五山戰國

兩時期の過渡に當り、敎を諸方を布き、儒學史上、空前絶後の功績を成せしものなり。諸家皆傳あり、次に載す。

第十二章　景　徐

その略傳

景徐字は周麟、別に宣竹と號す。善く文を屬し、博識多通、群衲に領袖たり。法を萬年の材用堂に嗣ぎ、四たび、相國に住み、一たび南禪を董す。文明十五年正月、足利義尙、近衛政家等と會して、各吟懷を暢ぶるや、景徐又召さる。後、軒を萬年山に構へ、遂に此に逝く。著すところ、集若干卷、題して翰林葫蘆集といふ。

景徐と桂菴

慶長十五年、文之が恭畏に與へし書に曰く、應永年間、南渡の歸船、四書集注と詩經集傳とを載せ來つて洛陽に達す。こゝに於て、不二岐陽、はじめて此書を講じ、之が和訓を作る。時に東山に惟正あり、東福に景召あり、二老各衲にして、同じく不二の門に出て、翅だこの二書に精しきのみに匪ず、博學多聞を以て、天下に藉甚たり。我が桂菴、二老に從つて、程朱の學を受け、明に遊ぶこと七年、遂に之を研究して歸り、之を西藩に敎授し、之を月渚に傳へ、月渚以て一翁に傳へ、以て文之に至る、とこゝに惟正といふは、まさしく惟肖の誤にして、景召は景徐なるや必せり。而して景徐、直に岐陽に學び、且つ桂菴の師たりといふは、傳聞の訛のみ。二家贈答の詩、爾汝の交を想ふべく、相並んで惟肖門下に出でしを疑はず。

第十三章　蘭　坡

その略傳

蘭坡、名は景茝、雪樵と號す。夢窓四世の法嗣たり。聰慧夙發、喜んで、東坡の詩を誦す。はじめ、蟬闍に學び、又葵齋に從ひ、程朱の學は、惟肖より受く。文明十五年正月、足利義尙の雅會をなすや、景徐等と、召されて、之に與る。後土御天皇、屢ば召して、法を問ふ。蘭坡の學、內外に涉り、闕廷に詣る毎に、朝に經を講し、夕に詩を留む。諸大刹に歷遷したる後、南禪に陞り、幾もなくして、正因菴に退隱す。蘭坡、尤も桂菴と善く、明應の末、桂菴鈞命を奉じ、薩南より還つて、しばらく東山に居るや、書を贈つて、之を賀し、その他、唱酬の作多し。文龜元年、庵中に終る。後柏原天皇、之を追褒し、謚を賜うて、佛慧圓應禪師といふ。著すところ、仙館集、雪樵獨唱集あり。

その弟子

京人巢松、その門に遊び、親炙すること八年、詩を善くして名を知られ、後、薩摩に

遊び、桂菴に從つて學び、遂に其地に老ゆといふ。

第十四章　桂悟

五山に於ける陸王の學

予は、すでに五山に於ける程朱の學の傳統を叙せしが、こゝに桂悟を傳するに際し、一種神奇の念に堪へざるものあり。他なし、桂悟は、實に王陽明に面語したるものにして、五山に於て、今後陸王の學、或は多少行はれしを臆想するもの、必ずしも、その故なきに非ざればなり。

桂悟の略傳

桂悟は、了菴と號す。應永三十一年を以て生れ、年長じて桂菴等とともに、朱學を、惟肖の門に受く。後、法を眞如の大疑信公に嗣ぎ、宗說に泛通す。文明中、出でゝ伊勢の安養に居り、又遷つて東福を董す。後土御門天皇、悟が譽を馳するを聞き、召して法要を問ひ、大に宸機に愜ひ、特に御筆を染め、了菴の二字を大書して、之に賜ふ。世以て榮となす。永正三年、足利義澄、桂悟をして、明に聘せしむ。時に年八十三。すでにして、舟鄞江に抵り、明に寓す。四年丁卯の夏、餘姚の王守仁、謫に龍場に赴き、途錢塘に至り、就いて、桂悟を見、その學術を感ぜしといふ。すでにして、都に入り、朝聘の禮を行ふ。鰲海圖編に、正德八年五月、夷船三隻、使僧桂悟貢方物といふは、即ち是れなり。但し年月は、その歸時を言ふのみ。武宗、桂悟に勅して、育王山に住せしむ。桂悟、門に臨んで曰く、育王門凡八萬四千、毘盧樓閣雨華現前、と。又步を進めて曰く、纔動一步東土西天、とすでにして、武宗、中使を遣して、悟に金襴の袈裟を賜ふ。因つて詩を以て恩を紀して曰く、

聖錦恩榮北闕天、黃梅夜半不曾傳、育王山頂橫雲霧、無相福田擔一肩、

その每に堂に上るや、緇白歡呼し、公卿縉紳、德を崇んで來謁す。居ること八年、諸儒之と交るもの多し。九年、去つて姑蘇に館す。姚江の楊端夫等、詩を贈るもの、亦た少からず。端夫は曰く、

王陽明の送序

撥開雲霧靈臺湛、著盡工夫豈憚勞、六鑿已空無個事、一身天地自逍遙、文彩飄然語意眞、聖朝尤重老成人、明朝授節歸東國、曾見賢王眷顧頻、

十年、桂悟の歸らむとするや、縉紳詩を寄するもの、相踵ぐ。この年五月、王守仁、門人徐愛等と四明に遊んで、山水を觀、寧波より、餘姚に還り、桂悟の回らむとするを聞くや、その十六日、序を爲て贈る。

世之惡奔競而厭煩拏者、多遯而之釋焉、爲釋有道焉、不曰清乎、撓而不濁、不曰潔乎、狎而不染、故必息慮以浣塵、獨行以離偶、斯爲不詭於其道也、苟不如是、則雖皓其髮、緇其衣、梵其書、亦逃租繇而已耳、樂縱誕而已耳、其於道何如耶、今所日本正使堆雲桂悟、字了菴者、年踰上壽、不倦爲學、領彼國王之命來、貢珍於大明、舟抵鄞江之滸、寓館於明、予嘗過焉、見其法容潔修、律行堅鞏、坐一室、左右經書、鉛朱自陶、皆楚楚可觀、愛、非淸然乎、與之辨空、則出所謂預修諸殿院之文、論敎異同、以並吾聖人、遂性閑情安、不譁以肆、非淨然乎、得名山水而游賢士大夫、而從靡曼之色、不接于目、淫洼之聲、不入于耳、而奇邪之行、不作於身、故其心日益淸、志日益淨、偶不期離而自異、塵不待浣而已絕矣、玆有歸思、吾國與之文字交者、若太宰公及諸縉紳輩、皆文儒之擇也、咸惜其去、各爲詩章、以艶飾迴躅、固非貸而濫者、吾安得不序、齋藤拙堂の文話に云ふ、山田の祠官、正住隼人の家、陽明が日東正使了菴和尙國に歸るを送るの序一幅を藏す。余かつて往いて觀る。字畫穩秀、神彩奕奕、その親筆たること、疑ふべきなきなり。その文暢達、故に之を全錄す、と。又曰く、按ずるに、伊藤東涯の盍簪錄に云ふ、堆雲は、五山の禪侶、名は桂悟、字は了菴、かつて使者に充てられて明に入り、行程記あり、王陽明に邂逅し、陽明序を作つて之を送る、と。東涯、了菴の事を書すること、此の如し。然れども唯だ五山といふのみ、某寺の住侶たるを詳にせず。伴蕃蹊の閑田耕筆には、東福寺の僧となす、異日當に之を詳にすべし、と。五山學術の幽昧に埋沒せしこと、久し。東涯の輩、何をか知らむや。而して、此序の猶ほ存するは、まことに喜ぶべきなり。

その著述

すでにして、東に還り、丙に入つて、事を報ずるや、後柏原天皇、乃ち敕して、南禪寺に陞らしむ。山門丘墟となるを見、悉く衣資を出して之を再建し、後東福の大慈院に居り、機いで逝く、その年月、未だ考へず。特に謚を賜うて、佛日禪師といふ。著すところ壬申入明記及び語錄二卷あり。

桂悟と桂菴

桂悟、桂菴と交深し。その西航せむとするや、二絕を桂菴に寄す、その中、桂子天香我同稱、桂檀藉藉一家風の句あり。蓋し二人皆青年にして、俱に雙桂に學ぶ、故に桂の字を分つて、各自ら名づけしものならむ。桂菴、和歌を寄せ、之に酬ねていふ、

法の師の、花の玉もを、くりかへし、かけて相見む、ことをしぞおもふ。

桂悟の歸るや、年九十。その饗鑠たることは、はるかに伏波に過ぐといふべし。桂菴の

桂悟と王陽明

桂悟より少きこと三歳、而して、その明に適くや、相先つこと三十餘年、その東歸、文明五年にして、王守仁、生れて僅に二歳、桂悟の明に遊ぶとき、守仁歳すでに四十を踰え、格物致知、知行合一の義を論ず。良知の學、未だ世に振はずと雖も、天縱明睿、優に聖域に入る。桂悟之と親しみ、學術を論じて、すでに許さるゝこと、贈序言ふところの如し。陸王の學の五山に於ける、豈に殘香賸馥尋ぬべきものなしといふを得むや。要するに、了菴は本邦人中、陽明學に接觸せし第一人なり。

王學の開展

藤原惺窩の學を論ずる、陸王を棄てず、那波魯堂の學問源流に曰く、惺窩の學を唱へし比、宋の陸象山・明の王陽明、著述の書、早く已に傳り、その門人にも、之を讀める人、往々有之、心學の是非を能く明かに知れり、と。中江藤樹が、陸王の振興者たることに就いて、予、固より異議なし。然れども、その學の傳來に就いて言へば、惺窩以上、之を五山に歸せざるを得ざるなり。

その他の五山學僧

惟肖門下の諸家、すでに概ね叙述を經、ひとり桂菴を剩すのみ。桂菴は、桂悟と時を同うすと雖も、戰國兵戈の禍を避けて、流寓年所を經、その學を諸方に播布せしのみならず、その操守精神、聊か異なるものあるを以て、便宜上、之を戰國時代に讓ることゝなさむ。而して、五山の學僧、もとより之に止まらず、清啓の如き、特に名あるものあり。清啓は、萬里叟と號し、天與伯元の法嗣、清拙の法孫なり。明に使し、諸老僧に謁し後、歸つて建仁寺に住し、長祿中に寂す。その學、程朱に深く、著すところ戊子入明記あり。然れども、この類、確然たる學統、尋ぬべからざるを以て、こゝには、すべて省略に從ひ、次に朝廷の儒者と金澤・足利の兩校とに就いて論述し、室町時代縉紳の學藝及び關左文教の概況を探究せむとす。

（二）山外

第十五章　朝廷儒者

藤原の學術

清原頼業、一たび逝いて後、粟田口氏、なほ存すと雖も、王家の經術、殆んど稱すべきものなし。こゝには、鎌倉の初より室町の末に至るまでの間、强ゐて二三を擧げ、禪林講學の盛に比し、その如何に落莫を極めたるかを知らしめむ。

菅原爲長

菅原爲長は、古人十三世の孫、大學頭長守の子なり。元暦正治の間、秀才に擧げられて試策し、大舍人助右衛門尉となり、檢非違使に任じ、累りに式部少輔・大内記を

歴、文章博士に遷つて、侍讀となり、式部權大輔に任ぜられ、進んで、從三位に敍し、大藏卿となる。嘉貞中、參議に任じ、勘解由長官を兼ね、正二位に至り、寛元四年薨ず、年八十九。書を善くし、和歌に工に、朝廷の典故に練達し、縉紳の士、推して國家の重器となす。建保中、上皇に侍して、貞觀政要を讀み、又平政子の詩を以て、譯すに國字を以てす。著すところ、文鳳鈔あり。子長貞・公良・長成・高長、皆文學あり。然れども、漢唐の學を株守するのみ、殊に稱すべきものあらず。かつて、釋圓爾と、莊嚴藏院に會す、相國近衛兼經曰く、菅公は本朝の大儒、常に釋の儒を壓すを衒む、今兩雄相遇ふ、輸贏占むべきのみ。圓爾曰く、承り聞く、菅公儒術に從事すと、是ありや否や。爲長曰く、然り。圓爾曰く、我が法の中、佛佛授手、祖祖相傳へ、師授に因らざれば、虛設となす。故を以て、某は世尊より五十五世、達磨以來二十七葉、强弩の窮矢、魯縞を穿たずと雖も、猶ほ系受を以て釋子と稱す。釋を以て儒を例する、恐くは、亦た然るべし。知らず、公孔子に於て幾世なりや、と。爲長口を箝して退き、人に謂つて曰く、我、爾師と道義を角せむと欲す、彼世葉を以て言となすなり、而して、我すでに重圍中に陷るのみ、と。菅原氏の後、室町の時、秀長あり、かつて足利義滿に進講す、尋いで豐長あり、氏滿之に師事す。皆程朱の新說を取る。蓋し時風に沿ふものならむ。

東坊城秀長

これに次いで、東坊城秀長あり、姓は藤原、參議爲長より出づ。父長綱に繼ぎ、參議式部大輔に至り、正二位に敍せらる。應永十四年、官を辭し、十八年逝く、年七十四。博識を以て、世に鳴る、その家乘を迎陽記といふ、子長遠あり。

一條兼良

然れども、當時朝廷の碩學を求むれば、一條兼良に及ぶものあらず。兼良は、左大臣從一位關白經嗣の第二子、兄經輔、病を以て薙髮するに及び、代つて父の後を繼ぎ、叙爵せられて、左大臣從一位に累遷し、永享四年、攝政となり、月を經て辭し、文安三年正月、太政大臣に拜せられ、四年六月、關白氏長者となる、はじめ、二條持基の關白たるや、兼良及び左大臣近衛房嗣、等、皆その職を得むことを望む。而して、持基薨ずるに及び、房嗣之に代る。兼良怒禁ずる能はず、爲に屢ば將軍足利義勝の母勝智藤夫人に就いて、之を請ひ、終に房嗣をして、其職を辭せしめ、自ら之に代る。享德二年、職を解くや、詔して、三宮に准し、食邑三千戶、隨身兵仗及び年官年爵を賜ふ。長祿二年、之を辭し。應仁元年、復た關白に補せらる。二年八月、細川勝元、山名持豐と爭ひ京師兵塵を被る、乃ち避けて、九條に寓居し、戰亂愈よ盛なるや、又去つて南都に至

り、僧房に寓居し、時の靜寧に至るを待つ。兼良はじめ聯歌を編して、良基の菟玖波集に續ぎ、以て勅撰に擬せむと欲し、二十卷を纂輯し、名づけて新玉集といふ、未だ奏覽を經ずして、兵革に遇ひ、復た隻字を遺さず。因つて南都に在つて、詳かに其事を敘し、名づけて筆占といふ。文明二年七月、關白を辭し、四年美濃に遊びて、藤川記を作り、五年六月、髮を削り、法名を覺惠といふ。十三年四月薨ず、歳八十、謚して後成恩寺と號す。

その學殖

兼良、博學多聞にして、最も朝典に熟し、和歌を善くし又神道に通じ、儒佛に涉り當時推して才學絶倫となすはじめ、桃華坊に居り、自ら桃華老人と稱し、又三關野人と云ふ。かつて自ら曰く、我、嘗丞相に勝れるもの三あり、曰く攝家たり、曰く太政大臣たり、曰く延喜以來の事を諳ずるなり、と。人あり、かつて兼良を招き、床頭に嘗公の、像を掛く、兼良悅ばずして曰く、奚んぞ、彼を我が席上に置くや、と。

その本領

その學、淵博なりと雖も、儒に入るや、程朱の說を采る。尺素往來に程朱二公之新釋可肝心と公言したるを觀て知るべし。又國字を以て、程朱の註を解し、四書童子訓を作る。然れども、その說、神佛調和に論及し、北畠親房等と、頗る相似たるものあり、樵談治要は、足利義尙の囑に應じて、文明十二年、筆を執りしものにして、治政の大綱を述べ、殆んど盡さゞるなく、その中、下の言あるを見る。

天下の主領たる人、誠に不足なき身において、政道をとりもち、是を行はむことは、大にむづかしき事なれど、誰に讓るべきとにもあらざれば、夙に起き、夜半にいねて、萬民のうたへをきゝ、理非を決し、其望を叶ふるとは、地藏觀音の慈悲誓願も、唐堯虞舜の仁德の政道も、さらに別に有るべからず。是を佛法王法二なく、內典外典一致也といへり。唐の李舟が書にいはく、釋迦中國に生れなば、敎を設ること、周孔のごとくならむ、周孔西方にむまれなば、敎をまうくること、釋迦の如くならむ。天堂なくば、則やんぬ。あらば、則君子のぼらん。地獄なくば、則やんぬ。あらば、則入らむといへり。是は內典外典を和會して、至極のことはりをのべたるものなるべし。

その著述

その說くところ、頗る穩妥なり。これに次いで、兼良の著述を擧ぐれば、公事根源・文明一統記・東齋隨筆・桃華藻葉・除宮雜例・花鳥餘情・代始私抄・年立源語秘訣・歌林良材・連珠運壁・雲井の春・小夜の寢覺・二判問答等あり。之を要するに、兼良は古今を通じ、

紳中、最も學に深きものにして、論ずべきこと多けれども、他岐に入るを以て、こゝには、全く省略に從ふ。

清原氏は、賴業の後、業忠あり。曾祖父良賢、後光嚴・後圓融・後小松の三帝に侍讀たり。業忠、家を繼ぎて、善く祖先の名を墜さず。はじめ、宇津峰宮尹良親王に屬し、主水正に任ぜらる。應永中、尾張津島及び吉野に轉徙し、後朝に還りて、大膳大夫大炊頭を歷て、明經博士局務に補せられ、內昇殿を聽さる。次いで、大藏卿となり、正三位に叙す。業忠、大學中庸を講ずるときは、朱子の章句を用ひ、論孟を講ずるときは、猶ほ何晏・趙岐の古注を用ひしといふ。長祿二年十月、薙髮して、僧となり、幾もなくして逝く。

清原宣賢以下

業忠の子は宗賢、卜部兼倶の子を養うて嗣となす。名は宣賢、主水正・大炊頭を歷て、藏人直講に補せられ、昇殿を聽るされ、侍從に任じ、正三位に進み、亨祿二年二月、薙髮す。法名は宗武。天文十九年七月、越前に薨ず、年七十六。宣賢の弟子に敎授するや、又その祖と同じく、五經及び論孟は、古注を用ひ、但だ學庸は、朱註を以てす。抄解するところ、多く、國學を兼修し、日本紀の神代卷及び貞永式目・職原抄等、各諺解あり。祖父業忠、かつて其軒に顏して環翠軒と稱す。子良雄、本名は業賢、歷職して、正三位に陞り、永祿元年、周防に如き、九年冬、その地に薨ず。曾孫秀賢、又學を以て聞こゆ。族を改めて、船橋と稱す。林羅山が徒を集めて新註を講ぜしとき、之を詬訾し、處士の無禮を擯斥せしもの、實に斯人なり。朝臣たゞ典例を重んじ、變通を知らず、必ずしも、之を以て、其人を尤むべからず、著すところ、慶長日件錄あり。

室町時代の將相

室町氏十三世、君臣相謀り、骨肉相呑み、爭亂常に絕えず。然れども、將相の家、學に嚮ふもの、決して少しとせず。亦た以て、この間を稱して暗黑時代となすの愈よ非なるを悟了すべし。二條良基・洞院公定・同實熙・三條西實隆・同公條等、皆博雅の君子。足利氏は、義滿・氏滿、皆かつて義堂等に學び、義政は百川學海・北堂書鈔の類を明國より購ひ、義尙殊に學を好み、長享元年、六角高賴を擊つて、近江の鈎里に陣するや、左氏春秋を幕中に講ぜしといふ。覇府の臣僚、今川了俊・細川賴之の如き、皆文事に晦からず。その他、諸侯伯、又往々にして、學術を奬勵するものあり。大內氏、歷世の富彊に賴り、その最と稱す、その詳は、次篇に述ぶべし。

第十六章　金澤文庫

地方の二學

國學の亡ぶや、すでに久し。而して、金澤文庫と足利學校とは、鎌倉の初より、室町の末に至るまで、兵馬倥偬の際、關東文敎の淵叢として、特に多大の注意を値す。

文庫の創立者

文庫は、北條氏の姻戚、金澤氏の建つるところなり。但だ其人に至りては、或は實時といひ、或は顯時といひ、或は貞顯といひ、殆んど一定せず。その然るもの、又自ら故あり。

地理上の金澤

金澤の地たるや、武藏國久良岐郡の南境に在り。むかしは、六浦庄の一部なりき。その地、海水屈曲して深く入り、青山環映、風光頗る明媚、かの瀟湘に擬したる八景の名、今に存す。相傳ふ、畫伯巨勢金岡、この地に遊び、勝景を圖せむと欲して、成らず、因つて筆を擲つて去れり、と。擲筆松と名づくるもの、今に能見堂下の丘腹に在り。かくの如くして、鎌倉覇府創立の當時より、觀光の爲に杖を曳くもの、少からず、且つ對岸の上總に往返する船舶、こゝを以て其津となせしが故に、大に繁榮を致し、頼經以下、王家の縉紳、迎へられて、東下するや、往々にして、この地に遊ぶ。こゝに於て、道路を修築し、鎌倉との聯絡は、愈よ其便を增すに至れり。

稱名寺

すでにして、その地、北條實時の所領に歸し、因つて別業を設け、又その傍に一寺を建て、號して稱名といふ。その寺鐘の銘は、實時の作りしところにして、文永六年と署するを見れば、創建の年月、大抵推測すべきのみ。而して、文庫は、寺後の谷中に在り。然れども、その當時は、固より寺の保管に屬せざりき。

北條氏の好學

北條氏は、元と關東武士の裔に過ぎざれども、歷世學を好むこと篤し。政子が嘗原爲長に命じて、貞觀政要を和譯せしめて、之を學びしこと、すでに前に述べたるが如く、泰時は、文士を延いて政務を論じ、又大江廣元以來の記錄書簡を類聚し、その目錄を調製せしめしことあり。時頼禪に入りしと雖も、亦た學を棄てず、才學の士を擇んで、將軍の左右に侍せしめしといふ。而して、實時の如き、特に篤學の士と稱すべかりき。

實時

實時學を好むと雖も、東阪の地、固より、良師なく、その初、獨學以て自ら樂むずてにして、建長四年、宗尊親王の東下するや、扈從中、清原敎隆といふものあり、その家學を傳へ、實時と相並んで、引付衆となり、ともに、吏務を治す。清原氏の家、素より藏

書に富む。實時之を借覽して、學をなし、且つ自ら之を謄寫す。這般の事情は、實時藏書の奥書を觀て知るべし。

文庫の創立

文庫の創建、何の年に在るかを知らざれども、藏書の奥書は、大抵建長五年にして、敎隆在世中は、之に囑して題跋せしめ、その歿後は、實時自ら之を志せり。又實時の後、顯時・貞顯の題署せるものあり。これ創立者を以て、或はその子孫に歸せむとする異說を生ぜしめし所以なれども、予が私見を以てすれば、たとひ、未だ備らずと雖も、實時の在世中、早く文庫を搦めしや、言を俟たず。稱名寺、すでに文永六年の前後に建立せられ、別業すでに其前に在りしとすれば、文庫の創始、亦た文永の頃に在りしならむ。實時の校せし群書治要の奥書によれば、文永七年、鎌倉に災あり、その藏書を烏有に歸すとあり。然らば、文庫は、此難に懲り、因つて創立せしものに非ざるか。而して、建治元年五月に至り、實時六浦の別業に籠居す。關東評定傳には依所勞也とあり、おもふに、閒居中は、塵事の繫累なく、鎌倉在勤中蒐集せし圖書を翻閱し、以て餘生を樂むを得たりしならむ。しかも、その期は、不幸にして長からず、その翌建治二年十月に至り、五十二歳を以て、溘然館舍を捐てぬ。こゝに於てか知る、文庫の創立は、文永七年より建治二年に至るまで、前後七年の間に在るべきを。

金澤氏歷世

實時の後、顯時・貞顯・貞將四世相繼いで、學を好む。殊に顯時の如きは、すでに、朱子の小學を讀み、貞顯の如き、前には南六波羅に在り、後には北六波羅に在り、その一生を通じて、學殖豐富なる公卿僧侶に面接し、愈よ好學の志を助長するを得、蒐集するところ、愈よ多く、皆之を文庫に藏せしならむ。文庫は、この時、すでに幾分公開の形跡あり。元弘三年五月、北條氏の亡ぶや、貞顯は高時とともに自殺し、貞將は敵を防いで戰死し、文庫は主なきに至れり。然れども稱名寺は、その年、寺領安堵したれば、幸に儼存し、文庫は、やがて、寺主の保管を受け、篤志の士の來遊講學を許し、全く公開の圖書館となれり。おもふに、鎌倉五山の僧侶の如き、こゝに儒書を閲せしもの、頗る多かりしならむ。

北條九代記中文庫の記事

北條九代記、志るすところ、文庫の創設を叙して、頗る簡明なり。曰く、義時の五男に、五郎實泰と云ひし人あり、後に龜谷殿と稱して、溫良慈仁の聞えあり。その子越後守實時は、金澤に居住す、後に稱名寺とぞ號しける。その後、越後守顯時より金澤を家號とし、稱名寺の內に、文庫を立て、和漢の群書を集められ內外兩典、諸史百家

醫陰神歌、世にあるほどの書典には、殘る所なし。金澤の文庫といふ、印をこしらへ、儒書には黑印、佛書には朱印、卷毎に押したり。讀書講學、望ある輩は、貴賤道俗、立籠りて、學文をつとめたり。金澤の學校とて、舊跡今も殘れり。越後守顯時は、文武の學を嗜みて、書典の癖とぞなりにける。その子貞顯、本より學業のつとめ怠らず、作文詩章には、當時名を得し人なりければ、執權の職に居ても、耻かしからずとぞ聞えける」と。

室町時代の文庫

文庫すでに兵燹を免れ、典籍毫も散佚せず、故に貞治康曆の間、義堂の之を訪ふや、圯上一篇看不足、鄴侯三萬欲何如の句あり。當時の文庫、三閣ありしことは、住僧湛睿の結界作法圖に見ゆ。その盛、想ふべきなり。その後、足利氏に至りて、稍や衰へしが、上杉憲實、之を再興すといふ。時は應永年中にして、足利學校の再興と前後せしならむ。之に次いで、太田道灌の慕景集に、釋菜を金澤文庫にて行ひしを記し、萬里の梅花無盡藏に文明龍集丙午十有八年小春二十有七巳亥進入金澤文庫とあるを見れば、文庫は戰國の初期、なほ存在せしを知るべし。慶長六年、德川家康の富士見文庫を創するや、文庫中の珍籍を移し去りしこと、泰平年表等に見ゆ。

所藏書目

文庫所藏の書目、その詳は、今知るべからず。林羅山の丙辰紀行に因れば、文選、左傳、群書治要、齊民要術、本朝文粹、續本朝文粹の如き、その當時、現存せしと稱す。而して、某氏の調査によれば、下に記する四十種の書は、かつて文庫中に存在せしこと疑なしといふ。試に其目を擧ぐれば、尙書正義(宋版)、左傳集解(宋版)、論語注疏(宋版)、集韵(宋版)、群要治要、初學記(宋版)、世說新語、太平御覽、外臺秘要、續易簡方、揚氏家藏方、太平聖惠方、景文宋公集(零本)、律令義解、令集解、法曹類林、續本朝文粹、扶桑略記、諸寺緣起集、新選橫笛、續日本紀、本朝文粹、百錬鈔、文選、後漢書、瑜伽師地論、一切經(宋版)、大般若經、圓覺了義經、潤背、齊民要術、三德指歸、論語正義、淸獬眼抄、類聚三代格、東鑑、東坡集、白氏文集、春秋正義等にして、就中、群書治要の如き、早く彼土に亡び、ひとり本邦に存する珍籍なり。

その始末

富士見文庫の藏本は、今や內閣の文庫に入れり。その他、群書治要、續日本紀は尾張德川氏の有に歸し、水戸前田の二家、又文庫の舊本數種を傳ふといふ。而して文庫の蹟、今に存すと雖も、その藏書は、文選、一切經、大般若經、元亨三年稱名寺の古圖及び近藤守重の討査に成れる金澤文庫考の數種に過ぎず。

藏書印

桂林漫錄に曰く、武藏國久良岐郡金澤の文庫は、北條越後守貞顯が建つるところなり、佛書には朱肉、儒書には黑肉を以て、印をおしたり文庫の舊地なる故、稱名寺には、當時の書籍數卷を存せりとは聞けり。然れども、まゝ書賈の手に落ちたるものあり。古物の散逸する、惜むべきことならずや、と。因つて印文の模形を載せたり。肉の朱黑を以て儒佛の書を分ちしといふに就いては、武藏風土記稿、疑を存せり。而して、今日文庫に傳ふる佛書、亦た往々にして黑印を捺するを見れば、前言蓋し誤れるか。

文庫の遺跡

文庫の存する、殆んど四百年、關左の風氣、未だ開けざりし時に方り、文敎の中心たるを得りしは、實に實時等の遺澤なり。物換り星移ること、こゝに幾百秋、斥鹵の地、半ば埋められ、風烟復た舊に非ず、蕭條たる門庭、草色烟の如く、八勝の一たりし稱名の晩鐘、徒に餘哀を擅くあり、六浦の水、一泓鑑を開き、春波綠にして洲渚彎環たる處、鷗語寂々、たゞ行人をして無限の情に堪へざらしむるも、誰か復た當日絃誦の地たるに想及せむや、噫。

第十七章　足利學校

その創立

足利學校は、下野國足利郡足利に在り。その遺蹟、今に儼存するを以て、頗る世に名あり。然れども、その創立の年月、遂に考ふべからず。或は古しへ國學の遺となすものあれども、むしろ悠遠なるに過ぐ。その之を小野篁に歸するもの、又數說あり、或は、その讀書の地なりといひ、或は、家塾なりといひ、或は、篁、國守たりしとき、之を草創すといひ、或は、天長九年、敕を奉じて草創すといひ、或は、鎌倉大草紙に承和九年、陸奥守たりしとき廢すといふを引き、更に古るしとなす。今に孔廟、篁の像を存すと雖も、篁が之に預かりしといふは、殆んど信ずべからず。柳菴隨筆の如き、之を辯ずる、頗る詳かなり、その之を足利氏に歸するものは、義兼之を創むといふ。要するに、その創建は、鎌倉以前に在るが如しと雖も、載籍すでに信を取るなく、唯だその大概を知れば足らむ。

元弘以後

毛野の地は、新田足利二氏の出でしところにして、元弘以後、兵亂常に絕えず、學校亦た廢せむとす。或は曰く、尊氏かつて勝軍の事を學校に禱り、彌よ驗あるや、京